
宙に舞う華

維緒理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宙に舞う華

【Nコード】

N4936A

【作者名】

維緒理

【あらすじ】

10年に及ぶ長い戦争が終り、戦勝記念に首都に建てられる神殿の神おろしの儀式の舞手を巷で一番人気の旅の一座から選ばれる事になった。その神おろしに選ばれるべく『シリア一座』のイリスは首都までの警護を『東より来たりし金色の獅子に身をゆだねよ、されば願い叶わん』という神託に基づき選んだラシルに頼み、半年に及ぶ旅が始まった。だが、イリスたちの目的はただ神殿の神おろしの役者に選ばれる事ではなく…

第1話

「神々しいですね」

隣に立っているミルテがそっと呟いた。彼が誉め言葉を口にする事はなかなか無いのだ。

珍しいな

そう揶揄してやろうかと思ったが、ラシルは声に出すのを憚かった。

そういう雰囲気があるにはあった。

広いとは言えないテント内だが、ひしめく様に客が入っている。まだ春先というのにテント内は人々の熱気でむせ返る暑さだ。誰一人言葉を発せず、身じろぎもせず、食い入るように同じ一点を見つめている。

視線の先には少女が1人。

年の頃は15、6くらいだろうか。頭に百合の花輪を被り、手にも一輪持っている。時期的に早いので造花であろう。その花より白いのが彼女の肌だ。客席より少し高いだけの簡易で造られた舞台上には屋根がなく、降り注ぐ太陽の光が彼女の肌に当たり、舞に合わせて四方に乱れるように輝き跳ねている。まるで異世界のように彼女の周りだけ浮きあがって見えた。

演目は『乙女の舞』。正式名称はちゃんとあるのだったが、民衆に絶大の人気のあり、どこの一座でも必ず舞われるこの舞は通称でそう呼ばれている。

彼女の差し出す手、足の運び、背中の中ごろまで伸ばされている濃い栗色の髪の毛の動きまで全てに無駄がなく正確だ。足に括られた鈴も意思を持っているかのように必要な時以外は音を立てない。

(ここまで整然とした舞は初めて見た)

ラシルはミルテがこの舞いを『神々しい』と表現したのは正しいと思った。ただ、神殿での神に捧げる舞ならいざ知らず、『乙女の舞』は初めて恋を覚えた若い女性がその喜びを体で表現する内容である。あそこまで完璧に隙無く舞っていいものだろうか。

(あれでは寄って来る男も寄ってこないな)

かえって舞いの興をそいでしまうのではないだろうか。

綺麗だが拒否されている

これがラシルの感じた率直な感想だ。

舞の終わりと共に歓声と盛大な拍手が惜しみなく舞手に送られた。ラシルと同じ感想をもった観客はここにはいないらしい。ミルテも傍からみればそう思えないであろうが、彼にしては最大限の拍手をしている。

優雅な一礼と共に舞い終わった少女がそでにはけると、人々はまだ夢心地の気分で立ち上がり出口に向かっていく。ラシルとミルテもそれに続いた。

「この辺りでは一番上手いと評判な一座だそうです。まあ、偽りなしとっていいんじゃないですかね。契約しますか？」

ミルテは初対面の人必ず騙される人あたりの良い笑みを浮かべながら、ラシルを振り返る。

「確かに首都までの警護にしては悪くない条件だからな」

ラシルは傭兵を生業としている。戦争が終わったとはいえ、まだまだ地方は治安が安定していないこともあり、傭兵の仕事は需要が高かった。ラシルはミルテをはじめ六人で行動を共にしている。

三ヶ月間、我がまま放題に育った貴族の息子とその荷物の護衛を

し、このカミルレの町でその口うるさい大荷物を昨日ようやく降ろしたばかりである。

「ああいうヤツこそ馬から落ちて踏まれた挙句脳みそかち割ってくたばっちまえばいいんですよ。これから仕事は値段で無く質で選ぶべきですね」

あまりの傍若無人の依頼人の態度に後一日でも長ければキレていただろうミルテの言葉に苦笑しつつもみな頷いていた。今回の旅芸人の依頼はその直後の事であり、ラシルは統括する者として次の仕事は慎重に選ばうと思っていた矢先の出来事であった。

『首都までの警護、何事も無く到達したあかつきには通常報酬の二倍の支払い』

これが旅芸人の座長を務めるシリアという女性の条件である。

(あまりにも条件が良すぎる)

いい条件には必ず裏があるものだ。仕事を終えたばかりなので突っぱねようとも思ったが、シリアの真剣な眼差しと丁重な態度に無碍にも断れず、ラシルはその場での即答を避けるにとどめた。今日再び他の仲間と引き合わせ、どうするか返答することにしたのだ。

約束の場所であるテント裏には仲間であるジンとモスがすでに来ていた。

「こんなに感動したのは久しぶりだよ。いや、初めてかもしれないなあ」

ジンは鍛え上げられた体躯をもつ大柄の男である。しかし童顔でおっとりとした性格通りの人当たりの良い顔立ちを持つ。素朴で少年のような黒い瞳は興奮気味に潤んでいた。

モスは一番年長者で、もうすぐ六十に手が届くはずである。物静かであり話さないが、ジンの言葉に首を立てに振り、同感を示した。

「そんなに喜んでもらえて嬉しいわ」

片手を腰にあて、長い巻きスカートを優雅に捌きながら一人の女性に近づいてきた。

座長のシリアだ。

堅く一つに結い上げられた濃い栗色の髪、くっきり引かれた眉と口紅に彼女の意思の強さが見て取れ、顔は美人と言っても差しさわりが無い。座長という立場からか苦労が顔に滲み出ており三十後半といったところだが、見た目より実際の年のほうが若いだろうとラシルは思っている。

「首都までの警護だったな」

ラシルの問いにシリアが口を開くより先に、後ろから高い悲鳴の

ような声が上がった。

「あなたたちがこれから私達を守ってくれるの？」

「なかなか男前ぞろいね」

「それ重要よね、これからよろしく」

走り寄ってきた三人の娘が好き勝手に言い、一人がラシルの手を取った。この三人はミルテやジン、モスを魅了したあの少女の前に踊っていた娘達であり、まだ舞衣装を着たままだった。ラシルもあの乙女の舞いを見るまではこの三人の舞いも息があつて綺麗だと思つていた。

「ユリア、チファ、コリー、早く着替えてきなさい」

シリアの一喝に肩を竦めつつも三人は素直に従った。呼ばれたうちのどの子かは分らないが軽くウインクをし、軽やかにテント内に戻っていく。

(しっかりと統制がとれているな)

ラシルはシリアを頼もしく眺めた。一人でもそういう人物がいてくれればこちらの仕事も楽になるのだ。

「ごめんなさいね、びっくりしたでしょう」

シリアは口に手を軽く当てて笑うと話を元に戻した。

「スカトル国の首都インセンで新しい神殿が造られているのはご存

「知かしら」

半年前、ラシルがわがまま息子の依頼を受けた町八バルでもその噂で持ちきりであった。

「噂ではかなり壮麗な建物らしいな」

「私もまだ見たことがないから。でも話ではそうらしいわね。それで、来春にそこで神降ろしの儀式が行われるのだけれど、その舞手が巷で人気の一座から選ばれるのよ」

「それは初耳だ」

ラシルはミルテに視線を投げかけたが、首を横に振った。モスやジンも同様らしい。

「普通は知らなくて当然ね。同業者の間ではこの話題で持ち切りだけれど」

シリアは瞳を閉じ軽く息をはく。

「うちはこの辺りでは有名だけれど、首都のあたりでは残念ながらまだ無名なの。だから各都市をまわって知名度を上げる必要があるのよ。真っ直ぐ首都へ行くより拘束時間が長いから報酬を二倍にしたの。どうしてもあなたたちをお願いしたかったから」

シリアは艶やかな唇に力を込めた。

「東より来たりし金色の獅子に身をゆだねよ、されば願い叶わん」

「占ですか？ 確かにラシルの髪は金色ですけどね」

ミルテはラシルの頭に目をやる。あまりに鮮やかな明るいブロンドなので人目を引くのを嫌がり普段から布をまいているのだが、いざ戦闘になったときも髪が邪魔にならず色々都合がいい。ここ何年か髪を切っていないので布からはみ出した髪はそのまま肩へ流している。

ラシルをはじめ傭兵の多くは自分の判断力を頼りにしているが、普通の人々は神の信託である「占」で物事を決め、生活をしている。自分達がそうではないからと言って、神中心の慣習を軽視しているわけではない。今回の統一戦争が始まる前は様々な国が乱立し、その数だけ神も存在していた。今回統一を果たしたスカトル国は多神教であり、各国の神を受け入れつつ支配していった所に成功の鍵があったといってもいい。そのため、それぞれの神を祀る祭りや儀式はほぼそのまま残り、祭りに花を添える旅芸人や神職は食うに困らないのだ。

「警護人数は六人と聞いたが、あなたとさっきの三人と…」

「ええ、それについてお願いがあるの。ナナ、こちらへいらっしやい」

シリアはテントに向かって叫ぶと、間もなく入り口から顔だけ出す少女が見えた。七、八歳くらいだろうか。しかしラシルをはじめ見知らぬ人が大勢いるためか、すぐに中へ入ってしまう。

「ちょっと待ってて下さる？」

軽く肩をすくめるとシリアはテントの方へ振り返った。ラシルも同様にそちらに眼を向けると、入り口からナナと呼ばれる少女が少年に手を引かれて出て来た。

「先程の…」

ラシルは軽く言葉を失った。

先程観衆の目を奪った舞手は少女とばかり思っていたのだが、この少年だったのだ。髪も短く、化粧もすっかり落としているので舞台上の華やかさはないが、華奢な体つきといい物腰といい、間違いなく同一人物だ。

「君がああの舞を舞ってたんだ。すごいね」

「なんか腑に落ちませんね」

ジンは素直に驚嘆を声に出し、出し抜かれるのが大嫌いなミルテはしかめっ面をした。

「別に男の子が舞ってはいけないという決まりはないからね。うちでは彼が一番うまいから自然とこうなったのよ」

思い通りの反応をシリアは楽しんでいるようだ。少年は場を和ますように微笑んだ。

（悪くないな）

心に爽やかな風が一陣吹いたようだ。舞台上の舞は上手いが無機質な彼より今の笑顔の彼の方がラシルは気に入った。柔らかそうな濃い茶色の髪も同じ色の瞳も、笑うときの口端の上がり具合も全て神が選び抜き、考え抜いて配置したものに違いない。自然と瞳が離せないのも神が与えた彼の才能なのであろうか。

「おや、そういうことか」

隣からミルテの軽い呟きが聞こえたが、今はそれにかまっていられない気がした。

シリアは少年からナナを引き寄せるとしゃがみ込み、ナナの肩に手を置く。

「この子をなにがあっても一番に守って欲しいのよ。一番腕が立つのは誰？」

ジンとミルテは軽く眼を合わせたが、何故この小さな少女を一番に守らなければいけないのか、と疑問を口に出しはしなかった。傭兵になる者には訳ありの者が多いので、詮索しないのが暗黙の決まりになっている。依頼人にも必要以上に詮索しない。諸国を巡る一座にも何かしらの事情があるのだろう。

「それなら、ラシルでしょう」

背中を一つ叩くミルテに、我に返ったラシルは気まずそうに一つ咳払いをした。

ラシルが一步前に進み出ると、反対にナナは怯えたように一步下がる。

「あー、嫌われちゃいましたね」

愉快そうに笑うミルテをラシルは横目で睨んだ。

「俺は悪いが子供に好かれた試しはないんだ。そこまで言うならミルテがやれ」

「お断りします。子供は無理です」

「即答するな。お前のその人当たりのいい偽善者面でなんとかしろ」

「いつ私が偽善者……」

「ケンカしないでくださいよう」

ジンが二人の間を割るようを通り過ぎ、ナナの前にしゃがむとにつこり微笑んだ。手にはちゃっかりいつの間にも摘んできたのか白い小花が握られている。

ラシルよりも体の大きいジンが差し出した花をナナは笑って受け取った。小さいながら大人びた印象のナナも笑うと上の右前歯が欠けており、急に子供らしい表情に変わった。

「小さくても大きくても女の好きなものは同じなんですねぇ」

ミルテはなかば呆れ、なかば感心したように言って真ん中で分けられた黒髪を掻き揚げた。

「ジンは誠実で腕も立つから信用していい」

ラシルはシリアを安心させるために言った。実際、ミルテ、ジン、モスは腕のいい剣術の使い手で、安心して背中を預けられる。

「それではジン、ナナをよろしくね」

「は、はい。がんばります」

にっこり微笑むシリアにジンは声を裏返らせて答えた。

「こっちもですか？ ちょっと気候が良くなるとこれだから……」

ラシルにも今度はしつかりミルテの呆れ口調の呟きが聞こえた。

次にシリアは少年の後ろに立つと彼の肩に手を添えた。

「で、最後はこの子、イリスよ」

「女神の名前と同じですね。まあ、相応しいといえば相応しいか」

ミルテのあけすけな物言いにイリスは軽く苦笑した。シリアはイリスの隣に立ち、微笑みながらも軽く眉を寄せた。

「これで全員なの。イリス以外は女子供ばかりだから首都まで護衛を付けたくなる理由も少しは分るでしょう？」

「それでは、イリスにはこのラシルを付けましょう」

ミルテは唐突に提案をした。

「おい」

ラシルの制止を無視し、ミルテはさらに続ける。

「見たところ彼が一番の稼ぎ頭なんでしょう？ 途中で何かあったらそれこそ事です」

「そうね…」

シリアはイリスと顔を合わせたか、一考する価値があると顔に出ている。

「イリスもラシルが怖いですか？」

ナナの例を受けてのミルテの質問に、ラシルとナナ以外は皆苦笑した。

「怖くないよ。…今のところはね」

「では、決まりですね」

イリスの返答に一つ手を叩くとミルテは話を無理やりまとめてしまった。

「まだ、契約するとは決まってるぞ」

囁くラシルをミルテは引っ張り、話の輪の中から連れ出した。

「見たところ問題はなさそうだし、たまにはゆっくり首都へ帰るのもいいんじゃないですか？ のんびり仕事で手取り二倍」

ミルテはさらにラシルの耳元へ近づくと意味ありげな笑みを浮かべる。

「そしてさっきの提案はあなたへの貸しにしておきます。ちゃんと返してくださいね」

ラシルに言い返す間を与えず、ミルテはまた話の輪の中に戻っていった。

「なにが、『貸しにしておきますね』だ」

そう呟きながらもラシルは心が軽く浮き立っていることを認めざるを得なかった。

久しぶりの感覚に少し戸惑いながらラシルはシリアと契約を結ぶことを決めた。モスもゾンも異存はないと頷く。実はあと二人仲間がいるのだが、この展開に大喜びすることは分っていた。

「それでは警護を引き受けよう。条件はそちらが提示した通りでいい」

ラシルとシリアはそれぞれの契約内容を牛の皮に見立てた紙に書き込んだ。契約を破った時は生贄に使われる牛の様に殺されても構わないという意味で、昔は本物の皮が使われていたらしい。

最後におのおのの指の先を少し切り、血判を押す。

「これで成立ね。明日からよろしく」

契約書を交換し、互いに握手した。

「あ、雨」

イリスは空を見上げて片手を差し出す。

肌触りの良い絹のような細かい雨が、晴れている空から優しく降り注いできた。

雨はどここの国でも神に願いが聞き届けられた事を意味している。人々にとって適度な雨は吉報なのだ。

「神の祝福ね。いい契約なのだわ」

シリアは胸に下げている袋を握った。その慨深い物言いに、その場の全ての者が黙しながらも同意していた。

第2話

「神の認める契約が成立したお祝いに夕飯をご一緒しない？」

今のシリアはとても機嫌がいい、とイリスは感じた。吉報の雨もあり、シリアの表情は明るい。座長の機嫌がいい方が他の仲間ものびのびとしていられるのでいい傾向だ。

「それは構わないが、この町は来たばかりでどこがいいか分からないんだ」

ラシルは率直に認める。

「それなら任せて。素馨亭が一番言い料理を出すのよ。料金も良心的だしね」

「そこは宿にしているところだ」

「あら、初めての割にはお眼が高いわね。では、どうせなら別のところがいいかしら」

「いや、旨いからそこで構わない」

「テントを片付けたらそちらへ向かいますわ。その時にまた会いましょう」

「あ、あのっ」

踵をかえすシリアをジンは躊躇いながらも呼び止め、ズボンで両手のひらを拭きながら一歩前に出た。

「よければ手伝います」

「まあ、ありがとう。助かるわ」

シリアの艶やかな笑顔にジンは顔をくしゃくしゃにして笑った。モスも同意とばかりに頷く。

ミルテは用事がありますので時間には宿に行きます、と去っていった。

(短時間だけど結構性格が分ってきたかも)

イリスはミルテの背中を眺めつつ、後一人だけ進退を決めていないラシルに目を移した。

「別に用事はないからな」

「じゃあ、舞台の板を外すの手伝ってくれる？」

イリスの願いにラシルは軽く頷き、黙って横に並んだ。ラシルの眼はさりげなくだが辺りを観察している。職業柄から来るものだろうが、本人も気づいていない癖なのかもしれない。歩きたびに頭に

巻かれた布から漏れた艶やかな明るい金髪が揺れている。背が高く、すらつとしている体にバランスよく筋肉がついていた。

（舞台栄えしそつだなあ）

神話に出てくる邪神トナリドから女神ミモザを救い出す勇者グレンの役をやらせてみたいとイリスは思った。人気のある主題であるし、彼の端正な容姿なら客を大勢呼べるであろう。

周りでは各自決められた仕事をてきぱきとこなしている。イリスもシリアに怒られないうちに仕事に取り掛かる事にした。

「皆よく働くな」

ラシルは感心した声を出す。

「ここは殆ど女ばかりだからね。重い物だって自分で運ばなきゃいけないんだ」

「一人だけ男で肩身狭いだろ」

「まあね、でもあまり意識されてないみたい。されても困るけど」

イリスは少し肩を竦め、取り外した板をラシルに渡した。

力強い手助けが増えたため、いつもより早く片づけが終る。全ての荷物を馬車に詰め込むと、片付け中は邪魔しないというシリアの言いつけを守ったナナが待ちかねたようにイリスに走りより腕を掴んだ。イリスはナナのお気に入りでも懐かれているが、今日の彼女の様子は尋常ではなかった。

「どうしたの？」

イリスの問いには首を振って答えなかったが、さらにきゅっと腕に力を入れた。

「仲がいいんだな」

隣に立つラシルの言葉にナナはイリスの蔭に隠れる。

「あつちいこうよ、イリス」

ナナは小声で背中から呟いた。

「そのうち慣れると思うから気にしないで。ナナも怖くないから大丈夫だよ」

イリスはあえて微笑んで二人を取り成す。これからしばらく共に旅をするのだからお互いにいい印象でいた方がいいだろう。

だが、イリスの思いもむなしくナナは睨みこそすれ微笑みはしな

かった。救いはラシルが気にしていないと言ってくれたことだ。

(前途多難だなあ)

二人の顔を交互に見てイリスは軽いため息を吐いた。

全ての荷物を詰め込み、約束の『素馨亭』へ出発しようとしたところ、前方から走り寄る人影が見えた。

「アクア」

ラシルはそう呟くと一歩前へ進み出る。

アクアと呼ばれた少年はイリスと同じくらいの年恰好だ。全速力で走って来たからか、息を切らし、前かがみになって腹を押さええている。

「どつした」

アクアの息切れが治まった頃を見計らい、ラシルが話しかけた。

「あなたの恋人がさらわれた」

途端にラシルの顔が険しくなる。

「亭主は何をしていた。あれほどじっくり見ておけといったのに」

ラシルは軽く舌打ちすると、先に戻る、と言い走り去る。イリスはラシルの後を追おうとしたアクアの腕を掴んだ。

「何？ 忙しいんだけど」

アクアは苛立った声をあげる。

「誰がさらわれたの？ よかったら探すの手伝っけど」

昔よりは少なくなったが、まだよく聞く話でもある。

「人じゃない。う・ま」

「馬？」

「そ、でもただの馬じゃない。今ではなかなか手に入らないコヨルテ馬」

そう言い放ち、アクアはラシルに追いつこうとまた全速力で走っていった。

（コヨルテ馬…）

イリスは自然とアクアの後を追って走り出していた。

『素馨亭』の前で先に到着していたラシルはその主人から詳しい事情を聞きだそうとしたが、成功したとはいえなかった。亭主は実際盗まれたところを見たわけではないし、ラシルのあまりの剣幕に萎縮し、説明らしい説明が出来ない。それがさらにラシルの苛立ちを掻き立て、亭主の焦りに拍車をかける悪循環に陥っていた。

「見てた人が東に走り去ったって言った」

追いついたアクアはラシルの腕を取ると町の東門へ出る道へ引張っていく。

(東?)

アクアとほぼ同時に追いついたイリスに疑問が浮かんだ。東は首都へ続く幹線道で道幅も広く、人通りが多い。人目に付きやすいし、両端に並ぶ商店目当てに練り出した人々が邪魔をするだろう。しかも今日は春の祭りの真最中でいつもよりさらに人が多い。馬を連れ

て逃げるのにはあまり向いていない気がした。

(僕なら…そうだな、南門の外に広がるクミンの森に一旦隠して、夜動くかな。森を抜けたら川が流れているし、船を用意しておくのもいいかも)

とりあえず東はラシルとアクアが行っている。念のためイリスは南へ行くことにした。

なるべく音を立てないように気配を消してイリスは森に入った。先程やんだ雨で土が優しく香る。そして同時に柔らかな土に所々残る足跡も見つけた。

(やっぱり間違ってた)

戻ってラシル達に知らせた方がいいだろうと思ったが、場所だけでも確認しておこうとそのまま跡を追うことにした。この森は岩も多く、隠れるのには最適だ。

足跡は羊歯が覆う岩陰で途切れていた。そこを降りた窪みにいるらしい。耳を澄ますと軽い馬の鼻息が聞かれる。

(ここか)

イリスは高い所から様子を覗くため岩を登りかけたところ、先客に見覚えのある姿を見つけた。

「アクア？」

イリスは驚きを抑えつつ、声を殺して近付く。

突然声をかけたからか、アクアはびくつと体を震わせ振り向いた。

「えっと、誰だっけ？」

イリスと同様に声を落とし、眉をひそめる。

「そうか、まだ名前いってなかったね。僕はイリス。東へ行っただんなかったの？」

アクアは一瞬眼を彷徨わせ、次に納得したように眼と口を開いた。

「あ、うん。東はラシルに任せただ」

「ラシルに知らせる？ 見たところ直ぐに行動に移しそうにないけど」

右下手に眼をやると岩と木に隠れるように馬がいた。木の幹に繋がれ、機嫌悪そうに前足で土を掘り返している。コヨルテ馬特有の栗毛と白い鬣で、ここから見る限りでも毛艶がよくがちりした骨格をしており、最高級に難なく入る程のいい馬だった。盗賊と思しき男三人は、馬から少し離れた岩を背にし、思い思いの恰好で寛いでいる。

「それより」

アクアはいたずらっぽく微笑む。

「何？」

「俺たちで捕まえよう。手伝ってくれるよね？」

「できるかなあ」

イリスはアクアを眺めた。自分もアクアも華奢な体つきで、盗賊に立ち向かったとしても人数的にも体力的にも勝てそうにない。

「出来る出来る。はい、これ」

アクアはポケットから布を二枚取り出すと一枚はイリスに渡し、一枚は自分の鼻と口を覆った。

「同じようにしないと、辛いよ」

言われるままにイリスはアクアと同じ出で立ちとなる。

「いって言うまで眼を開けないでね」

イリスに眼を瞑らせ、アクアはポケットから三つ黒い球を取り出し、球から伸びた導火線に火をつけると静かに男達のいる下の窪みへ投げ入れた。

イリスの耳に何かが噴出す音と、慌てふためく声が入ってくる。アクアからの合図はなく、何が起きているのか分らないまま待たされる時間は長く感じられた。

「もうそろそろいいかな？　じゃあ眼を開けて、これで奴ら縛っちゃってよ」

アクアは腰に巻いていた縄を解いてイリスに渡すと岩肌を滑って降りた。

「ちよっ、待っ…」

戸惑いながらイリスも岩肌を滑り降りた。地面には男達が目や喉を押さえてのた打ち回っている。イリスも眼に軽く刺激を感じた。

「何したの？」

「ちよっと刺激物をね。あーもう、縛りにくいなあ」

そういつてアクアは近くの木の枝を拾うと、ばたばたとのた打ち回る男に振り下ろす。

「うわっ！」

イリスは驚いて声を荒げた。当のアクアは声をあげて笑い、ぐったりした男から武器を取り上げた。

「軽く寝てもらおうだけだから大丈夫だって。ちゃんと加減しているから死にやしないよ。…多分ね」

最後の恐ろしい一言は小声で付け加えた。

「これ、縛つといて」

意識のない男を指差しながらイリスにいい、残りの二人も手早く気を失わせた。

(慣れてるな)

呆気にとられながら、イリスは舞台道具が荷崩れしない様にしっかり縛るのと同じ方法で男の手と足をきっちり縛り上げた。これなら彼らは自分で縄を解くことはできない。

隣にやってきたアクアは、にやっと笑いかけた。

「イリスって人縛るの上手だね。慣れてるなあ。もしかしてそういう趣味ある？」

「そんな趣味あるかよ」

アクアの意味ありげな言い様が心外だ。だが、意に反して頬が赤らむ。その反応を笑うアクアを見て、イリスはからかわれた事が悔しくなり軽く睨みあげた。

「冗談だつて。残りの二人もお願いするよ。意識を戻さないうちにね」

アクアは手にしていた木の棒を投げ捨て、その場を立ち去った。イリスは腑に落ちないながらも言われた通り残りを片付け始めた。

(そういえば、コヨルテ馬！)

思いがけない展開にすっかり忘れていた。

急いで残りの二人を縛り上げ、イリスが馬のいるところへ走り寄ると、先に来ていたアクアが困り顔で振り向いた。

「暴れて手に終えないんだけど」

今までの騒ぎに興奮したのかコヨルテ馬は首を大きく振り、蹄を蹴り上げて嘶いている。繋がれている綱が今にも切れそうだ。

コヨルテ馬は姿形が優美で走らせれば力強く、全く疲れを知らない。それが人気のある所以であり、ラシルも『恋人』と呼ぶくらい気に入っているであろう。ただ難点は気性の荒い事で、一度暴れ出すとなかなか治まらない。辛うじて繋がっている縄が切れたらそのままどこかへ走り去ってしまうだろう。

アクアは何とか宥めようと必死だ。

「俺、仲間だろ？ 思い出せよ」

「早くラシルを呼んでこよう。飼い主が来たら落ち着くよ」

気性が荒く、気位が高いので乗り手を選ぶ。だが、一度信用した相手には不思議なほどおとなしく言うことを聞くのだ。

「駄目だよ。そんな時間はないし、それに」

アクアは軽く言い淀んだ。

「約束しちゃったんだよね、『素馨亭』の亭主と。報酬と引き換え

にラシルに気づかれず馬を返すって」

「…そういうことか」

一度盗まれたとはいえ亭主の手でラシルにコヨルテ馬を返した方がラシルの亭主に対する心証が良くなることは間違いない。店の前でおたおたしていた亭主の顔が浮かんだ。

イリスは軽くため息をついた。

「危ないからあつちに下がっててくれる？」

「何すんの？」

「馬を鎮めたいんだろっ？」

アクアは訝しがりながらもイリスの指差す方向へ後ずさりした。

イリスはアクアが離れたことを確認するとコヨルテ馬に近づいた。相変わらず耳を伏せ、体を震わせて興奮している。

この馬は一度暴れ出すと手に負えない。だがなあ、唯一すぐに治まる方法があるんだ。知りたいか？

うん！ どうするの？

歌うんだ

歌？ 馬って人の言葉分るんだ

内容は重要じゃない。大切なのは旋律と音の強弱だ。これから教える歌は軽々しく他のヤツに教えちゃならんぞ。約束できるか？

出来るよ。だから早く教えて！

暖かな大きな手の感触と子供の頃に叩き込まれた旋律を思い出す。イリスは少し高めの声でコヨルテ馬に向かい、歌い始めた。

コヨルテ馬は耳を左右前後に振り、暫くは鼻息荒く前足を地面に叩きつけていたが、程なく落ち着きを取り戻していった。

(綺麗な馬)

イリスは眼を細めて笑うと馬の首筋にそっと触れた。馬も顔を寄せ、イリスの髪を甘噛みする。

「すげー、イリス。何したの？」

再び馬を興奮させないようにゆっくりアクアは近づいてくる。その目には感嘆の色が浮かんでいた。

「ちょっとね」

イリスは笑ってはぐらかした。

「じゃあ、かわいそうな亭主に引き渡しに行こうか」

街中を引いて歩くのは目立つので、イリスとコヨルテ馬は森の入り口付近で待ち、アクアが亭主を呼びに行った。

馬の体を触り、どこか怪我をしていないか確かめる。幸い大丈夫

なようだ。

「お待たせしました」

振り向けば安心して脱力している緩み顔の亭主がイリスの手をが
つちり握り、ありがとうと言いながら二、三回大きく上下に振った。

その後ろには彼の従者がおり、彼に縛り上げた男達の処理を頼み、
コヨルテ馬の手綱を渡した。馬は十分落ち着いているので、乗ろう
とさえしなければ多分大丈夫だろう。イリスは後姿を見送った。

35

「えーっと、顔は知っているんだけど、名前が分らないんだよね」

亭主と従者、馬が去った後、その場に残った二人のうちの一人が
そう言っつてイリスに近寄ってきた。

イリスはその二人の顔を見比べて驚く。

（まったく一緒だ）

アクアが二人いる。

背格好はもちろんの事、固めな茶色の髪の毛の跳ね具合も、顔に散らばるそばかすの位置もすべてが同じで、ここまでそっくりな双子はじめて見た。

「イリスっていうんだよ」

一人が一人に答える。眼を凝らして違いを探し出そうとしたが、今のイリスには無理だった。

「…アクアはどっち？」

「はい」

イリスの問いに二人同時に、同じ声で同じ手を上げた。

「冗談抜きで、どっちがアクア？」

二人は同じように肩を竦め、一人だけ手を下ろした。

「さっき一緒にコヨルテ馬を見つけたのはアクアでいいの？」

「残念。俺じゃなくて、メノウ。俺はずっとラシルといたから。大変だったよ、ジンやモスも探すって言い出すし」

と言うことはずっとアクアだと思っていたのはメノウだったのだ。

「言ってくれたらよかったのに」

「だってこういう展開を見られるのが双子の醍醐味だろ？」

悪びれずにいう様子に、イリスの顔に自然と笑みが浮かぶ。

イリスの笑顔に安心したのか、メノウとアクアも同時に笑った。釣り目がちな目がさらに上がる。メノウはアクアに今までの経緯を手短に話した。

「イリスって結構やるんだぜ。暴れていた馬を一発で宥めたんだ」

メノウは自分の自慢話をするように言った。

「じゃあ、これは三人で山分けだな」

アクアの手には亭主からもらったのだろう硬貨の入った袋が握られていた。

「別にいいよ。たいしたことじゃないし」

「気が変わらないうちにもらっとけよ。あって困るものじゃないし」

それにな、とアクアとメノウは顔を合わせる。

「もしラシルに今日のことかばれた時、イリスがいた方がいいんだよ。さすがに依頼人は叱れないだろ？」

「なるほどね」

ちゃっかりした性格だがこの二人は憎めないといリスは思った。それにその硬貨でナナに何か買ってあげてもいい。

「じゃあ、遠慮なくもらおうよ」

「おー、これからよろしく」

「うん、こちらこそ」

硬貨を正確に三等分にし、お互いの顔には同じ秘密を分け合う同士の表情が浮かんでいた。今まで同じ年位の男の友達がいなかったので、イリスは正直に嬉しかった。

町に戻り、『素馨亭』での夕食は、亭主の計らいでかなり豪華なものになった。

全員が座れるテーブルはなく、仲良くなったイリスは双子と同じテーブルに付き、次々と出される料理に舌鼓を打った。

「このくらいの料理ですむなら安いものだよね。コヨルテ馬を弁償しようとしたら大変だもん」

メノウは当然のように二皿目を要求する。

「俺たちの報酬を併せてもね」

アクアは小声で付け加えた。

「でも、もし失敗したらどうするつもりだったの？」

今回は上手くいったものの、下手をすれば馬を捕まえることができただけでなく、今思えば自分達にも危害が及ぶかもしれないのだ。

「そんなの」

いったん口の中のものを飲み込んでからメノウは続けた。

「その時は素直にラシルに言えばいいんだよ。あいつなら何とかしちやうからさ」

迷いもせず答えた。隣ではアクアも肉をほお張りながら頷く。

(なんだかんだ言って、しっかりした信頼関係があるんだな)

イリスは明日から自分の警護に付くラシルに目をやった。

イリスの視線に初めに気づいたのはミルテだった。彼に呼ばれたラシルは、ミルテに何か一言言ってから顔をイリスへ向ける。

特に理由も無かったが、目が合ったのでイリスは微笑んだ。それ

に答え、ラシルは軽く手にしていた杯を上げる。

東より来たりし金色の獅子に身をゆだねよ、されば願い叶わん

ナナの口から発せられた神託の通り、時間が動き出した。

(金色の獅子…)

ラシルは再び会話の輪に戻っていったが、ランプの炎の揺らめきに合わせて輝く彼の黄金色の髪をイリスは暫く見つめていた。

第3話

春はどここの町でも必ず祭りが行われる。秋に蒔いた作物の収穫祭で神への感謝の気持ちをあらわし、これから蒔く種への豊穰の祈りをささげる。春は始まりと終わりが交差する。時の終わりと新しい命の循環。人々にとって春は一年の中で一番重要な季節だ。そして旅の一座にとっても稼ぎ時だ。この時期はどここの一座も祭りのある町を渡り歩く。

(今日からまた新たな任務が始まるな)

ラシルは昨日災難に巻き込まれたコヨルテ馬を曳き一座に合流した。

後ろではジンが青い顔をして吐き気と戦いながら自分の馬を連れている。

「二日酔いみたいですよ」

ミルテが頭でジンを指した。

ジンはあまり飲めない方なのだが、昨晩はシリアに付き合い濃い麦芽酒を少なくとも七、八杯は飲み、途中からテーブルと一体になっていた。

一方のシリアは昨晚、顔色一つ変えずに最後まで飲み倒していたのだが、今朝も元気に出発の準備をこなしている。

ふらふらしているジンの様子にラシルは軽いため息をついた。

「おさまるまでモスの馬車に乗ってる」

ジンは力なく首を横にふる。

「俺はナナの警護がありますから…」

仕事はきっちりするようだ。ジンは自分の馬の頭をナナのいる馬車へ向けた。

「後でアクアかメノウに薬草を煎じてもらえ」

ラシルの言葉にジンは弱々しく頷いた。

「これからジンはオコサマと同じテーブルに付けてやりましょうね」

ミルテはそう鼻で笑ったが、彼は全く酒と言うものを飲まない。

ラシルはジンの味方についてやることにした。

「ジンもミルテにだけは言われたくないと思うぞ」

「自分の限界がわからない所がまだまだ子供なんです。俺は飲めないことがわかってますからね、無理はしないんです。その違いがわかりますか？」

「分るが、まだそこまで枯れたくないね」

まだ出来ないことは無いと思いたい。自分でも青臭いとは思うが、色々なことに立ち向かうのは嫌いではないのだ。

「若いですね」

「同じ年だろ」

「そうでしたっけ」

ミルテはさも今まで知らなかったように答えた。

「もうそろそろ出発するってシリアが言ってたけど、大丈夫？ 仲いいんだね、二人は」

気づけばイリスが笑いをこらえながら傍らに立っていた。

「仲良くみえるそうですよ」

ミルテは眉間に皺をつくり、首を振った。

「違った？」

こっそりラシルに尋ねるイリスにラシルは苦笑する。

「こっちはいつでも出発できるぞ。それに心配しなくていい。ミルテは心内を言い当てられるとああいう態度をとるんだ。ある意味分

りやすいだろ？」

ますます嫌そうな顔をするミルテを笑ってから、ラシルはイリスの長い瞳へ視線を移した。彼の思慮深そうな濃い瞳はコヨルテ馬にむけられている。

「馬が好きなのか？」

ラシルはイリスの隣に立ち、コヨルテ馬の首筋を撫でた。甘えたように馬が息をはいた。

「コヨルテ馬が好きなんだ。名前は？」

「リス」

『復活』の象徴を表す花の名前だ。

そつとイリスはリスの長い鼻の頭を撫でる。

「いい名前だね。疲れ知らずで走り続ける様にあってるよ。まるで走りながら復活しているみたいだね」

「詳しいな」

感心するラシルとイリスの間にメノウが割って入ってきた。

「そりゃイリスはさあ……」

話し続けようとするメノウをイリスは軽く彼の腕を押さえて黙らせる。メノウはイリスを見て、次にラシルを見て笑ってごまかした。

昨日からうすうす気づいていたが、ラシルは二人の様子から昨日のコヨルテ馬の件にイリスと双子が関わっていることを確信した。

「悪い奴らではないから仲良くしてやってくれ。メノウもアクアも同じ年頃の友達ができて喜んでるんだ」

イリスも同じ気持ちなのか、夜明けに花が香るようにふわりと微笑む。

「そうやって双子を甘やかさないでくださいよ。図に乗りますから」

ミルテは隣にいたアクアの頬をつねった。

「かわりにこうやってミルテにいじめられているんだ」

「こんなの、いじているうちにはいりませんよ。どういづのが『いじめる』にあてはまるか知りたいですか？」

にやりと笑うミルテの手を邪険に払ったアクアは、つねられた頬に手をそっと当てた。代わりにメノウが参戦する。

「おー、やってもらおうじゃん。倍返しにしてくれるわ」

そのままミルテと言い合いをはじめた。

ラシルは呆れ顔で三人から顔をそらす。

「いつものことだから。それより」

イリスを見て、リスに目を移した。

「乗ってみるか？」

リスは気に入らない相手は絶対乗せないが、これだけ彼が触っても嫌がらないので多分大丈夫だろう。

「うん！ あ、でも遠慮する」

一瞬目を輝かせたイリスだが、直ぐに首を横に振った。

「どうして？」

「日焼けしたらシリアに怒られる。どっちかといえば肌が赤くなるだけで焼けない方なんだけどね」

確かに健康的な小麦色の肌では『乙女の舞』も興がそがれてしまっただろう。

「長いこと乗らなければいい。それに焼けなければいいんだろ？」

ラシルは馬車から一枚大きな布を取りにいき、イリスの頭からすっぽりかぶせた。

布からもがいて顔をだすイリスの笑顔につられ、ラシルは一緒に微笑みたくなる気持ちをグツと抑えた。ミルテに見られたら何を言われるか分らない。そこまで分っていたのにラシルの手はイリスの乱れた髪を直していた。

「ありがとう」

イリスの言葉に我に返ったラシルは、もう一度今度はきれいに布を頭に被せ、照れ隠しにイリスの頭を軽く叩いた。

「これならシリアに怒られないだろ」

「うん」

頷いて早速馬に跨ろうとするイリスの細い腰を掴み手助けをする。ほのかに花の甘い香りがラシルの鼻を掠めた。

「よろしくね、リス」

イリスはリスの長く白い鬘を優しく撫ぜた。リスはおとなしくそばの草を食んでいる。イリスを乗り手として許したようだ。

「では、出発」

抜けるような青空の下、シリアの低いがよく通る声と共に首都への旅が始まった。

「ラシルはどこでリスに出会ったの？」

清々しい春の風に吹かれながら列の先頭で馬を曳くラシルに馬上からイリスは尋ねた。

「こいつか？」

ラシルは目を細めリスを眺める。自然と沸く笑みを素直に表せる数少ない相手だ。

「トシスの市場だ。目が合った時からこいつとは運命を感じたな」
後方にいたミルテが馬の足を速め、イリスに並ぶように横についた。

「誰も近づけず、馬主さえ手をこまねいていたリスに選ばれたのがよっぽど嬉しいんです。街の娘達にはつれないのに、あの馬の可愛がりようは異常だと噂されましたよ」

面と向かつては言われていないが、『ラシルは人が愛せない』とまで言われていたようだ。

「私と暮らしたら、いつでも天国にいるような気分にしてあげる」

言い寄る街の娘達の自信に満ちた言動には正直驚かされ、辟易さえもする。調子のいい事を言っておきながら脈がなければ違う相手に同じ事を言うからだ。彼女達にとって根無し草の多い傭兵との恋などゲームの一つくらいにしか考えていないのだろう。

（もう十六、七の何でもやりたい年頃でもあるまいし）

それよりも心のつながりが欲しい。それは若い頃よりも年をとるにつれ強くなっていく願望であった。それは人でなくてもいい。冗談でなくリスを一目見た時から目が離せなくなったのだ。自分の直感を信じることにしているラシルは早速交渉し、リスを手に入れた。

リスはラシル以外、他の仲間たちの世話を受けても背に乗せようとはしない。それは口に出して言わないものの、ラシルの心の中でかなりの優越感を満たしていた。

（だが、不思議とイリスが乗るのは許せるな）

きつとイリスが本当にコヨルテ馬を好きな気持ちが生かすに伝わったのだろうか、ラシルは世界で二人だけに許された特権の様にさえ

思えてきた。

「…そうですね」

物思いに浸りこんでいたラシルは、ミルテの言葉の最後しか聞き取ることが出来なかった。

「すまん、よく聞こえなかった」

ミルテは肩を軽く竦めて再び言った。

「シリアが次の町で休憩をとりたいそうですねよ、と言いました。今度はしっかりと聞き取れましたか？」

「分った」

ラシルは頷いたが、ミルテは定位置である列の最後へ戻ろうとしない。

「どうした？」

ミルテはラシルの問いには答えず、イリスの顔をじっくりと見ている。

「シリアはイリスの母親ですか？」

ミルテの問いにイリスは驚いたように目を見開いた。だが、確か

に髪の色といい意志の強そうな瞳といい、二人の容姿は似ているとラシルも思っていた。それに同じ小さな袋を首から提げている。

イリスはちらつと後ろを振り向いてから小声で言った。

「そんなことシリアが聞いたら怒るよ。彼女まだ独身だし、見た目より若いからね」

「それを聞いて喜ぶ奴が一人いますよ」

ミルテもイリスと同じようにちらりと後ろを見た。ジンはまだ青い顔をしながらもナナと意気投合して笑いあっていた。

「母親じゃないけど血は繋がっているから似ているかもね。あとは皆ばらばら」

それ以上は聞かれたくないのか、イリスは俯いて口を堅く閉ざした。

「もうすぐ陽も真上に来る時間だ。日焼けしないように今日はもう降りたほうがいいんじゃないか」

ラシルは軽く助け舟を出してやる。

「うん、そうする」

ほっとしたような表情をイリスは見せた。

馬を止め、ラシルはイリスが降りるのを手伝う。

「リスはイリスが気に入ったようだ。また乗ってやってくれ」

イリスは白い歯をみせて微笑んだ。

「ありがとう」

そういつてイリスはシリアが手綱を捌く馬車へ向かったが、途中双子に呼び止められ、モスの馬車へ入っていった。

イリスの落ち着き先を確認してから、ラシルは馬上の人となる。

「優しいですね」

ミルテはからかうように目を細めた。

「俺はミルテにも優しいぞ。リスに乗りたければいつでも言ってくれ。なんなら一緒に乗ってもいいぞ」

リスがミルテを絶対乗せないことはわかっているので、ミルテは嫌そうに呟いた。

「それはご親切にどうも」

第4話

「おつかれ」

アクアに声を掛けられ、首にまとわり付くシリアの髪から作られた長いかもしを払いながら、イリスも軽く手をあげて答えた。

たった今公演が終ったばかりだ。イリスにとって今日も可もなく不可もない内容だった。

シリア一座にとって目下の目的地は、夏の祭りに間に合うようにカミルレと首都インセンのほぼ中間地点にあるトシスの街に入ることだ。トシスという街には今まで一度も入ったことがなく、たどり着くまでの道すがら小さな町を回り、名を売っていくことになる。無名のままトシスの街に入ると、いい噂と共に街に入るのでは市民受けも待遇も違ってくるのだ。

ラシル達と共にカミルレの街を出発してから幾街が回ったが、『シリア一座』はまだこの辺りでは絶大な人気を持っており、どの町でも諸手を上げて迎えられた。イリスにとってもやり易い地域といえる。今日の宿も女将がイリスの熱狂的な支持者であり、出される料理も部屋も払った値段以上のものが提供されていた。

「いつもこういう待遇が受けれるなんて、いいなあ。俺も一座に入

ろうかな」

メノウは固めの寝台に寝転びながら清潔なシーツの手触りを楽しんでいる。

イリスは双子と同じ部屋を割り当てられた。最近はラシルといるか、双子といる時間がほとんどだ。ナナはすねているのか以前のようには懐いてこない。それは少し寂しいが、おかげで今では双子もどちらがどちらかすぐ分るようになった。

(どちらの顔もそっくりだけど、やっぱり雰囲気が違うんだよね。色でいうとメノウはパツと目をひく赤なんだけど、アクアはもう少しやさしいローズレッド)

だが、まだイリス以外の団員は区別が付かないらしく、双子にいろいろに騙されている。

イリスもメノウと同じように寝台にうつぶせに寝転んだ。

「いいことばかりじゃないよ。今日だってここの女将の為だけに舞をさせられたし」

この宿の女将は旦那を早くに無くし、一念発起して宿屋をはじめ、

街一の宿屋にまで申し上げた。その自信と元々の勝気な性格が手伝ってか、何もかも自分の思い通りになると思っているらしく、彼女のために彼女の言うまま同じ舞を舞わされた。貴重な出資者だとしても二度三度と踊らされるとさすがに疲れる。

もうそろそろ慣れなくては、とは思うのだが、媚びなければ生きていけない今の生活と、それを当然のように要求し、受け入れる人種がいることがイリスにとって我慢がならない。

(もう少し…来年の春までの辛抱だ。僕ができるのは唯一舞を舞うことだから)

何度も自分に言い聞かせた言葉をまた自分へ呟いた。

「んー、出来たあ」

部屋の隅にある明かりのそばでせつせと繕い物をしていたアクアは思い切り伸びをした。服が破れたり汚れたりした場合、直すのは当然だが、もう一人の無事な服も同じ状態にするのが双子の間の決まりだそうだ。確かに顔がそっくりでいつも同じ服を着ていたとしても、ちよつとしたほつれで充分区別する標識になりうる。それを彼らはとても嫌がるのだ。

「やっぱり双子って好きなものも同じなのかなあ」

イリスはなにげなく口にしたが、答えは分っているようなものだ。趣味が合わなければ同じ服など着ないに違いない。

「うん」

「いいや」

だが、イリスの考えに反して双子の意見はわかれた。

(珍しい)

思わずイリスは寝台から顔を上げた。アクアも『否』と答えたメノウに驚いている様だ。

「一緒じゃん。食べ物だって、音楽だって」

「確かに共通点は多いと思うけど」

メノウは訳ありげに微笑むと首を振った。

「俺、アクアみたいに趣味悪くねーもん」

「俺のどこが趣味悪いんだよ？」

アクアもムツとして立ち上がる。仲のいい二人にとってまたも珍しいケンカだが、イリスは間に入ることにした。

「取りあえず理由を聞いてみようよ」

アクアを宥めるように見つめる。アクアは無然としながらもおとなしく座った。

「アクアってば、寝言で誰の名前呼んだと思う？ めっちゃめっちゃ切なそうに言うから、兄としては放ってはおけないわけよ」

「え、誰？」

ちょっと興味がある。

(趣味が悪い人、なんだよな)

イリスがアクアに視線を移すと、彼の顔が少し強張っているように見えた。

「それがさー、偽善者の塊ミルテ、だぜ」

「言っていない！」

再びアクアは立ち上がる。威勢良く否定したものの、体が小刻みに震えている。それを止めるためか、アクアは右手で左の二の腕をつかんだ。

（ミルテか、意外だな）

いつも双子と言い争いをしている印象がイリスにはあった。

（でも、よく考えてみるとケンカしていたのは殆どメノウだったかも）

アクアはそっとミルテの隣にいた。

ミルテは真ん中で分けられた艶のある漆黒の髪、同色の瞳の持ち主だ。顔は端整と言ってよく、少し黄味の強い滑らかな肌色をしている。交渉事は殆ど彼が担当しており、印象的な笑顔で殆ど思うように取り纏めてしまう。

メノウが偽善者と言うのは、笑顔とは裏腹に口が悪く、一言何か言わなければ気が済まないかのように付け足すからだ。

(そういうけど、彼の軽口は仲間内だけだ)

裏を返せば彼なりに仲間を信頼し、甘えているともいえる。それだけ気心が知れているのだ。

「ちがーう。もし一歩引いて寝言で言ったとしても、それは、多分ヤな夢で、うなされてたんだと思う」

まだアクアは一生懸命弁解している。今では彼の頬がそばかすを埋めるように赤くなっており、体がすっかり認めているのが見て取れた。

「別にさ、駄目だって言ってるわけじゃないじゃん。二人きりの兄弟に嘘つくなよ」

メノウの全く取り合う気のない言い草に、アクアは、違うって言うてるのに、と小声で呟き、それを最後に黙った。

「俺の場合、そうだな、もしミルテとイリスのどちらかと寝ろって言われたら、イリスを選ぶからね」

メノウにそう言われ、微笑まれてもイリスとしてはどう答えていか分らない。ありがとう、もおかしいだろう。そんなイリスにお構いなしにメノウはさらに続けた。

「じゃあ、イリスはミルテと…ラシルと一晩過ごさせて言われたらどっちを選ぶ？」

「なんでいきなりラシルが出てくるのさ」

話の流れからすればミルテかメノウかどちらを選ぶ？ ではないだろうか。

イリスは軽く戸惑いを覚えた。その様子にメノウは、おや？ と首をかしげる。

「だって、ラシルはいつもイリスのこと気にしてるじゃん」

「それは、ラシルが僕の警護についているからだろ」

「それだけじゃないよなあ」

メノウはアクアに同意を求める。

「ないね。ラシルも気づいていないかもしれないけど、イリスのこ
と目で追ってるもん。絶対好きだね、イリスの事。リスと向かい合
っている時と同じ顔してたし」

「僕を馬と同じにしないでくれる？」

アクアは自分の事から話がそれた途端いつもの表情に戻り、再び
メノウと意見が合った。

「で、イリスはラシルの事どう思っているのさ？」

二人は同時に同じ声で聞いた。

「どうもこうもないよ。ラシルは警護の時以外の僕には興味ないみ
たいだし」

そう、ラシルは誉めない。

もちろんイリスの舞についてである。

「もう、他の一座で舞を見る気がしないよ」

そう言ってジンは毎回手放して誉めてくれるし、モスも言葉少な

だが表情から感動してくれていることが伝わる。ミルテも人当たりの良い笑みを見せながら労ってくれる。…もしかすると彼の場合は依頼人の機嫌を損ねたくないだけかもしれないが、それでも悪い気はしない。

ラシルはいつも一番後ろの壁にもたれかかりながら芝居を眺めているが、今まで良いも悪いも感想を聞いた事がなかった。

「へえー、不満に思っているんだ」

メノウは気づかないうちに尖らしていたイリスの唇にふれて笑った。

「ラシルもまだ希望があるね」

アクアも本格的にこの話題を突き詰めようとイスを引きずって近くに座った。完全に目標が自分とならないうちにイリスは話を終らせなくてはならない。

「希望なんてない。それに僕に必要なんだ、そういう感情」

「どうして？」

またしても同時に質問される。話を早く切り上げようとしてきっぱり否定したつもりだったが、言い方が悪かった。余計に双子の興味を誘ってしまったようだ。

「どうしても」

イリスは言い捨ててドアに向かう。理由は友達でも説明する気にはなれない。

「あーっ、逃げるのか？」

「そう」

何もかも面倒くさくなり、認めて部屋を後にした。

「卑怯ものー」

ドアの向こうから双子のわめき声がかくぐもって聞こえた。

部屋から出たのはいいものの、行く当てなどなかった。

「夜風にでも当たろうかな」

イリスは思っていた以上に動揺している自分に気づいた。冷静になるためにも気分転換にもいい考えた。そう決めると外に出るため、綺麗に積まれた石の階段をゆっくり下りていく。

(必要ないって言ったけど...)

本当は誰よりも愛されたい、愛したい。そういう感情を誰より強く持っている気がする。それは押さえつけられれば押さえつけるほどイリスの心の奥を蝕み侵食していく。そして紙にインクをこぼした時のように確実に広がり、決して消えないのだ。

シリアは自分の母親の妹で、甥のイリスを可愛がってはくれるものの、座長という立場もあり、全ての団員の母であり、友でなくてはならない。だが、一座に何かあった時、真っ先に彼女が守らなければならぬのはナナなのだ。ラシルは役目ということもあるが、イリスを真っ先に守ってくれるだろう。

(それに、何気に気を配ってくれる)

ラシルがイリスだけの警護についてくれるのは嬉しかった。仕事だとしてもいつも自分を見てくれる人が欲しかったから。片付けの際も率先して重いものを持つてくれる。乗りたい時にコヨルテ馬のリスに乗せてくれるし、乗る時は日焼けの心配も忘れない。それに話したくない話題になるといつも逃げ道をつくってくれる。あまりに自然なので他にも気づいていない事は沢山あると思うが、ラシルはイリスの望みを察してくれる。

もちろん双子と遊ぶのも楽しいが、どこかで同年代の悲しさか、自分をより良く見せようと表面に出さない競争心がある。対してラシルは対等に扱ってくれながらも年上ということもあり、木漏れ日のように見守る温かさをもっている。今までそのように見られる経験がなかったのでとまどい、気づかないふりをしているが、イリスは素直にその暖かさを求めてしまいたい気がする。そう、勇気を出

して手さえ伸ばせば…

(な、何考えてるんだ。駄目だ、そんなの。未来の僕がかわいそうになるだけだ)

我に返ったイリスは激しく頭を振った。本当に夜風で頭を冷やす必要が大有りの様だ。

思いを振り切り、外へ通じるドアを開ける。夜風がイリスの顔を撫ぜ、髪をくすぐるようにもてあそんだ。

(気持ちいい)

誘われるままイリスは瞳を閉じた。

「どっした？」

突然の呼びかけにイリスは驚いて目を見開いた。

今まで考えていた相手にすぐ、ここで会うとは思っていなかった。イリスは鼓動が急に速まった気がした。これでは冷静になるために

来たのに返って逆効果だ。

「…夜風にあたりに。ラシルこそ、どうしたの？」

動揺を押し殺し、無難に受け答え出来た事に安心する。

「そんなところに突っ立ってないで、こっちに来たらどうだ？ 今晚はいい風が吹いているぞ」

「う、うん」

断る理由も見つからなかったので、ラシルの言つとおりには歩み寄ると、上から軽く口笛の音がきこえた。

(メノウにアクア…)

見上げれば二階の窓から双子がにやにや笑いながら手を振り、親指を突き立てると部屋の中へ入っていった。

(後で絶対からかわれる…)

軽いため息を一つ吐き、イリスはラシルの隣に並ぶ。

ラシルは珍しく頭に布を巻いておらず、見事なまでの金髪が手触りのいいビロードのように艶やかな光沢を湛えつつ風に揺らめいている。

(髪の毛を下ろしているとちょっと子供っぽくみえるな)

きりつと髪を纏め、颯爽と歩く彼は同じ男として見てもかっこいいと思うが、髪を下ろしてゆったりとしたラシルの方がイリスは好感が持てた。綿で織られた布ではなく、絹の衣を纏っていたなら十分貴人の御曹司に見える上品ささえ持っている様だ。

イリスの視線に気づいたのか、ラシルはイリスを見下ろすと微笑んだ。

「ほ、本当にいい風だね」

急に跳ね上がった心臓を紛らわせるためイリスは早口で切り出した。

宿は町一番の人気と料金を取るだけに展望の良い高台にあり、昼間はけてして広いとは言えない町中を一望することが出来る。下から吹き上げる風は次第にイリスの心を落ち着かせてくれた。

「明日も天気によさそうだな」

「そつだね」

夜も更けており、町の灯りはまばらだが、見上げると相反するよ
うに零れ落ちそつな満天の星空が競うように瞬いている。

「あ、神の見回り」

イリスは流れ落ちた星を指差す。夜の世界を見回る神が流れ星の
形で姿を表すと信じられているのだ。

「今日は忙しいらしい。俺もさつきここに来ただけだが、今ので
五つ目だ」

普通五人目、というところを五つ目と言う当たり、彼が余り信心
深くない事が伺える。

(彼はどこ出身かな)

傭兵を生業としているものの多くは地方の小さな国出身者が多い。
ラシルは言葉に訛りが全くといっていいほどないし、金髪、碧眼は
どこでも生まれるので判断材料にならない。

(ここまで綺麗なのは珍しいけどね)

イリスはラシルの端正な横顔を横目で盗み見た。

双子との会話が、ふと脳裏をよぎる。

(僕のこと好きだって、本当かな)

二人きりである今、彼に何か変化が見られるのでは、と思いラシルの横顔を見た。だが、先程のように目が合うとどうしていいかわらなくなるので、彼に気づかれる前に星空へ視線を移した。

(えっ?)

今まで夜風に黄昏れていたラシルが急にイリスの手を握った。触れられている部分がとても熱く感じられる。

「な、何？」

驚いて手を引こうとしたが、さらに力強く掴まれた。視線をラシ

ルへやると彼は静かに、という表情をイリスへよこした。

先程までのラシルとは違う、昼間の彼の表情に、イリスの顔も自然とこわばる。

「二人の男が裏口から宿へ入っていった」

ラシルは小声でイリスに説明する。イリスはそれに全く気づかなかった。

「でも、下の街で羽をのばしてきた泊り客が戻ってきただけかも」

同じようにイリスも小声で答えた。

「客なら、わざわざ裏口から入る必要はない。仮に宿の者ならあんな風にこそそ入らなくてもいいと思わないか？ まあ、彼等なりに気配を消しているつもりだろうが、あの程度ならあまり訓練を受けているようには思えないな」

「泥棒だったら何狙いかな？ 金品…？」

イリスは宿泊客の顔ぶれを思い出した。街一の宿だけに客質はいいが、街を行き来する商人が多く、目だって狙われそうな人はいないと思う。

(まさかとは思っけど、狙われているの、ウチじゃないよね)

人気のある一座なので、報酬やおひねりを他の所より多く貰っているのは実情だ。だが、団員の食い扶持や新しい衣装などの必要経費を差し引くと周りの人々が思っているほど余裕がないのもまた実情なのだ。華やかだけに誤解されやすい。

「心配はないと思うが、念のためだ。一緒に来い」

置いていかれると思ったが、一緒に来いと言ってくれるのは頼りにされているのかもしれない。イリスは嬉しくなった。

「うん」

ラシルに手を繋がれたまま、イリスはラシルの広い歩調に合わせるために自然と小走りになりながらも男たちの入っていった裏口へ向かった。

ラシルは一階の食糧倉庫を軽く調べるとイリスを入れた。

「ここで待ってる。俺が声をかけるまで絶対ドアを開けるなよ」

その扱いにイリスはいきり立つ。

「どうして？ さっきは一緒に来いって言ってたじゃないか」

「まだ外に仲間がいるかもしれないのに一人イリスを置いていくわけにはいかないだろ」

「いやだ、ここで一人隠れていたってアクアやメノウに知られたら馬鹿にされる」

本当はそんな理由ではないのだが、正直に告げる気にはなれなかった。

「それはないから安心しろ。金が発生しない限り彼らが危ない現場に来たためしがない。もし姿を現したらリスをやってもいい」

大切なコヨルテ馬を賭けるくらいだからラシルの言つとおり双子は来ないのかもしれない。だがイリスは首を縦に振るつもりは全然なかった。初めから双子のことはどうでもいい。ただ、ラシルの役に立って認められたい。

「自分の身くらい、自分で守れるから安心して」

「しかし…」

ラシルはなかなか色よい返事を出さない。そこまで頼りなく見え

るのだろうか？ こう見えても座興でやるナイフ投げは得意だ。イリスは腰に下げている短剣を上から触り確認する。今まで人に向けて投げたことはないが、いざとなれば身を守るために十分使えるだろう。

「自分の仲間を守りたいと思うのは当然だろう？ ラシルが止めても僕は行くからね」

口からはもつともな理由が驚くほどすらすらと出てくる。半分以上はヤケになっており、残りは意地だ。

ラシルの横をすり抜けようとしたイリスは肩を彼に掴まれる。睨んで見上げると、ラシルは肩を竦めて苦笑した。

「根性あるな、悪かった。俺と一緒に行ってくれ」

イリスは眉間の皺だけ取り除いた。

「初めからそう言うてくれればよかったんだよ」

石段を物音が立たないように上がり、二階の廊下を覗くとすでに男たちはモス、ジン、ミルテに囲まれ、首元に剣先を突きつけられていた。

「まあ、当然の結果だな」

ラシルはゆったりと肩の髪を払いつつ輪の方へ近づいていく。ミルテは不満顔でこちらを見た。

「遅いですよ。…ああ、そうでしたか」

一緒に後から付いてくるイリスを見て、ミルテはわざとらしく納得した声を出した。ラシルはミルテの肩に肘をかけ、輪の中心を眺める。

「たまたま一緒にいただけだ。で、こいつらは？」

「さあ？」

ミルテが話す度に突きつけている剣先が微妙に揺れ、喉元に突きつけられている男の身体がさらにこわばるのが見て取れる。

騒ぎに気づきドア越しで遠巻きに見ていた他の泊り客は、これから彼らがどうなるのかという自分の好奇心を満たすためにまだ部屋に戻る気配を見せない。

「何が目的でここに入った？」

ジンは二人の男に向かって尋ねたが、答えるつもりはないらしく、目を逸らし堅く口を閉ざす。

「仕方がない」

ラシルがミルテに目配せすると、分かったとばかりに頷き返す。

ミルテは剣先をおろすと男たちの前にしゃがみ、人当たりのいい笑みを見せた。

安心感を与えたのか、くみしやすい人物と思ったのか、男たちの表情が少し和らぐ。だが、それは束の間に過ぎなかった。

「面倒くさいことは嫌いです。斬って捨てましょう」

その言葉にこわごわと遠くから眺めていた宿の女将が慌てて飛んできた。

「殺生なら、もっと他のところでやっておくれ！　ここではお断りだよ」

殺生自体を止めないあたり叩き上げで申し上がったきただけある女将らしい、とイリスは舌を巻くと同時に呆れた。

「では、女将の顔を立てて、外で。少しだけ首が繋がっている時間

が長くなって良かったですね」

ミルテ、モス、ジンに無理やり立たされ、男たちはさらに顔色をなくす。

「イリス」

一階上に泊まっているナナは騒ぎの様子を見に来て怖くなったのだろう。イリスの姿を見つけると走り寄り、飛びつくようにしがみついた。

「ナナ、ここは危ないから上に戻る？」

イリスの言葉に、引き立てられた男たちの足が止まった。

「ナナ様……」

一人の男の呟きがイリスの耳に入った。同時にイリスは彼らがどういう者たちかが分ってしまった。このままでは殺されてしまう。

（止めなくちゃ）

イリスは列の最後にくるラシルの腕を掴み引き止める。

「彼ら、本当に殺しちゃうの？」

必死なイリスの瞳を見て、男たちを見てからラシルはイリスを廊下の隅に連れて行った。

「口を割らせるための演技だ。あの様子からすれば経験上意外に手ごわいかもしれんが、方法はいくらでもある。時と場合によるが、今のところ殺すつもりはないから安心しろ」

男たちに聞こえてしまつては意味がないとばかりにラシルは小声で告げた。

「イリスは部屋に戻つて寝てる、もう遅いぞ」

軽く頭をぼんと叩き、ラシルは立ち去ろうとする。イリスはまたも彼の腕を掴んだ。

「どうした？」

「だから、その…」

焦れば焦るほどいい口実が思いつかない。

「まあ、どうしたの？」

ナナと同じ部屋で泊まっているシリアの、少し緊張を孕んだ声が響いた。だが、声とは裏腹に彼女は堂々とした足取りで男達を取り囲む一行の前に立ちほだかる。そして妖艶ともいえる微笑を浮かべた。

「ごめんなさい、言っていなかったから仕方がないけれど、そちらの二人は私の客人なのよ」

夜も随分更けているのに、確かにシリアはしっかりと化粧を施し、昼間と同じ出で立ちでくつろいだ雰囲気は微塵もない。客を迎えると言ったのは本当らしい。

シリアの言葉を受けて、モスとジンは剣をおさめた。ミルテは剣先を下げたものの、まだ鞘にはしまっていない。

男たちは渋い顔で体の埃を払うと、彼らのプライドがそうさせるのか、ゆっくりとシリアの近くへ歩いていった。

「三階の一番奥の部屋で待ってて」

シリアは男の一人の背中に軽く触りながらそう告げ、先に行かせた。

「本当にあなたたちを雇って良かったと思うわ、こんなに優秀なんですもの」

振り返り、労うようにそう言って少し肩を竦めた。

「これからは内緒で逢引ができないわね」

シリアの言葉にジンは低いうめき声を挙げる。

「大丈夫ですよ、今日は男が二人尋ねて来たのですから」

ミルテはジンを慰めるように肩に手を置いた。そして耳元でこっそり付け足す。

「三人でも十分に楽しめますけどね」

拍子抜けした結末を見終わった他の宿泊者達はそれぞれの感想、大体は不満の様だが、を口にしながら部屋へ戻りはじめた。

「イリス、ナナをコリー達の部屋へ連れて行ってくれる？」

頷くイリスを見て、シリアも三階への階段を登っていった。

「シバきそこねて残念だったね」

周りの観客がいなくなる代わりにどこからかひよっこり双子が現れた。メノウはいつものようにミルテに軽口を叩くが、いつもミルテの側にいるアクアは先程の会話を気にしているのか、ラシルとイリスの近くへやってきた。ラシルは片手でアクアの髪をくしゃくしゃにする。

「な、言った通りだろ」

ラシルはイリスににやりと笑って見せた。確かに双子はこの騒ぎには顔を出さなかった。イリスも男達が助かったことに安心した事もあり、同じようににやりと笑うことができた。

「あつ、なんか感じワルイ」

アクアは髪を直しつつ二人の顔を見て唇を尖らせた。

第5話

馬車が止まり、扉が開けられる。

窓から見えたインセンの街は活気に満ち、後何年もしない内に戦争の痕跡は無くなってしまっただろう。もちろんそれはスカトル国の王であるカルート・キヤラの願いでもある。

「おかえりなさいませ」

いつもの様に出迎える重臣達と女官長。他のものは頭を下げているので名前どころか顔さえ知らない。

例え遠くても近くでも、外出から帰ってきた時には必ず先祖神であり、スカトル国の最高神で、天界を治める神イソアミルに報告することになっている。カルートはこれもいつものように宮殿内にある神殿へ向かった。

「新しい神殿の様子はいかがでしたか？」

宮内大臣のシプレ・シガーがすぐ後に続く。彼はカルート王の妃メリツサの父で、シプレは娘のメリツサを蝶よ花よと育て上げ、王の正妃にした今も溺愛している。純粹培養の妻は良くも悪くも天真爛漫で、この十年間続いた戦争に終止符が打たれたときには心の赴くまま、子犬のように部屋中を駆け回ったそうだ。

「無事に戦争が終わったことを神に感謝しなくては。神のご加護があったからこそ、父にも夫にも何事もなかったんですもの」

そうして神殿を造る事を思いついた。今まで思ったことで叶わなかったことのない彼女は、早速父に相談した。殊勝な態度と甘えた声で。どこにどう頼めば自分の願いが叶うか良く知っているのだ。この件に関して彼女は夫であるカルートより父を選んだ。

これまた娘の望みを叶えることを生きがいとしているシプレは、尤もらしい理由を付けて議題へ乗せた。

「民は長年の戦でほとんど疲弊しております。ここは一つ彼らに樂しみを与えてやるのが良いでしょう。戦勝記念として、また人々の新しき心の支えとして、そうですね、神殿など造られては」

「今、民に更なる税を課すのはいかがなものだろうか？」

まだ傷跡癒えぬ時分に、と多くの諸侯は反対した。本心は神殿建設の必要経費を寄付という形で徴収されるのを嫌がっているのだ。建物が神殿だけに、建立が決まれば寄付を出さないと信仰心が疑われてしまう。

「民達ね」

シプレは一回り諸侯を見回すが、他の諸侯達も慣れたもので、しれっとした顔で受け流している。

「確かに今は疲れきっているでしょう。ただ後々、人々の心に余裕が出てきた時、回らない頭でつまらないことを言い出す輩も出てきます。そして悲しいかな民は流言に流されやすいもの。その不満の矛先はどこに向けられると思いますか？ 他ならぬ我々です。それをおかす為にも何かしらの目的を与えておいた方がいい」

少しだけ室内の空気が変わってきたことを感じつつ、シプレは一呼吸置いてさらに続ける。小太りで眼が細く、常に笑っている印象を与えるが、いざとなると有無を言わさない雰囲気をかもし出す。自分の娘をしつかり後宮にいれる程のやり手であり、見た目で判断すると痛い目にあう人物の一人といえる。

「宮殿を造るといっているのであれば非難を浴びるでしょうが、皆の為の神殿ならば文句も出ないというものです。ああ、信仰心を煽って民から直接寄付を集めるのもよい。誰の加護でこの戦いを勝利と言う形で乗り切れたか？ 他ならぬ最高神イソアミルとその子孫カルート王だと言うことを同時に天下に知らしめるいい機会にもなるでしょう」

言うことをいったシプレは席に着いたが、他の諸侯からはため息は聞かれたものの、反論らしき発言は出てこなくなった。その流れを受けてカルート王は裁断を下した。民衆の活力源になると同時に最近問題になりつつある帰還した兵士の当面の雇用対策にもちょうど良いと判断したからだ。

「シプレに神殿建造指揮権を与える」

こうして一昨年からの神殿建造が始まった。責任者であるシプレがカルートの後に続き、気にして様子を聞くのも無理のないことだ。

民に神殿の建設を発表したと同時に雨が降り始めたのも良かった。メリッサは小躍りして純粹に喜んだが、一番喜んだのはシプレだった。それもそのはず、雨は神が喜んでいる印である。そのため神殿建設は神意に沿った行為であると諸侯も民衆も信じた為、さらに事業がやり易くなったからだ。

(これが一人の女の単なる思い付きと知ったら皆どう思うであろうか)

寝物語で誇らしげに妻から神殿建造に至るまでの経緯を聞かされたカルートは内心呟いた。最終的な裁断を下したのは他ならぬ自分であるが、建設発表の時に雨が降ったのは出来すぎだ。妻の思いつきとはいえ純真な心から出たものなので、神も捨て置けなかったに違いない。

初めは乗り気でなかった諸侯も、今では神殿の完成を心待ちにしているものが多い。

「どうせなら、神おろしの儀式の舞は当代一の舞手にやらせたいですわね」

酒宴の席での誰かの軽い発言が熱い同意を受け、たちまちのうちに各諸侯が推薦する旅芸人を神おろしが行われる前年の秋に王の前で試演させ決めることになった。それは瞬く間に巷に広がり、今や『神殿建設』は貴賤問わずの娯楽となっていた。

「サンデラ將軍は今日初めて神殿を見たのだったな。どうだ、出来は?」

神殿査察を共にしたサンデラ・クロブが今も後ろに付き従っている。彼は軍事の最高責任者という役割を担っている。

「王がよければ私は、何も」

サンデラは表情一つ変えず手短に答えた。

「將軍は正直でよい」

笑うカルートに、シプレは王もサンデラと同じく神殿が気に入らないのかと焦り出した。小太りだけにおたおたする様は道化のようで愉快だ。暫く楽しんだ後、カルートは義父の心を落ち着かせてやることにする。

「悪くない、あのまま続けよ。將軍は他の事で頭が一杯で、そちの機嫌取りまで気が回らぬのだ、許してやれ」

シプレが神殿計画の演説を打った時、サンデラ・クロブはその場になかった。彼は地方で戦火再発の燦る火種を消す役目を忠実に全うしていたのだ。そしてそれは今も完全には終わっておらず、彼は神殿よりも反乱鎮圧を優先させるべきだと考えている。

「それでは王、後ほど南西地方のご報告を」

「うむ」

軍人らしい一礼をすると、サンデラは軽くシプレにも頭を下げ、きびきびとした足取りで去っていった。

サンデラ將軍は今回の戦争の最たる功労者の一人だ。

『凍れる勇獅子將軍』

紋章の相向き合う獅子から民衆にそう呼ばれ尊敬を集めている。

だが、同時に恐れられてもいた。それは偏に彼の頭を未だに悩ませるコヨルテ＝ラグドの攻め方に寄る。

元々、今回の戦争の発端は我がスカトル国と隣国ベイラムとの間で起こったものだ。この二国はどうしても相容れない信仰上の理由があった。スカトルは最高神で天界の大神イソアミルが大地の神ベチベルを妻として全世界を治める神話からなっている。対するベイラム国は大地の女神ベチベルを最高神とし、その子孫と名乗っていた。そしてベチベルから生まれた息子イソアミルに天界を支配させるという神話になっている。

スカトル国からすれば妻のベチベルを先祖に持つベイラム国は格下であり、逆にベイラム国にすれば息子のイソアミルを先祖にもつスカトル国の方が下という意識がある。お互いの民も何かと対抗心を燃やし、国境付近ではイザゴザが絶えなかった。

子供のけんかに親が出てくると余計にややこしくなるように、両国の村のささいなケンカに両軍が出陣し、ややこしいの一言では片付かない十年に及ぶ戦争に発展してしまった。

(あの頃は親父が指揮を取っていて、自分はまだ血気さかな皇太子だった。今では三十の大台にのり、すでに半ばに差し掛かっている)

戦いの途中で父王が死んだ。病死だったが、戦いの途中ということもあり、伏せられていた。にもかかわらず敵方にその情報が漏れ活気づき、逆に味方の士気は一気に上がり、苦戦を強いられるようになった。

「ここで巻き返しを図る必要があります」

その打開策として選ばれたのがコヨルテ＝ラグドだった。コヨルテもベイラム国と同じく大地の女神を最高神として祭る地域であり、同じ神を信じるよしみでベイラム国と手を組み、スカトル軍の手を焼かせた。なんといつてもコヨルテは優秀な馬と不屈の意思をもつ男で世に知られている。将を欲すればまず馬を射よとばかりに、ここを早めに叩いておけば戦況も変わると踏んだのだ。

コヨルテ殲滅の指揮官として立てられたのがサンデラ・クロブである。戦いは熾烈を極め、結果、コヨルテ＝ラグドの街を全て焼き払い勝利した。勝因はサンデラ將軍の好機を逃さない指揮と、スカトル軍に囲まれたコヨルテをベイラム国が見捨てたことにある。だが、味方にも多数の犠牲を払わざるを得なかったのも事実だ。

夫や子を亡くした者はコヨルテの民を鬼が獣のように悪く言うが、実際に戦場に立ち会った者は孤立無援のコヨルテの戦士の勇敢さとサンデラ將軍の冷酷なまでの徹底した叩きぶりに同情や恐怖などいろいろな感情が入り混じるのか、あの戦いについては口を閉ざす者が多いと聞く。

かくしてスカトル側は再び勢いづき、次々に乱立していた国を統一していった。コヨルテを見捨てたベイラム国は他の同盟国から敬遠され、最終的にベイラムの王と主だった諸侯の首、そして改宗を条件にスカトル国の元へ下った。

「民は上手くアメとムチで手なずけておけ」

カルートは押さえつけが厳しいほど反発が大きいことを知っている。いい意味での『あいまいさ』も時には政治に必要なのだ。多神教の強みを生かし、最高神はイソアミルとしなくてはならない

ものの、自分達の信じる神を信仰することが可能と知ると、無益な戦いより今の条件を受け入れた方がいいという思考が大半をしめ、併合したどこの国も比較的混乱なく秩序が守られているらしい。偶に、その考えを受け入れられないものが反乱を起こすが、大したことではない。

(問題はコヨルテの民だ)

彼らは戦の巻き添えを食った上、見捨てられ殲滅した。殆どのコヨルテの兵士はその戦いで命を散らしたようだが、実は生き延びて再起を図っているという噂がまことしやかに流れ、なかなか消えない。地下に潜伏しているので摘発も懐柔も難しい。神殿の建造で浮かれている市民の心の裏にはコヨルテの報復を恐れ怯えている顔が常に隠されている。サンデラ將軍が未だに駆けずり回っているのも大半はコヨルテゆえだ。

「まだまだ安寧には程遠いようですよ、父上」

カルートは宮殿内の神殿に一人入ると跪き、儀礼に則った祈りを捧げ始めた。

第6話

最初の目的地であるトシスに着くまで地道に街道沿いの街を回った効果が出始めたのか、『シリア一座』は知らない街へ入っても名前を告げるだけで興味を持ってもらえるようになっていた。だが、シリアは浮かれたところを一つも見せない引き締めた面持ちでラシルの元へやってきた。

「今日はこのセダの街での興行だけど…」

「何か問題でも？」

ラシルは気丈なシリアにしてはめずらしく顔を曇らせていると思っただ。

「ここにネロール・ヘキセン公一座がいるみたいなのよね」

途中の街で何回も聞いた一座の名前だ。

「ヘキセンの所の一座と同じ位良かったよ」

誉め言葉としてそう言われたのは一度や二度ではない。それはトシスの街へ近づく程よく聞かれるようになった。この辺りで有名な一座の名前であり、神おろしの有力候補でもある。

「いたらずいのか？」

「会つとしたらトシスの街辺りだと思つていたからね、本命と当たるのが少し早すぎると思つたの」

シリアは開演の準備を進めているイリスを見やった。

「街の人は同時に話題の一座の対決が見られるとあつて楽しんでるようだけれど、イリスはあまり人と比べられることに慣れていないのよ。今回の事がいい方に出ればいいのだけれど」

一つため息を付いてから、シリアは表情を引き締めると準備の真最中である現場へと向かった。ラシルもメノウと共にいるイリスの元へ歩み寄る。反対方向からもイリスの元に一人の少年が近づいて来るのが見えた。

「えっと、イリスは…」

人目を引く顔立ちを持つその少年は、不躰にイリスとメノウの顔を交互に見回した。

その態度にムツとしたメノウは手を上げた。

「俺がイリスだけど」

少年はメノウを見て鼻で笑う。

「お前な訳がない。同じ匂いがしないんだよね、全く」

目を見開くメノウをあつさり無視し、少年の髪と同様に明るいブラウンの瞳はイリスの前で止まった。

「お前がイリスだろ？」

「…そうだけど。じゃあ、あんたがカラムス？」

「なんだ、もうばれちゃった」

カラムスはからからと笑い声を立てた。

彼は『ネロール・ヘキセン公一座』の看板役者だ。

背はイリスよりも少し高いくらいで、年も少しだけ上だろう。旅すがらイリスは彼と何回も比較された。イリスはストイックな美しさがあるが、カラムスと名乗る少年にはあけすけな華やかさがある。彼は急に訪れた侵入者に体を強張らせるイリスに構わず辺りを見回す。

「シリア一座のシリアってどこの貴族？」

「うちの座長だよ」

「なに？　ここパトロンいないんだ」

カラムスはさも可笑しな冗談を言われたかのように笑った。

確かに旅の一座は出資者を募り、その財力の元その名を掲げながら興行を行うのが普通だ。カラムスの一座の現在のパトロンはそのままネロール・ヘキセン公と言うことになる。ただ、お金を出して貰う代わりにパトロンの要求は遵守しなくてはならず、それは神の言葉と同等の力があるといっても過言ではない。パトロンが望めば

余興の相手だけではなく、『夜』の相手も務めなくてはならないのだ。

「イリスは男の子だけど、見た目かわいいからね。そんなことさせたら死んだ姉さんに天国で合わす顔がないから」

シリアはそう言ってパトロンを付ける事はしなかった。

「用がないならさっさと帰れよ」

今ではイリス達一座を家族同然に考えているメノウが腹立たしげにカラムスを睨んだ。

「怖いなあ。同じ旅芸人のよしみで挨拶に来ただけだからもう帰るよ。まあ敵情偵察も兼ねてるけどね。あ、そうだ」

悪びれずカラムスは答え、イリスの隣に立っていたラシルに妖艶ともいえる笑みを振りまいた。

「綺麗なお兄さん、是非うちを見に来てね。それで帰りに楽屋に寄ってよ。お兄さんとなら喜んでもっと楽しいことも付き合うから」

カラムスは言いたい事を言い、奥歯をかみ締め平静を装っているイリスを見下ろすような笑顔で一瞥し、ひらひらと手の平をふって足取り軽く去っていく。メノウは思いつきり顔をしかめて舌を出せるだけ出した。イリスはラシルに何か言いたげに軽く口を開いたが、首を振ると再び作業に取り掛かった。

(イリスはいつも自分の言葉を飲み込んでしまう)

イリスと一緒に過ごすようになってから分った彼の気になる行動

の一つだ。不自由な旅まわり生活で我慢癖が付いたのかもしれないが、自分には話して欲しい、とラシルは寂しい思いをかみ締めた。

一見冷静なイリスとは対照的に、メノウは見た目に分りやすいほどいきりたっている。

「あんなやつ、今日でおしまいにしてやる。…イリスがね」

がんばれ、とメノウは力強くイリスの肩を叩いた。

セダ市民の要望でネロール・ヘキセン一座とシリア一座の公演は時間をずらして行われることになり、先に演じるのはここでは新参者のシリア一座となった。

開演前に楽屋ではユリア、チファ、コリーがお互いの手を握り合って緊張感をやり過ごしている。

「いつものようにやればいいからね」

胆の据わっているシリアは緊張感を微塵も見せない。

「そんな事言っただって今日は無理。客席の雰囲気が違うもの」

ユリアは袖幕からちらりと客席を覗き、長い息を吐き出した。ユリアの言う通り、今までとは違う。目の肥えた客が多いのだろう。

イリスは黙々と鏡に向かい化粧を施している。その表情からは感情が読み取れない。

「弱音はかないの。ほら、自分を信じて」

シリアは安心させるように笑うと、娘三人の尻を叩き舞台へ送り出した。

基本的に度胸のある三人娘はいつもの実力を発揮し、とりあえず観客の心を掴むことに成功していた。

「イリス」

シリアはイリスの両肩にそつと手を置く。イリスも答えるように軽く頷くとキツと前を見据え、舞い終わったユリア、チファ、コリーと入れ替わるように舞台の中心へ出て行った。

「ほお…」

いつものように観客席の後ろから見ていたラシルは客席から自然とこぼれるため息を誇らしさと、少々の嫉妬感を交えて聞いた。イリスは登場と同時に人々の心に上手く入り込んだようだ。演目はこれまた市民の要望で『乙女の舞』である。手の差し出し方、眼差しの向け方…イリスは今日も寸分の狂いもなく基本通り舞をやっていた。

終わりと同時に歓声が上がる。

「よし、勝ったね」

まだ『ネロール・ヘキセン公一座』の舞を見ていないが、メノウ

はそう結論づけた。

「まだまだ地方にもいい一座がいるもんですねえ」

出てくる人々の感想はおおむね好評のようだ。ラシルも人知れず一安心する。好きな人の悪口は聞きたくないものだ。次に行われるネロール・ヘキセン公一座のテントへ向かう人々の流れから別れ、裏方に入る。すでに三人娘は服を着替え一刻後に行われるネロール・ヘキセン公一座へ向かって居なかった。

「イリスも見に行く？」

ラシルと一緒にきてきたメノウがイリスに尋ねる。

「ん…化粧落としたら多分行くと思う。モスとジンはナナ達ともう行ったし、ミルテとアクアは席をとっておくって言って、今さっき出て行ったよ」

「何二人仲良く出かけているのさ。…邪魔しに行く」

メノウはまた後で、と軽く手を上げると走って楽屋から出て行った。

「あまり見に行きたくないようだな」

一人残ったラシルは、近くの椅子を引き寄せると腰掛けた。

「気にしないつもりではいるんだけど、やっぱり少し怖いかも」

二人きりだからか、珍しくイリスは弱音をはいた。だが、返って

ラシルは心の一部を垣間見せてくれたことを嬉しく思った。

「行きたくなければ無理することはない」

「うっん、行くよ。現実はこちらと見ておかないとね。でもあまりおおっぴらに見には行きたくないんだ。後ろの方でいいから、その、一緒に見てくれない？」

おずおずと頼む様子にラシルはイリスを強く抱きしめたくなる衝動に駆られる。持ち合わせている理性をかき集めてぐっところえると、代わりに笑顔で頷いた。

「もちろん。イリスの行くところは俺の行くところだからな」

「そうか、ラシルは僕の警護があるもんね」

薄く笑うイリスにラシルはそれだけじゃない、と心の中で呟いた。

『ネロール・ヘキセン公一座』も同様の人の入りで、すでに空いている席はなく、必然的にイリスが望んだ通り後ろで立ち見となった。

緩やかに背を壁にもたれながら見ていたイリスも姿勢を正す瞬間が来た。

カラムスの舞う『乙女の舞』だ。

イリスとは趣が違うものの、華やかな雰囲気を持つ彼も観客の心を初っ端から掴んでいった。舞が進むに連れて客は身じろき一つしなくなる。今や彼らの関心事はカラムス一人の一挙一動に注がれていた。

急に腕をつかまれ、ラシルはそちらを向いた。イリスは食い入るように舞台上を見つめているが、自力で立っていることが出来ないらしい。キツと前を見続ける横顔は微かに震えていた。

短いようで長い時間だった。

公演が終ると、人々はまだ夢から覚めないかのように出口へ向かう。

「シリア一座の子もいいと思ったけど、見比べるとやっぱりカラムスには敵わないな」

「確かに綺麗なんだけど、それだけで、何か物足りないんだよなあ」

噂の本人がここにいる事を知らない観客達は好き勝手に感想を述べた。

イリスにまだ動く気配がないので、ラシルは周りの声に耳を傾けつつ辺りを見ていた。人々の中に一つ飛び出たジンの頭を見つける。モスやナナ達も一緒にいるだろう、そのまま人の流れに乗って出て行った。ミルテとは目が合った。ラシルが軽く横に首を振ると彼も心得たもので、メノウとアクアの気を上手くそらしてイリスに気づかせなかった。気づけば必ずこちらに来てイリスを誉め、何とか励

まそうとするに決まっている。麗しい友情だが、友達の慰めや激励を受け入れるには今のイリスにはまだ早いであろう。

「ごめん、ラシル。行こうか」

イリスがそう呟いた時には殆どの観客は外に出ていた。イリスはゆっくりした足取りで元来た道を辿る。その後ろをラシルは黙って付いていった。おかげで街の様子がラシルの耳に良く届く。

(賑やかだな)

広場では先程まで演目を見ていた人々が輪をつくり、各自持ち寄った楽器の音色に乗せて高ぶった気持ちを発散するように踊っている。

ふいにイリスの足が止まり、ラシルも止まると視線を戻す。振り向いたイリスは思いのほか厳しい表情をしていた。

「はつきり言っただけのほうがかラムスより技術は上だと思う。だけれど…」

イリスは不安げに一度首から提げている袋をぎゅっと握り、再び続けた。

「ラシルは僕の舞を一度も誉めたことがないよね。どこが悪いかはつきり言っただけだ」

外さない視線は射抜かれそうに強い。だが、ラシルの目にはとても痛々しく見えた。締め付けられるような胸の痛みを隠し、ラシル

はその場の雰囲気や和らげるように笑い、頷く。

「分った。では、こっちに来い」

手を差し出すとイリスは戸惑った表情ながらラシルの手を掴んだ。

「どこ行くの？」

少し不安げに聞く声が愛らしい、そう思いながらも何も答えず先程来た道を戻り、途中から逸れ、人々の輪に近づいていく。同時に楽器の音もざわめきもしっかり判別できるようになっていく。

人だかりの手前でイリスはラシルの腕を引っ張って止めた。

「……？」

「そう」

ラシルは親指で人だかりの中心を指した。

「思いつめても仕方がない。気分転換に踊らないか？」

イリスにとってそれは思いがけない誘いだったようだ。

「そんな気になれないよ。それに早く帰って出しゃばなしの道具をしまわないとシリアに怒られる」

「誘ったのは俺だから、俺がかわりに怒られてやる」

「シリア怒らすと怖いよ」

「もう二月も一緒にいるんだ、それくらいは知っている。だから誠意を尽くして謝れば地獄の門番を怒らせた為に頭からバリバリ食われた哀れなキノリンにならなくて済むことも知っているのさ」

「でも…」

煮え切らないイリスの言葉を遮るように、輪にいた中年の女性が声をかけてきた。

「あんたたちも踊るかい？」

「ええ、よければ」

ラシルはイリスが何か言う前にミルテの真似をして微笑んで見せた。

「じゃあ、中に入りなよ」

勧めた女性は頬を染めながら二人の背中を押して中心へいざなった。

「え、ちょっと僕は…」

イリスは断りの言葉を口にしたが、残念ながら周りからあがった拍手にかき消されてしまい、帰るに帰れない状態となってしまった。

この集まりの中心人物らしき男が音楽の触りを聞かせラシルに顔を向ける。

「この曲を知っているか？」

「俺は子供の頃に踊ったことがあります」

イリスは知らない、と小声で言った。

「では次はこれで」

またまた残念な事にイリスの声は男に届かなかつたらしい。男が手を上げると曲の前奏が始まってしまった。

イリスはもともと知らないし、そもそも踊る気分になれないのか一歩下がる。ラシルはイリスを見たが、彼は首を横に振った。

(仕方がない)

ラシルはイリスに向かって肩を軽く竦めると輪の中心で頭に巻いていた布を解いた。

「おお」

周りから感嘆の声が上がる。女性からはため息が聞かれた。いつも隠している分、ぱつと目の前に広がる鮮やかな金髪が及ぼす効果をラシルは知っていた。

子供の頃の記憶を手繰り寄せながら曲にあわせ手足を動かす。さすがに昔のようには軽やかにいかないものの、意外に覚えている自分に驚いた。

ラシルの人目を引く登場に目を奪われたまま周りの人々は動けず、

初めはラシル一人で踊っていた。だが、途中から誰からともなく歌声と手拍子が始まり、曲が終ると歓声と拍手が再び起こった。

イリスも目を丸くして驚いている。今まで踊る姿など見せたことがないので、彼の中では意外だったに違いない。

「金髪のお兄さん、あんた中々やるじゃないか」

先程の男がにこやかに手を叩きながら近づいてくる。

「しかし、都風の踊りだな。ここで一緒に楽しみたいければこうだ」

男は再び手を上げて曲を始めさせると踊り始めた。周りもそれに合せて踊り出す。輪に入れてくれた女性が近づき、熱っぽい視線と共に『セダ風』の踊りを教えてくれた。

「わかった？」

そう聞かれたが苦笑しかできない。基本的には同じなもの、左右ステップの違いや全く違うところもあり、知っている通りに覚えこんでしまっているラシルの脳は混乱し始めてきた。

「違つよ」

間違つて踊るラシルを見かねてイリスが声をかけてきた。

「ここは、ここ」

正確に踊ってみせるイリスにラシルは驚いた。

「知らないんじゃないかなかったのか？」

「一度見ればだいたい覚えられるよ」

「それはすごい特技だな」

ラシルが感嘆の声を上げるとイリスはやっと、軽くだが、微笑んだ。

「あら、こちらは可愛い子ね。覚えたのなら一緒に踊りましょうよ」

なかば強引に女性に手を取られ、イリスは苦笑しながらも輪の中へ一歩ふみだした。

初めは乗り気でなかったイリスもだんだん興が乗ってきたようで、2曲目、3曲目と進むうちにラシルよりイリスの方が輪の花形になっていた。

「うまいわ、ほればれして見とれちゃう」

ラシルにとっては当然と思うのだが、ここにいる誰もがイリスが『シリア一座』の看板役者であることに気づいていない。目の前の女性も例外ではなく、見目よい二人と楽しく踊れることが純粹に嬉しいらしい。イリスの顔にも笑顔が戻り、声を立てて笑うまでになった。

(今のイリスは生き生きとして綺麗だな)

そう思うのはラシルだけではないらしく、イリスに色々な人からお誘いがかかる。

「お兄ちゃん、もう一曲踊らないか？」

「いいよ」

イリスを中心にどんどん踊りの輪が広がっていく。皆微笑み、楽しそうだ。

（イリスには人を幸せにする能力がある。ただ、それが自覚できるかどうかだな）

途中から観客に転じたラシルは家の壁にもたれながら輪の中心の、ひととき眩しく見えるイリスだけを見ていた。

「なんか、すつごく楽しかった。嫌なこと全部忘れてもう無我夢中で踊った感じ」

夜も更け始めたので、皆名残おしそうではあったが解散し、ラシルとイリスも帰路を辿る。来たときとは大違いでイリスはまだ少し昂奮冷め遣らぬようだ。

「連れてきてくれてありがとう。十分気分転換になったよ」

イリスはにっこり微笑んだ。

「これが俺の答えだ」

「…え？」

イリスは意味が分らない、と顔に書いて振りむいた。

「俺に聞いただろ？ イリスの舞に何が足りないかって。だから、
こういう気持ちじゃないのか？ 足りないのは」

ラシルはイリスの瞳を見返し、ゆっくりとかみ締めるように言った。だが、イリスからは何の返事もなく、ただ瞬きを忘れたようにじっとラシルを見返すばかりだった。

第7話

シリアに言わせると今のイリスの舞は『鼻の頭を鼠に齧られ、のた打ち回る猫』程見苦しいらしい。

彼女はイリスの絶不調をセダの街でカラムスに事実上負けたのが理由と考え、毎日の様に時間さえあればイリスをはじめ、全ての団員をすごいている。今も特訓中で、久しぶりにラシルは仲間の6人だけで焚き火を囲んでいた。

今夜は野宿だが、気候がいい時期で乾いた風が返って心地よい。

「そんなに悪くないと思うけどなあ」

アクアは膝を抱えて、辺りを見回しながら同意を求めた。もちろんイリスの舞についてである。

「ん〜、イリスもカラムスもどっちも良かったけど」

性格が優しいジンは言葉を選んだ。

「いや、カラムスの方が心に残りましたね」

代わりにミルテがはっきり答えた。

「あいつのは、なんか下世話っぽいんだよ。始終周りに色目使うしさあ。ねえ」

メノウはカラムスが初めから嫌いな分見方が偏っている。ミルテ

にいつても同意を得られないのは分っているのでメノウはラシルに言った。

「確かに、神おろしはイリスの方がふさわしいと思うが、王の目に留まらないと神殿の舞手には選ばれない。そのやんごとなき人の耳に入るには貴族の推挙が要る。さらに貴族の関心を買うには民衆の人氣が不可欠になる。意に沿わなくても彼らに迎合しなければ目的達成は難しいだろうな」

「うー」

ラシルだけはイリスに同情的で味方だと思っていたメノウは不満の唸り声を上げた。だが彼はその不満を別の形でラシルに意趣返しすることにしたようだ。

「あの晩、ラシルとイリスは夜遅くに帰ってきたじゃん。なんかあんたが変なことしたんじゃないの？ 傷心のイリスにつけこんでさ。だから調子が狂っちゃったんじゃない？」

「なにもしていない」

それは事実だ。ただ、自分の発言がイリスの心を余計に混乱させたかもしれない事は黙っておくことにした。

ミルテはラシルがからかわれる話題を逃さない。少し身を乗り出してにっこり笑った。

「その言葉に嘘はなさそうですね。でも今の言葉の前に『まだ』を付け加える必要はありそうですね」

「うわー、イリスの貞操の危機だね」

メノウは冗談めかしながら顔をしかめた。

「イリスは可愛いですからね」

ミルテの言葉にジンは驚いた声を出す。

「ミルテもイリスが好みなんだ。確かにシリアさんに似て綺麗だけど」

「ジンの基準はいつもシリアですね。イリスを誉めているようでちやっかりシリアを誉めてますよ。そういうことは本人の前で言わないと意味がないことを早く悟りなさいな」

狼狽し頬を上気させるジンの様子に満足して、ミルテはさらに続けた。

「イリスはいつも朗らかにしていますが、時折ちらっと見せる寂しげな顔がいいですね」

イリスの寂しさに気づいていたのが自分だけではなく、ミルテも同様に気づいていた事にラシルは嫉妬や悔しさ、その他いろいろ混ざった複雑な気持ちが湧き上がった。

（仲間であり同時に友達でもあるミルテには知られたくない気持ちだな）

顔色を悟られないよう、ラシルは不自然にならない程度に俯いた。口角は無理やり上げた。だが、さらっと聞き流せない自分の心の狭

さを認めざるを得ない。そして自分がどれくらいイリスのことが好きなのかも。

「まあ、興が乗れば一晩過ごせるかもしれませんが、そうすると私の命が危なくなるのでね。こうみえても長生きしたいですから。最悪、皆との最後の別れの祈りを唱えてあげられるくらいにはね」

ミルテはちらりとラシルを見てにやりと笑った。ラシルは軽く肩を竦める。

「いつもながら素直じゃないな」

イリスの話はいただけないにしても、ミルテは何だかんだいって仲間とずっと一緒にいたいという願望を持っているのだ。ラシルをはじめ、皆ミルテを憎めないのはその気持ちをも十分わかっているからだろう。その意を含めてラシルが物分りの良い笑顔を見せると、ミルテは途端に嫌そうに顔をしかめた。

「俺、もう寝るわ」

膝を抱えて黙って話を聞いていたアクアは急に立ち上がると踵を返して立ち去った。

「ちょっと待てよ。俺も行く」

メノウも慌てて後に続く。だが、急に立ち止まり振り返ると、ミルテに向かって馬鹿と叫び、再び走り去った。

「またケンカでもしたのか？」

「さあ、身に覚えがありすぎて、どれか分りませんね」

ラシルの問いにミルテはそう答え、肩を竦めた。

何かと騒がしい双子がいなくなると、暫くモスのくべる薪の爆ぜる音とまだ続いている舞の練習の曲のみとなる。今では口ずさめる程聞きなれた曲に耳を済ませていたジンが沈黙を破った。

「やっぱり旅芸人は普通の人と違っていいからかな、今までの依頼人と違って不思議な雰囲気をもっているなあ」

確かにジンの言うとおり、シリア一座の面々は不思議な雰囲気を持っていて。普段はさして何事にも執着を見せることがないが、いったん舞の事になると皆ひたすらに打ち込む。まるで苦行を積み天国を夢見る僧のように。だが、その様子はただ『芸を磨く』では片付けられないものがある。

(そういえば、モスが言っていたな、シリアとナナが地面に片手をつけて祈りを捧げていた、と)

モスは見えたものをまずラシルだけに報告する。彼は普段寡黙で優しそうな印象を持つが、彼の観察眼と情報収集能力は目を見張るものがあり、年を重ねるに連れて鋭さを増していった。ラシルの人間観察眼は彼を手本として養われた。

(その行為をするのはベイラム国かコヨルテ＝ラグドの人間か)

シリアの血縁というイリスはコヨルテ産の馬、リスに非常に興味

を持っている。

(と、言うことはコヨルテの民…?)

ラシルは自分の手のひらを眺め、ぎゅっと拳を作った。それが事実であるならば、イリスはいつか告げるであろうラシルの気持ちに答えてくれないかもしれない。ふと心に浮かんだその考えに奥歯をかみ締め、ラシルは首を振った。

(コヨルテ人が宿敵であるスカトル国の神殿で、果たして舞を舞いたいだろうか？ 常識から言えば「否」だ。…イリスは大地の女神を信仰する、俺の知らない小さな国の出身かもしれないじゃないか)

そう言い聞かせてみたが、一度生まれた疑念はなかなか心から離れることはなかった。

翌日は野宿ではなく、チュベロの街で宿泊だ。一日かけてたどり着いた宿屋で剣の手入れをしていたラシルの元に、いつもながら長い巻きスカートを綺麗に捌きつつシリアが入ってきた。

「相談があるの」

シリアは物憂げに席に座ると耳元の髪を煩げに掻き揚げた。見るからに彼女は疲れている。

時間の許す限り彼らは練習に明け暮れているが、彼女の思うほど効果を挙げていないようだ。それがさらに彼女を精神的に疲れさせるのだらう。

当初、夏祭りに間に合うようにトシスの街に入る予定だったが、『ネロール・ヘキセン公一座』もその街に入ることを知り、シリアは急遽行き先の変更を告げに来たのだった。

「残念だけれど、今のイリスではまた同じ結果になってしまっわ。これ以上イリスのスランプを増長させたくないのよ。トシスの街以外に、どこか他にいい街はないかしら？」

ラシルは剣を鞘にしまい、脇に立てかける。

「カシスの街はどうだ？ 港町で人の往来も多い」

海に面しているが背後には山を望むことも出来、山海の野趣あふれる独自の文化を持つ地域でもある。トシスに行けないのであれば港町で人の往来も多いカシスは無難な選択だろう。そこへ行くのであれば、そうそうに荷物をまとめ、このチュベロの街を去らなくてはならない。一つ山越えがある分トシスの街へ行くより時間がかかるのだ。

ラシルはさつと頭の中で幾種類か道の選択肢を考えた。急ぎであれば山の東ルートでもいいが、女子供がいる分西のルートの方が時間は掛かるが山肌が優しい。

ラシルはシリアに街の様子と行くまでの道筋を簡潔に説明する。

「いいわ、そこで。道はあなたにまかせる。皆に言わなくてはね」

シリアはラシルに微笑み、立ち上がり様吐きかけたため息を無理やり飲み込むと、顔を引き締め部屋から出て行った。

「さすがに連日連夜の練習のせいで疲れているのですかね」

ミルテはラシルに馬を寄せてきた。

イリスは一人馬車の後ろに腰掛け、揺られながらぼんやりと晴れ渡る青空を見上げている。トシスの街を出てから半月、ラシルも気がかりに思っていたが、誰かが近くにいるとそのような素振りは全く見せないで、イリスも指摘されることは望んでいないと思い、言い出せないでいた。

「そうだな」

ミルテがイリスについて話すとき心がざわめく。少しでもイリスが自分のことを憎からず思ってくれていることが分ればゆとりをもってミルテにも接することが出来るのだが、イリスの気持ちも、ミルテの気持ちも分らない今、ラシルは一人焦る心を抑えかねていた。

「この道は久しぶりに通りますね」

ミルテの言葉で前に一度カシスの街まで人を警護したことを思い出す。そしてある一つの考えにラシルは笑みを顔に湛えた。

「この先の泉で休憩にしよう」

「もう昼ですし、無難でしょうね。…訳もなく急に微笑むと気持ち悪いですよ」

「俺は笑いたいときに笑うんだ。笑いたいときにあえて仏頂顔する誰かと違つてね」

軽く眉を寄せながらも凶星だったのだらう、何も言い返さずニルテは素直にシリアに告げに行った。

泉の周りには先客は居らず、顔を洗つたり喉を潤したりと皆思い思いにくつろぎ始める。

ラシルがイリスを探すと、イリスは一人で風に揺らめく木陰に寝転んでいた。ラシルが隣に座ると、軽く微笑んで上半身を起き上がらせる。

「疲れたか？」

「馬車に乗っていたからそんなに。アクアもメノウも薬草取りに行つちやつて、暇だから寝転んでいただけ」

「では少し俺に付き合わないか？」

「どい？」

ラシルは口の片端を上げた。

「それは行くまで内緒だ」

「じゃあ、シリアに言ってくるよ」

イリスも興味をもつたらしい。立ち上がる彼の腕をラシルは掴み、首を横に振る。

「シリアに言ったらナナ達が付いて来るだろう？」

泉の側でシリアとナナ、ユリアにチファ、コリーが輪になって雑談を楽しんでいる。

「駄目なの？」

「駄目だ。俺はイリスだけに見せたい」

「…分った、いいよ」

顔を軽く伏せたが、イリスの頬が軽く上気するのが見て取れた。そしてラシルは気づく。彼は『彼だけ』という特別扱いを喜び、望んでいるのだ。

(そう分っていたら、いくらでもしたのに)

それは自分の望みでもあるので簡単なことだ。これからは進んで実行することにしようと心に誓った。

「かわりにミルテに言っておくから」

イリスを先にリスのところへ行かせ、ラシルはミルテの元へ向かった。モスでもジンでも良かったのだが、ミルテを選んだのは、もしかしたらイリスと二人で出かけると言った時の表情を見てみたかったからかもしれない。

(俺はつくづく子供っぽいな。もしミルテがイリスのことを本気で思っていたら俺はどうするのだろう)

ミルテは年が同じで初めて会った時から所謂『ウマ』が合った。軽口を叩き合っても後腐れないところがいい。彼の交渉能力も高く買っており、彼が仲間から外れることは考えられない。

今まで知っている性格からすれば、彼は自分の好きなものには秘密主義を通す。指摘されてはじめて渋々と、傍から見れば世の中で一番嫌いな物を話すかのように好きな物について話し出すのだ。好きな物でも人でも、それを知られることは弱みを握られるのと同じと思っっているらしい。イリスについてはあからさまに話すので違ふと思いたいが、ラシルはイリスの事になると霧の中を方向も分らずさま迷い歩いているような心持になってしまうのだ。

そんなラシルの心配をよそにミルテは意味ありげに笑い、ごゆっくり、と一言言っただけで、結局ミルテの気持ちは分らずじまいだった。

リスにラシルは先に跨り、懐に引き入れるようにイリスを引き上げ前に乗せた。

他愛無い話をしながら細い坂道を馬で進む。風が木々を渡り、光が競うように輝いている。今日この日が清清しい晴れでよかったとラシルは思った。

「ここから眼を瞑って」

「うん」

素直に瞳を閉じるイリスに自然と頬が緩む。木々のアーチを抜けると少し開けた場所にでた。明るい日差しに直ぐ眼が慣れず、ラシルは軽く眼を細める。

「まだ眼を開けるなよ」

ラシルはリスから降り、イリスを抱き下ろした。リスを近くの木につなぐとイリスの手を取り目的の場所へ誘う。

「とても風が気持ちいいね」

約束どおり瞳を閉じたままのイリスは風を楽しむように顎を上げた。

「眼を開けてもいいぞ」

「わあ…」

ラシルの合図で濃い茶色の眼を開けたイリスはラシルの思惑通り感嘆の声を上げた。

切り立った崖の眼下には面々と続く深い深い緑の森。奥には海が濃い青を輝かせている。それに続き明るい水色が空いっぱい広がる。自然が織り上げる見事なまでの色の絨毯、崖から吹き上げる緑の香りを含んだ風に、イリスは圧倒されたようだ。

「なんか…人間って本当に小さい存在だなんて思えるよ」

「そうだな、俺もはじめて見た時に同じ感覚に陥ったよ。これをイリスだけに見せたかったんだ」

ラシルは早速『特別扱い』を開始する。やはりイリスは嬉しそうに微笑んだ。

「言葉に…ならないね」

イリスはそう呟いて再び今度は自ら瞳を瞑ると両手を広げた。服が風を孕み、海原に漕ぎ出でる帆船を思わせる。

暫く二人は無言で立ち尽くした。

何気にイリスを見下ろしたラシルは心臓が止まりそうになった。

イリスは一步踏み出し、今にも崖から飛び降りそうに見えたからだ。

「おい」

慌ててラシルはイリスの腰を掴むと思い切り引き寄せた。その勢いあまってイリスを掴んだままラシルは後ろへ倒れこんでしまった。

「ゴメン！ 大丈夫？」

イリスの声が聞こえるが、彼の体の重みも心配の色を帯びた声色も心地よかったので、ラシルはそのまま瞳を閉じ、黙っていた。

「ラシル…？」

軽く揺すられ、これ以上は黙っていることは出来なくなった。自然と笑みが浮かんでしまったからだ。

「やっぱり、気づいてたんじゃん」

片目を開け、目を細めて安心した笑みを浮かべるイリスを確認してからラシルは体を起こし、イリスと向き合うように座った。

「イリスにかすり傷一つ負わせただけでもシリアに殴られそうなのに、怪我なんかさせた日には殺される。…どこも怪我はなさそうだな」

「ごめんね」

イリスはラシルの腕に付いた砂を払った。

「どうした？ 鳥にでもなった気分になったか？」

ラシルもイリスの髪についている埃を払う。イリスはされるがまま俯くと、少し恥ずかしそうに呟いた。

「鳥じゃなくて…なんか風になれそうな気がしたんだ」

「風？」

「そう。風と一つになってどこまでも高く、風の向くままに行ける気がした。風になれなくてもそのまま空に溶けられたらなあ、ってでも…」

イリスは言葉を区切った。ラシルはイリスの頬についた砂を払い、

そのまま頬に手を添える。ラシルには思い切った行動でもあったが、イリスは嫌がる風でもないのですそのままでした。

「でも、の続きは？ イリスはいつも最後まで言わないで言葉を飲み込んでしまう。今日はちゃんと見えよ」

イリスははつとラシルの顔を見上げた。そして思いかけずイリスの手が彼の頬にあるラシルの手に添えられる。驚いて少し眼を見開いたが、ラシルはすぐに微笑んだ。反対にイリスは泣きそうに眉をきゅつと寄せた。

「消えてもいいと思ったけど、あんたに引き寄せられた時もう少しここにいたいって思ったんだ。…一緒に」

暫くの沈黙の後の、しかも消え入りそうで掠れた声だったが、これは思い上がりでなく告白ではないだろうか？ 告白するには似つかわしくないイリスの表情だけれども。

思い描いていた夢が実現する時が来た。

「俺は、ずっと側に居て欲しい」

ラシルはゆっくり顔を近づけ、出来る限りの優しさを込めて、イリスに口付けた。それは怖がらせないように軽く触れるだけの、可愛らしいものだった。

離れ際、空いているイリスの手がラシルの胸元を掴む。真っ直ぐ自分を見つめる少し潤んだ瞳はかつて共に見た、ちりばめた宝石のような星空を思い出させた。

(あの時は何とか自分を抑えられたが…)

残念ながら今は出来そうにない。イリスの髪に自分の手を滑り込ませると、ラシルは先程とは違い噛み付くような激しさでイリスを求めた。

下唇を吸い上げ、次に全てを弄るように入れられた舌に初めは体を硬くしていたイリスも直ぐ緊張を解き、積極的に答え始める。自分からラシルの首に腕を絡めてくれたこともラシルを喜ばせた。

(初めてイリスをリスに乗せたときにも思ったが、イリスはいい香りがある)

幼い頃に庭で摘んだ名も知らぬ仄かに甘い白い花の香り。あの頃の幸せな思い出と今の満たされた気持ち相まって、自然に顔が微笑んでしまう。だが、その気持ちは長続きしなかった。ラシルがもう一度口付けしようと体を傾けるとイリスが胸に手を付き拒ばんだからだ。

「もう、帰らなきゃ」

先程の情熱は微塵も見せず、イリスは顔を背け立ち上がった。

憧れぬいた空を高く舞い上がる途中、急に羽を奪われた気分だ。胸は施しようもないほど痛い。だが、イリスの熱を知らなかった前に戻りたいとは全く思わなかった。

あまり遅くなると確かに心配するだろう。ラシルも立ち上がるとイリスと共にリスに跨り、もと来た道を無言で帰る。無口でいる分、心で噴出し反芻する迷いと疑問を消化できない。ラシルは唯一つだ

け、急に拒まれた理由だけでも知りたいと思った。

「イリス」

「さっきのこと、全て忘れてくれる？ 僕も忘れるから」

行きとは違い、なるべくラシルに凭れ掛からないように体を強張らせているイリスは、体と同様の硬い声でラシルの言葉を遮るようにそう告げた。

「何故だ？」

「最近毎日練習続きで疲れてたから、きつと魔がさしたんだよ。駄目なんだ、そういうの。僕には必要ないんだ」

「必要有る無しの問題じゃないだろ」

「僕にはやらなければいけない事があるから」

「神殿での神おろしの舞か？」

「そうだよ、どんなことをしても舞わなくてはならないんだ。だから色恋沙汰にかまけている暇はない」

「あまり楽しそうに見えないが」

その言葉に引っかけたのか、イリスはキツとラシルを振り向き様に睨み上げた。

「楽しいとか楽しくないとかは関係ない。あんたは認めていない様

「ただ、僕に出来るのは舞うことだけなんだ」

声を荒げるイリスとは対照的にラシルはそっと微笑んだ。

「いつもそうやって心の中を出せばいい。そうしたらもつと俺はイリスを知ることが出来る」

イリスは痛みを堪える表情をし、胸に下げている袋を握った。心を落ち着けたいときに見せる彼の癖のようなものだ。

「とにかく、忘れてくれればいい」

ぼつり、と呟き顔を元に戻した。

「イリスが忘れても俺は忘れない。俺はイリスが好きだからな」

はつきり言葉にした告白。前を向いているのでイリスの顔色は窺うことが出来ない。

「困るよ、そんなの」

その掠れた声に困惑以外の、ラシルを喜ばせる感情が存在したように聞こえた。

(俺の希望的観測だろうか?)

確かめるため、もう一度目の前のイリスを抱きしめたい衝動に駆られる。それを押さえるため、ラシルはイリスの手綱を血管が浮き出るほど握り締めるしかなかった。

第8話

シリアの望む成果がえられないまま、カシスの街についてしまった。

イリスは初めて間近に見る『海』にも、風の運ぶ森とはまた異なつた香りも心から楽しむことができないでいた。

馬車の荷台から見える朱と黄色の交差する水面は、夜の帳が下りる前触れだ。浮かぶ多くの船の揺らめきと辺りを包む赤い色に、イリスの記憶は勝手に昔へさかのぼっていった。

「ナナ様、どこへ行くつもりですか？」

突然の問いかけに、こつそり部屋を抜け出そうとしていたナナは一瞬体を強張らせたが、相手がイリスだと分かると、満面の笑みで駆け寄ってきた。運んできた水差しを飛びつかれてこぼれる前にイリスは慌てて机に置く。

「これから占星術の講義が始まる時間でしょう？」

「あのお話を聞いていると眠くなってしまつんですもの。小さい声でぶつぶつ言うのよ。きつと催眠術の講義と間違えていらつしやるのだから。それに毎回同じような事ばかりで、もうナナ覚えちゃったからいいの。それより……」

ナナはイリスの腕を引っ張り、小さな歯を見せた。

「イリスも一緒に行こう」

「どこへですか？」

「聖山の御蔵岩の近くにすごくいい香りのする花が咲くんですって。侍女のマルタが言っていたのを聞いたの」

御蔵石は神殿の裏手にある聖山にあり、大地の女神ベチベルが天界の神イソアミルを生むために籠もった洞穴として祭られている。山の中腹辺りにあるが、幼いナナの足では近いとは言いかねる距離でもある。

「御蔵石！ これから行つては日が暮れてしまいますよ。明日にしましょう。そうしたら私がお連れします」

イリスは宥めるようにナナに言った。

ナナはコヨルテ＝ラグドを治める神官長の愛娘であり、ゆくゆくは巫女としてこの土地を引き継がなくてはならない。一方イリスはその神官長に仕える母の口利きで6歳から神殿で働くようになった。

初めはもろもろの雑用をこなしていたが、母譲りの綺麗な顔立ちと舞の素質を見込まれ、今では季節の節目の大事な神事の奉納舞もちよくちよく任されるようになった。

ナナには初めて会った時から気に入られ、ナナが母親である神官長ニアに頼み込んだらしく、昨年からナナの世話係になった。周りからは兄妹のようだとと言われるほど仲がいい。イリスは兄弟がいないので実際ナナを、立场上恐れ多いことではあるが、妹のように思

っていた。

「明日じゃ駄目。その花はお空に星が現れると同時に花が開いて、お日様の光に当たると萎んでしまうの。しかも一晩しか咲かないんですって」

大切な妹を守るもの兄の務めと思い、イリスは首を振った。

「例えそうであっても講義の先生を待たせておくわけにはいきません」

本音を言えば、コヨルテ＝ラグドはスカトル国の軍勢と交戦中であり、コヨルテの国を守る強固な城壁の表を流れる川を挟んでならみ合っている。膠着状態は今に始まったことではないが、万が一を考え、聖山に登るために城壁の外へナナを出したくないだけなのだ。ただ、そんなことを言えばナナを悪戯に怖がらせるだけだと思いう理由を挙げたに過ぎない。

「そんなの受けていたら花が咲き始めちゃう。イリスと一緒に行ってくれなかったら私一人でも行くから」

ナナの変わらぬ強気の状態にイリスは再び首を振った。しかしこれは先程の『否定』ではなく『降参』の意味だ。

「分かりました」

結局イリスはナナに甘いのである。そしてナナはこう言えばイリスが付いてきてくれることを十分知っているのである。

「では見つかる前に出かけましょうか」

行くとなれば途中で捕まるのも面白くない。ナナはにっこり笑うとイリスと手をつないだ。

「安心して、私が誘ったことにすれば誰も怒らないから」

確かにそうかもしれないし、実際そうだ。

（ただ一人を除いてね）

イリスは口に出かかったが、あえて言うのをやめた。

ナナを神殿から連れ出し、裏の聖山に入るまでは順調に行っていた。はずであった。

「イリス、待ちなさい」

山道に入りかけたとき、後ろから聞き覚えのある声が凜と響いた。イリスもナナも一瞬にして立ち止まる。

「…シリア」

イリスは、叔母でありナナ付きの侍従長であり、ナナが唯一言う事を素直に聞くシリアに出来るだけ微笑みながら振り返った。

案の定、仁王立ちでシリアは立っていた。

「イリスは悪くないの、ナナが無理やり連れてきたの」

ナナは言葉どおり気丈にイリスの前に立つとイリスを庇ってくれた。

「いえ、ナナ様は悪くありません。しっかりお止めできなかった僕に責任があります」

「本当に仲がいいわね」

庇いあう二人に、シリアはため息を付いた。頭ごなしに怒る気は失せたらしい。

「これから夜になると言うのに聖山に来てどうするつもりなの？」

イリスはかいつまんで話を聞かせた。

「月光花ね、あれは本当にいい香りよ」

「知っているの？」

「もちろん。早く行かないと咲き始めてしまうわ。花が開くときが一番香るのよ」

「じゃあ…」

イリスとナナは顔を見合せ微笑んだ。シリアは右手の人差し指を一本立てた。

「その代わり、明日から一生懸命お勉強に励んでいただきますよ」

「わかったわ」

ナナは意気込んで頷いた。シリアは右手の中指を追加した。

「二つ目、これからはちゃんと根回しして物事に当たるように。思い付きでは世の中上手く渡れませんかよ。占星術の先生には体調がすぐれないとお伝えしておきましたし、安静にするために誰もナナ様の部屋に近づかないように言い含めておきました。これで一晩は騒ぎにならないでしょう」

シリアは右手の薬指をさらに加え、艶やかな唇をきゅっと上げた。

「三つ目、私も一緒に行きます。なぜなら月光花が大好きだからよ。ここで私を仲間はずれにしたらどうなると思う？」

結局シリアもイリス同様ナナに甘かった。シリアを味方にしてしまえば何も怖いものはない。怒ってさえいなければシリアは快活で楽しく、頼れる人なのだ。

「もちろん一緒に！」

イリスもナナも喜んで頷いた。

神殿の裏山は聖域で、神殿に仕える者以外は入ることは許されない。ナナとイリスは小さな頃からここを遊び場としていたので御蔵石までは暗くても勝手知ったる道だった。

「なんか、甘い香りがしてきた」

もう直ぐ御蔵石と言う所でイリスは漂う香りを感じた。

「月光花の香りよ。咲き始めたのね」

「早くいかなきゃ」

シリアの言葉にナナは二人の腕を掴むと先を急かした。

香りを辿ることで、御蔵石の近くという以外に月光花がどこに咲いているのか詳しく知らなかったのだが、安易に探し出すことができた。

月光花は蔓状の植物で、白く先のとがった大きな蕾の先が開き始めていた。今日は新月で辺りは暗いにもかかわらず、花は自ら光を放っているように白く淡い輝きを身に纏っている。

「光ってるよ、シリア！」

ナナは驚きの声を上げた。

「これが月光花の名の所以ね」

鼻を近づけ、シリアはうっとり息を吸い込んだ。

「もっと沢山咲けばこの香りの水が取れるのに残念だね」

イリスも同じように瞳を閉じて香りを楽しんだ。だが、その花とは異なつた匂いが混ざり、イリスは弾ける様に顔を上げた。シリアは急いで高台にあがる。

「…なんてこと」

イリスもシリアの隣に立ち、言葉を失った。

「街が燃えている」

幾筋もの黒味を帯びた煙が眼下でたなびいている。所々に現れる真っ赤な炎が蛇の舌を思わせて気味が悪い。

「行かなくちゃ」

突き動かされるように駆けだそうとしたイリスの腕をシリアが思いきり引き戻す。

「行ってどうするの？ ここに来たのはきつと神の思し召しだわ。私達のやらなければならぬことは街に下りることではなく、ここでナナ様を守ることよ」

シリアの言葉を聞くまで、腰にナナがしがみついている事さえイリスは気が付かなかった。ナナの顔は不安で押しつぶされそうにゆがんでいる。イリスの心が不安定な事も彼女の心配に拍車をかけているに違いない。イリスは一つ、ゆっくりと息を吸い込んだ。

「大丈夫ですよ、ナナ様。僕たちが必ずお守りします」

イリスがしゃがむとナナが抱きついてきた。泣いてはいないが、震える体がイリスに彼女がとても怖がっていることを知らせた。きゅっとナナを抱きしめたイリスはシリアを見上げた。

「状況が分らない以上、下手に動くより夜が明けるまでここで身を

潜めていたほうがいいと思うけど。同盟国のベイラム軍が来てくれるまで持ちこたえれば、なんとか」

シリアはイリスが冷静になってくれたことに安堵しつつ、顔を引き締めて頷いた。

「ただただ聖山を焼かれないことを祈るしかないわね。幸か不幸か今日は新月だから敵には見つかりにくいでしょうけど」

神に祈りが通じ、聖山に手をつけることなくスカトル軍は去っていった。その代わり、街は再起不能と思われるほど思い切り叩きめして行った。この攻撃は本当に見せしめにしか過ぎなかったのだろう、駐留することも無くスカトル軍は次なる戦地へ赴いていった。

「ひどい」

ここが本当にコヨルテの街なのだろうか？ 辺りは焦げ臭い匂いが充満し、まだ炎が消えていないところさえあった。まぶしい朝日に隅々まで照らし出された街は文字通り眼を覆いたくなる状況だ。血の海を見ただけで吐き気がしてくる。初めに向かった神殿にたどり着くまでだけでも幾つの遺体を見てきただろう。知っている顔が多い事も三人の心を締め上げる。

「女子供関係なく殺るなんて」

シリアは返り討ちにあって亡くなった敵方の兵士が持っているベ

つとり血の付いた剣を憎憎しく睨んだ。

一番奥の祭壇前の部屋にたどり着いたイリスは立ちすくんだ。普段はカツシアや乳香の甘くそしてスパイシーな香りに包まれているが、今日は血の匂いが真っ先に鼻を衝く。その真っ赤な海の真ん中に五人ほどの侍従が横たわっていた。

「母さん…」

イリスは祭壇の間に一番近いドアの前で母の姿を見つけた。神官長付き侍従長の母は神官長を守ろうとしたのであろう、抵抗が激しかった分損傷も激しかった。

「キリア」

シリアは姉の名前をそっと呼んだ。

不思議と悲しい、辛いなどの感情が感じられない。頭がこの事態を理解することを拒否しており、白昼夢を見ている気さえする。

(夢ならそれでいい)

はやく目覚めて母の笑顔を見たい。

『早く起きないと、またシリアに遅刻を怒られるわよ』

小言でもいいから何でも母の声を聞きたい。だが、目の前の母は血の気がなく、石像を思わせるように冷たいままだった。

昨晚やはり感情のまま聖山を駆け下り、皆を、いや母を助けるべ

きだったのではないだろうか。他にも彼らを助ける方法が何かあったのではないだろうか。自分は間違った選択をしたのではないだろうか…

次から次へと湧き上がる後悔がイリスの頭を混乱させる。

「…いやだ…」

イリスは髪に両手を突っ込むとあれほど混乱していた頭が真っ白になり、体の力が自然と抜け、床にひれ伏してしまった。そんなイリスの背中をシリアは優しく摩ってくれたが、あまり効果は上がらなかった。

二人の啜り泣きの合間を抜け、奥の間から鈍い音が聞こえた。イリスもシリアも体を強張らせる。

まだ敵兵がいるのかもしれない。

「そういえば、ナナ様は？」

辺りを見回したがナナの姿はない。

シリアは気丈にも敵兵の遺体が握る剣を引き抜くと奥の間を伺った。今のシリアならどんな相手でも切り捨ててしまえそうだ。

「ナナ様！」

奥の間を覗き込んだ途端、シリアは剣を投げ捨てると中へ入っていった。イリスも涙を拭い、重い体を叱咤してシリアの後に続いた。

床に倒れているナナをシリアが抱き起こしている。先程の音はナナの倒れた音だったのだろう。

アカシアの磨きぬかれた祭壇上にナナの母親で神官長のニアが仰向けに倒れていた。だらりと下がった白い腕が人形を思わせた。

ナナは一人でこの部屋に入り、現実を背負いきれず自ら意識を手放した。大人びて見えるが、まだナナは六つになったばかりなのだ。

シリアはナナを左手でぎゅっと抱きしめると祭壇の奥にある顔を碎かれたベチベル像を見上げ、空いている右手を床につけ、大地の女神に祈る形を取った。

「私達にこの無念を晴らせる力をお与えください。これではあまりに酷すぎます。どんな試練があろうと目的が果たせるのであれば構いません」

イリスも同じように跪き、床に手を置いて祈った。今はどうしたらいいか分らないが、きつといい道を指し示して下さるであろう。

シリアはナナを床に寝かせると祭壇へ向かい、神官長をどうにか見られる恰好に整えた。そして大地の女神に捧げられた聖なる土を転がっていた壺に入るだけ入れた。

「いきましよう」

シリアが決意に溢れた静かな声でいい、ナナを再び抱きあげ立ち上がる。イリスは母のところへ行き、体を真っ直ぐにし眼を瞑らせる。本当はちゃんと葬儀をしたいが、状況を考えると母だけ特別に

することは憚られる気がした。せめて、と思いイリスはシリアから一掬いの土を貰うと母の胸元へかけた。聖なる土は母を天国へいざなってくれるに違いない。

（行って来ます）

そうして最後の別れを告げた。

街の中は元の形が分らないほど破壊されているが、城壁は壊れていない。

「きつと誰かが手引きしたのだわ」

シリアは唇をかみ締めた。頑丈な城壁は裏を返すと逃げ場もない。もしもの時には逃げ道も考えられていたが、新月の夜陰に紛れた襲撃に上手く機能しなかったのかもしれない。あまりにも多い瓦礫と遺体の山は、いたたまれない光景に初めは顔を背けていたイリスの心を次第に麻痺させていった。

「声がするわ」

街の外れでシリアが声を聞きつけた。

「敵兵かな…」

イリスは体をこわばらせる。

「女の泣き声みただけだ。もしかしたら生き残りかもしれない」

シリアが辺りを探し、井戸の中から濡れ鼠のように体を震わせた女性を引き上げた。当時は名前を知らなかったが、コリーだった。

物陰から気を失っているユリアを介抱し、家の瓦礫の前で放心状態のチファを見つけた。

偶然出合ったこの六人で当てのないままコヨルテを出て暫くは街から街へと渡り歩いてきたが、たまたま借りた宿で礼のつもりで舞ったイリスの舞が余りにも好評で、日々の生計を立てるために本格的に一座として活動を始めた。ユリア、チファ、コリーの三人もりズム感がよく、素質があつた事も幸いして、人気は早いうちから出始めた。

コヨルテ人であることは隠し、ナナ様のことを『ナナ』と呼ぶようにした。イリスはその呼び方に抵抗を感じたが、当のナナはまんざらでもないらしく、直ぐに受け入れた。

シリアは積極的に人の集まる所へ行き、他のコヨルテ人の噂を集め、実際会つたりした。だが、あの戦で殆どやられてしまったのか身を潜めているのか、思った以上にその数は少ないのが実情だ。

「これでは何も出来ないわ」

シリアの余りにも悔しそうな声が印象的だった。彼女はただスカトル国に復讐する事だけが生きがいになっていたので落胆も激しかったようだ。その頃は近寄ることさえ憚られる程だった。

それが一転したのはスカトル国が新しい神殿を建て、そのこけら落としに神おろしの舞を人気の一座から選ぶという話を聞いた時だった。

「私達なりの方法で戦えばいいのよ。剣だけが戦いの全てではないわ」

シリアは再び生氣を取り戻し、皆に話した。スカトル国の民の勝利の証である神殿に彼らの崇拜しない神をおろし、精神的に『乗っ取る』と。

「できるかしら？」

ユリア、チファ、コリーは一斉にイリスを見つめた。責任は全てイリスの肩にのしかかったも同然だ。まず神おろしの舞手に選ばれなければこの復讐は始まらない。

（そのころから、舞う事が楽しくなくなってきたのかもしれない）

生計を立てるためだけの時は、自由に相手を選べたが、目的のある今、選択の余地は全くない。その頃から首から提げた袋を握る日々が多くなった。その中にはシリアが神殿から持ち出した土が入っている。辛い時はそれを握り締め、無残に命を散らした仲間たち、そして母を思い出すのだ。

（ラシルが言う通り、完璧に踊って見せても無理やり舞っている事が観客に伝わっているのかも知れない）

ふと心に過ぎったラシルの面影に心臓が一つ早くなる。今思い返しても、彼らと合流してからの旅には楽しい思い出が急に増えた。

(メノウとアクアとはいい友達になれたし、それにモスもジンも優しい。ミルテは基本的にいい人だし)

そしてラシル。彼も優しい。だが、ジンやモスとは違い、その優しさはイリスの心を満たしつつ揺さぶる。彼が近くにいると落ち着かないが、近くにいないとまた別の意味で落ち着かない気持ちになる。

(駄目、駄目だ。これ以上考えるのは)

だが、あの綺麗な景色の崖でラシルに引き寄せられた時は全てを忘れた。そのためか思いかけず自分から彼に腕を絡ませてしまった。今思えば勝手に体が動いてしまったとしか言いようがない。そのことに気づき、狼狽して三度目のキスは拒否したものの、ラシルにしてみれば急にどうしてだか理由が分らないだろう。

それでも『好きだ』と言ってくれた。

(あまりこの世に未練を残したくないんだけれど)

そう考える辺りもう手遅れだということにまだイリスは気づいていない。ただ、急に頼りなくなつた心を落ち着かせるために両腕で自分を抱きしめた。

「到着したよ。…どっか具合でも悪いの?」

驚いて顔を上げると、心配げにイリスの顔を覗きこむアクアの瞳が眼に入った。気づけば先程までイリスを包んでいた空の赤い帳は硬い青に変わっていた。思った以上に思い出に入り込みすぎたらしい。

「全然大丈夫」

アクアに余計な心配をさせないようにイリスは歯を見せて笑って見せた。

カシスの街も他の街と同様に明日から始まる夏祭りの準備が進められていた。色とりどりの飾りつけを見る限りでは祭りを今から始めてもおかしくない程完成されていた。大勢の女性が手一杯に白い花を持ってどこかへ消えていく。肉の焼けるいい香りも流れてきた。人々で沸き立つ通りを眺めつつ、イリスたちは町の中心の広場で馬を止めた。

祭りは人の心を浮き立たせるものだが、準備を進めるこの街の人々の浮き立ち様はそれだけでは説明がつかないような気がした。

「いつもは漁に出て帰ってこない男たちが祭りの間中はずっと街に留まるそうだ」

楽しげに会話をしつつ行き交う人々を見ながらラシルはイリスに話しかけた。彼は前と変わらず同じように接してくれる。気負いのなさがイリスにはありがたかった。

「そういえば港に船がいっぱい浮かんでいたもんね。だから皆嬉しそうなのかな」

そう答えたものの、何故かイリスの体はこの雰囲気を受け入れられなかった。

暫く街の様子を眺めていると、知らない間にいなくなっていたシリアが息を切って走り戻ってきた。

「この街長の奥様が舞を見たいそうよ。もし気に入ればいろいろと便宜を図ってくださいる約束を取り付けてきたの。だからがんばって今できることをしっかりとやりましょう」

シリアは明るくそう言っていてイリスの肩に手を乗せた。だが、シリアの瞳に少し不安の影が過ぎったのをイリスは見逃さなかった。

広い部屋に一つだけだが惜しみなく送られた拍手が鳴り響いた。同時にシリアの顔も明るくなる。

「素晴らしいわ」

カシスの街長で港の権益を一手に牛耳るカロンの妻であるマンダは、豊満な巨体を揺らしつつまだ拍手をやめないでいた。

「あなたの舞はとても清楚ね。もぎたてのレモンの様な清潔感を感じるわ。これこそ本来のお祭りにふさわしい舞だと思いました。ご存知かどうか知らないけれど、この祭りは少し…猥雑だから」

軽く頬を染めながら言うマンダは、話し振りからこの夏の祭りに余り感心していないようだ。

(とにかく、気に入ってもらえてよかった)

イリスは緊張していた体をほぐす為ゆっくりと息を吐きだした。

「主人は今用事で明後日まで帰ってこないけれど、その間は私がしっかり後押しさせていたから安心してね」

カロン夫人はその言葉通り、まず離れの部屋を今回の宿に提供してくれた。離れといっても部屋は少なくとも十五以上はあり、一人に一部屋ずつ割り当ててくれた。

「なんか急に一人にされるとかえって落ち着かないんだよね」

メノウはこれまたカロン夫人の好意で呼ばれた晚餐の席で隣に座ったイリスに正直に打ち明けてきた。

隣ではせっかく掴んだ強力な後援者をここで逃す手はないと必死なのだろう、シリアがカロン夫人を上手く持ち上げていた。端正なラシルとミルテも卒なく相槌を入れるので、ほろ酔い気分も手伝わてか、カロン夫人はこれ以上ないくらい上機嫌で笑い声が絶えない。

(みんな一生懸命後押ししてくれる)

イリスはふがいない自分にいたたまれない気持ちになる。早くシリアに満足して貰えるような舞を舞わなければならない。

(でも、前の自分のままじゃ駄目なんだよね)

それだけは分っていた。実は少しずつだが、イリスは解決の糸口が見えそうな気がしているのだ。それに気づいたのはラシルと行った美しい景色を見てからである。勿論綺麗な景色を見たからだけではないことも、認めたくないが、分っていた。

「食べ終わったら街の様子見に行かない？」

双子の誘いに乗って、イリスはラシルに告げずこっそり部屋から抜け出した。彼はまだカロン夫人に捕まっており、あの調子では当然抜け出せないだろう。

イリスは双子と今ではすっかり日の暮れた街を夕涼みしながらぶらぶら歩いた。山から海に吹き抜ける風がいたるところに掲げられている色とりどりの旗を揺らめかせている。

「この夏の祭りはどんなのか知ってる？」

夏の祭りといえば今までの農作業の苦労を労い、秋の作物の豊作を神に祈るものだ。その基本はどこも変わらないものの、各地方地帯によってやはりそれぞれの特徴が出る。イリスの祖国、コヨルテⅡラグドでは綺麗に染められた羽を身につけた若い女性がベチベルに祈りを届ける舞を舞いながら街を練り歩くものだった。最後に高台からまかれるその美しい羽の全ての色を拾うのが子供たちの楽しみであり、イリスもその一人となって全部の色の羽を集めて母にあげた。翌日目覚めるとその羽は子供心をそそる首飾りに変わっており、再びイリスのものになったそれを友達に自慢して見せたものだ。

イリスの言葉にメノウはポケットから一輪の花を取り出した。アクアは興味深そうに花を眺める。

「カンフの花？ でも珍しいな、普通は赤いのに真っ白なんて初めて見た」

「だろ？」

草木に詳しい双子が珍しいのだから、本当に変わっているのだろう。

「ここの男たちはこの花を持って山の麓に立つそうだ。後からやってきた女性に差し出して、めでたく受け取ってもらえると一緒にその花を山中の神殿に奉納しにいくんだって。で、後は…まあ想像通りだね」

カロン夫人が『猥雑』といていたのはこのことだろう。コヨルテにはそういう風習はなかったが、南地方へ行った時にそういう話を聞いたことがあった。ただ、北の地域に属するカシスの町にその風習があるのは珍しいのではないだろうか。

(もともと南に住んでいた民で、海を渡ってここに定住したのかな)

イリスはぼんやりと勝手に仮説を立ててみた。メノウは花を器用に指で回していたが、ぴたりと止めた。

「ねえ、明日俺たちも試しに行ってみね？」

メノウの提案にイリスもアクアも一斉に首を横に振った。

「ヤダよ」

二人の様子にメノウはにやりと笑う。

「おっ、怖いのか？」

「違うよ。…その、俺達みたいなよそ者を相手にするとは思えないし、選ばれなかったら結構プライド傷つきそう」

アクアの言にメノウは唸った。

「ん〜、確かに。考えてみると、ある意味残酷な祭りかもしれないなあ。でもイリスは別として、俺たちも顔だけだったら結構良い線いっていると思うけど」

『顔』だけに限定する辺り、自分達の性格を分っているのだろう。

イリスは『そばかすが消えればあの二人はなかなかかわいい顔をしているのよね』とコリーが言っているのを聞いたことがある。彼女は舞台用の化粧を使って双子に化粧を施したいと虎視眈々とその機会をうかがっていたが、二人は逃げ回り、まだその野望は成就されていない。

メノウは花を再びポケットにしまうと、わざとらしくひとつため息を吐いた。

「残念だけど、君達はやっぱりラシルとミルテで我慢しときなよ」

「違っつて言ってるじゃん」

にやにや笑うメノウにイリスとアクアは、いつも双子がするように、期せずして声を合わせ否定していた。

第9話

夏祭り初日。

シリア一座は開放された広いカロン邸の庭の一角に場所を借り、夕方から始まる祭りに備えた。

「とりあえず、見た限りではイリスの敵になりそうな有能な舞手はいないみたいね」

昼から街に偵察に出ていたシリアは戻るなりそう言い放った。

「ねえ、スカートの裾汚れているよ」

ナナが指差したところには茶色いシミと、発泡酒の饅えた匂いがありました。

「これは負け犬の遠吠えと思えばいいのよ」

街で他の一座を偵察に行った時に相手からかけられたのだろう。いきなり街にやってきて、しかも有力者の寵愛までさらった『シリア一座』は羨望と嫉妬の対象になっていた。

「さあさあ、貴方たちはそんな顔しないの。お客の入りは上々よ。がんばって頂戴ね」

手をたたきながらシリアは皆に気合を入れていった。

長いかもしをつけ、ここでも人気の演目『乙女の舞』の衣装を身

にまとったイリスは、舞台袖からユリア、チファ、コリーの舞いを見ていた。

(初めのころより数十倍も上手くなったな)

もちろんイリスの方が技術的には数倍も上手いのだが、ここ最近何故かイリスが足を引っ張っているような気がしてならない。

舞い終わった三人は優雅に頭を下げると拍手の中、こちらにはけてきた。

「がんばってね」

こっそり応援もしてくれる。イリスは頷くと舞台の中央へ出た。

「おお…」

観客からのどよめきもいつもの通りだ。イリスもいつもの通り、何気ないふりをして客席の一番後ろに目をやる。

(あれ、いない)

定位置にラシルはいなかった。客席の一番後ろ、イリスが良く見える場所に彼がいることを確かめるのが最近の舞を舞う前の儀式みたいなものになっていた。ラシルがいないことで生まれる不安感を知ること、今まで彼の姿に安心感を見出していたことにむりやり

気づかされる。

いつの間に、こんなに彼を頼るようになってしまったのだろうか？

(と、とりあえず、今は舞に集中しなきゃ)

瞳を閉じ、身を低く構え、曲が始まるのを待つ間、何回も自分に言い聞かせた。

静かな始まりに合わせ、ゆつくりと草木が芽生えるように体を伸ばしていく。イリスの動きにあわせて観客の視線が動く。それもいつものことなのに、イリスには熱く、重く感じられた。

(なんだろう…)

勝手が違うことにイリスは戸惑う。舞が進むにつれそれは大きくなっていった。そしてイリスの『乙女の舞』は、同じ舞でも観客が今欲してる舞方とは違うのだ、という事が分った。

(引きずられる。これでは僕の舞が壊されてしまう！)

頭が空白になりかけたイリスは、意識から観客からの波動ともいえる高まりを遮断した。その途端、彼らは自分から遠ざかったように思え、同時に果てしない敗北感に襲われた。

イリス以上の上手な舞を見たことのない観客はそれでも惜しみない拍手をくれたが、イリスの耳には届かない。ただただ、この場から逃げ出したい一心だった。

楽屋に帰ってきたイリスに誰も声をかけない。彼の苛立った雰囲気

気が通じ、皆遠巻きに見ていたが、イリスにとってはかえって有難かった。気難しいと思われてもかまわない。無言で手早く化粧を落とし、明日のために衣装を調べ壁に吊るした。

「おつかれさま」

全て自分のやるべき事が終わるとイリスは最低限度の挨拶だけ済ませ、そそくさと楽屋を出て行った。

（早く一人になりたい）

カロン夫人が一人に一部屋与えてくれて良かった。カラムスに負けた時とは又違う敗北感を持って余しながら、イリスは賑わう庭先を小走りで走り抜けた。

「痛って…」

もう少しで部屋のある離れにたどり着くという時に人にぶつかり、イリスは転倒した。

「気をつける」

イリスはつばを吐き様に怒鳴りつけるぶつかった男を一睨みしたが、男はイリスの顔を見た途端に片方の口端を上げた。

「これは…『シリア』一座の花形役者様じゃありませんか？」

「人違いだろ」

そつだ、と言つても状況が好転しそうにないのでイリスは嘘をついた。だが、その言葉には騙されず、男は首を一つ横にふる。

「いいや、商売柄人の顔を覚えるのは大得意でね。特に商売敵ともなれば」

男は普通よりは整った顔をしている。どこかの一座の役者の一人だろう。彼が一步近づくと、伊リスは尻餅をついたまま後ずさりする。

「あんた達のおかげでこつちは商売上がった。そつだ、このまま稼ぎ頭がいなくなったらどうなるかなあ」

男は楽しそうに言っているが、淡い青の瞳は全く笑っていない。

(本気で僕をどうにかする気だ)

助けを呼ばなければと思うが、ここは庭の片隅で、しかも祭りの中心では運悪く華やかな音楽も始まり声が届きそうにない。それならせめてこの場から逃げ出そうと立ち上がったが、背中が壁にぶつかる感触を感じた。

(うそ！ 追い詰められた)

じりじりと迫る男にイリスは腰の辺りに手を彷徨させた。震えてなかなか探し出せなかったが、いつも提げている短剣の柄を布の下

からこつそり掴むと、心を決めて切りかかるタイミングを計った。

もう少し近寄ってきたら切りかかるつもりだったが、その前に男はぴたりと止まり、軽く両腕を上げた。

「言い寄る場所はここではなく山の麓と聞いたが？」

聞きなれた声がした。明らかに怒りを含んだその声は、男を縮み上がらせるのに余りある。

「お前の顔は先程も見ただ。これからも忘れない様にその顔へ化粧でも隠しきれない傷をつけてやってもいいのだが……」

男は首を振ろうとし、左頬に剣先があることに気づいて口に出して謝った。

「すまない。ほんの出来心で、本当にどうにかしようなんて思っていなかったんだ」

「それにしてお前達のすることは度が過ぎている。同じ舞手として戦うなら同じ舞台上で勝負しろ。相手を妨害しようとする暇があるくらいだから余裕なのだろう？」

「…わかった」

「他の団員にもちゃんと伝える。『シリア一座』の誰か一人にでも手を出すとどうなるか。先ほどは逃がしてやったが、今度は傷どころではなく首と身体が離れることになるよな」

ラシルは剣先で男の頬を二、三度叩いて男をもう一度震え上がり

せると、剣先を下ろし「消える」と呟く。男はこれ幸いに、転がるようにその場から立ち去っていった。

「大丈夫…じゃなさそうだな」

いつまでも短剣の柄を離さずに握り締め、呆然と座り込んでいるイリスの前にラシルはしゃがんだ。

「とりあえず、物騒なものはしまえ」

イリスは魔法にかかったかのようにラシルの言葉にしたがった。だが、短剣が鞘に戻る金属音が引き金になり、急に恐怖感なのか怒りなのか分りかねる感情が湧き上がってきた。

「来るのが遅いんだよ。それに…」

どうして今日は見てくれなかったんだ

先程の男とのやり取りでなぜラシルが来なかったのか大体理解できたため、喉まででかかった言葉をイリスはむりやり飲み込んだ。それ以上に、ただでさえ心が不安定な時に弱音を口にしてしまったら自分がどうなるか分らない。

「それに？　ちゃんと最後まで言え」

イリスは答える代わりに首を振り、まだ少し震えの残る足を無理に立たせた。

「帰る」

「部屋まで送ろう」

立ち上がったラシルを押しつけてイリスは先に歩き出す。ラシルが後ろに付いて来るのがとてもいらただしく感じた。

「必要ない。もう放っておいてくれ」

思った以上にきつい口調になったが、構わなかった。自分から断ち切らないと心の不安を訴えてしまいそうだ。

イリスは唯一考えられる安全な場所、自分の部屋に向かって走り出していた。

「待って、今度は上手くやるから！」

そう叫んだが、観客はイリスに冷たい視線を投げかけ外へ出て行ってしまふ。その中にラシルもいた。森の木々が映り込む湖の様に深く青い瞳は氷の様に冷やかで、いつも綺麗だと思いつつ見ている金髪を煩げに掻きあげると他の客同様出て行ってしまふ。

「待つ……」

そういいながらイリスは目覚めた。辺りは窓から差し込む月光が床の一部を照らす以外真っ暗で、遠くで祭りのざわめきが聞こえる。他は静かだった。

(これで何回目だろう)

まだ祭りの音が聞こえるということはそんなに夜が更けているわけでもないと思うが、何度も短い夢を見ては起きていたので、時間がどれくらい経っているのかがはっきりしない。

(しかも今のが一番悪い夢だったな)

イリスはケットを引き上げるときゅっと握り締めた。たかが夢なのに心臓が早く打ち、すぐには寝られそうにない。

何度目かの寝返りを打った時、木の軋む音が静かに聞こえた。普段なら気づかないほどの微かな気配だが、頭が冴えて今は神経が過敏になっているようだ。

(もしかして、鍵かけ忘れた?)

部屋に入った時は気が動転していて、鍵をかけたかどうか全く覚えがない。ただ、ドアが開けられたことは事実で、自分の無用心さに呆れたが今は後悔していても始まらない。

(上手く逃げ出してラシルに……。でも、さっき一方的にケンカ腰で別れちゃったしな。いや、自分の身は自分で守れ、だろ)

思い直したイリスは相手に気づかれぬようにゆっくり腕を動かし、枕の下に隠した護身用の短剣の柄を握った。その銀独特のひんやりとして重い感触がさらに緊張感を高める。

ゆっくりと物音を立てないように入ってくる気配は段々近づいてくる。あまり間合いを狭められても華奢な自分が不利になるだけだ。そう判断したイリスは短剣を枕の下から抜き出し、鞘を払いながら跳ね起きた。

「誰だ！」

「悪い。驚かせるつもりはなかったのだが」

窓から差し込む月明かりに照らされた金の髪は、溶けた蜜蝋のように芳醇な色を湛えていた。暗闇に浮かび上がる均整の取れたシルエットはさながら月の光の化身の様だ。

「ラシル……」

「シリアが心配して俺をよこしたんだ。本当は彼女自身が行きたそうだったが、話しているうちに叔母ではなく座長の顔になってしまっっては今のイリスは嫌がるだろう、と」

だが、ラシルの言葉はイリスの耳に入っただけではなかった。

（もう、今日はこんなのはっきりだ）

冷や汗をかきながら二度も短剣を握った。

たとえ最後までまっとうできない寿命であっても、命が縮む思い

がするのは嫌だ。

（それに、なんで自分だけに復讐の負荷がかからなければならぬんだ）

今まで押さえ込んでいた感情が抑えられなくなってきた。

シリアは叱咤や誉め言葉を駆使して、何とかイリスの舞を良くしようと思死だ。答えなくては、と思う反面、彼女の瞳を見ると無言の圧力を受けているようで、息が詰まりそうになり逃げ出したくなることもある。偏にスカトル国が威信をかけて建築している神殿を乗っ取るためだ。だが、思いついたのはシリアなのだから、彼女がやればいい。そうすれば思うように舞が出来なくてもこんなに苦しい気持ちにならなくていいのだ。少なくとも今のままでは舞手に選ばれることはないだろう。

（だけど僕を一番混乱させるのはラシルだ）

彼に出会う前までは、ただ殺された母や仲間たちのことを思うだけでいくら辛くても耐えられる気がしていた。早く本番を迎えて、この世から開放されることを望んでいたが、今は首都インセンに着かなければいいのにと願っている自分がある。ラシルに全てを話したい自分がある。彼なら全てを話しても、それをひっくり返るめた自分を丸ごと受け入れてくれるだろう。だが、自分だけ安穩と暮らすことはきつと亡くなった仲間たちや団員に申し訳ない事に違いない。そのジレンマがさらにイリスを苦しめた。

「イリス？ 大丈夫か？」

何も言わない自分にラシルは顔色を見ようとさらに近づいてくる。

われに戻ったイリスはとっさに叫んでいた。

「帰って。これ以上近づいたら…」

「どうなる？」

ラシルは歩みを止め、両手を腰にあてた。イリスは答える代わりに先程から握り締めたままの短剣を目の前まで上げた。そこまでは威勢が良かった。

「手が震えているぞ」

ラシルに指摘され、イリスは慌てて空いている手で震えを止めるために利き手を掴み、ぎゅっと押さえた。震えに気を取られ、ラシルから眼を離してしまった。

「相手から眼を離すのはよくないな」

そう言っただけの大きな手が短剣ごとイリスの手を掴む。弾けるようにイリスはラシルを見上げた。

「離せよ」

掠れて弱々しい声では全く迫力が出ない。だが、今のイリスには精一杯だった。

その様子でラシルは軽く眉を寄せ、痛みを堪える顔をした。

「一番良くないのは、続けるような眼を俺に見せることだ」

ラシルは素早くイリスの手の中から短剣を奪い取ると部屋の隅へ投げ捨てた。

「何す…」

イリスの抗議の声はラシルの口で塞がれる。息をつかせない激しさだった。心のどこかで抵抗しなければと思うのだが、体が言う事を聞かない。しかもイリスは自分の体が次第に熱を帯び始めるのさえ感じ始めた。

（初めから抗えるわけなかったんだ）

力が抜け、潤んだ瞳で見上げるイリスの体を、ラシルはゆっくりとベッドに横たえていった。

第10話

「今日は舞いたくないってどういうことなの？」

激しくドアを叩き続けるシリアを無視し、イリスは振動を背に感じながら部屋に立てこもっていた。

朝、気づけば一人だった。全てが元通りで、まるで夕べのことは夢のようだ。

(でも、体は違っってはつきり言ってる)

誰とも会いたくない。いや、会いたくないのはラシルだ。どの顔をして会えばいいのか分らない。ただ怒りをぶつけられるのであればどんなに楽だろう。

(嫌じゃなかったから余計に夕チが悪い)

優しくされた記憶が辛いのは初めての体験だった。

イリスは肯定することも出来ず、かといって否定もできない自分の気持ちを持て余していた。

「えー、安宿と違って厚いし、いい素材使っているし、弁償するの
高そう」

ドア越しにチファの声が聞こえてきた。

「でも、シリアが言う通り、一人で思いつめてしまったらそれこそ

事よ」

ユリアが心配そうに答えた。

(どづい事だろづ)

暫くイリスはドアに耳を付け、廊下の様子に聞き入った。

(僕が心配で、ドアを壊すつて事?)

シリアが言い出したらしい。どづしり落ち着いたように見えるが、実は感情の激しい彼女ならやりかねない。

「後で私がカロン夫人に謝るから、このドアを打ち破ることの出来る道具を持ってきて」

イリスの思ったとおり実行に向けてシリアが指示を出し始めた。これ以上大事にされるのは嫌だったので、イリスは仕方なくドアを開けた。

「大丈夫?」

一番に飛び込んだのはアクアとメノウだった。心配してくれる友達がいるのはやはり嬉しい。

「ごめんね、心配かけて」

自然と沸いたイリスの笑顔に、二人の顔にも笑みが浮かぶ。次に二人を掻き分けるようにシリアが入ってきた。

「他の皆にも謝りなさい。とても心配したんだから」

「…ごめんなさい」

頭を下げ、再び上げた目の前には安堵の表情を浮かべるユリア、チファ、コリー。その後ろにジンとモス。壁際にミルテ、その隣に壁に背中を預け、腕を組んでいるラシルの姿があった。

ラシルの姿を眼にすると体の体温が勝手に上がり出す。直ぐにイリスは視線を外した。

「はい、解散。今日の準備に取り掛かって頂戴」

シリアは手を叩くと、体良く皆を帰らせた。シリアはイリスの肩を抱くとイリスの部屋に入りドアを閉める。そして彼女がめったに見せない狼狽した顔でイリスを見下ろした。

「あなたにしては珍しいわね、舞いたくないなんて。あなたにだけ重荷を背負わせていることはわかっているのだけれど、急だったから驚いてしまって。理由を聞かせてくれないかしら？ 話せば解決することもあるし、気持ちも楽になる。思えばあなたの話をここ最近忙しくて聞いてあげられなかったわね」

真剣に見つめるシリアの瞳に、イリスはここまで心配させてしまったことを申し訳なく思った。彼女の苦勞を知っているだけに余計そう思う。

(それに今は理由を上手く説明できないよ)

もし、そう、もし好きな人がいる、と告げたらシリアはどういう

顔をするだろう。

(って、何考えてるんだ、僕は)

敵の神殿で彼らの信仰しない神をおろす舞を舞えば捕らえられ処罰されるに決まっている。どうせ長くは生きられないのだから、あまりこの世に未練はつくりたくない。そう思っつてずっと生きてきたのだ。

(そう、好きな人なんて必要ないんだ、僕には)

今まではこの言葉で心に蓋が出来たのに、今日は上手く行かなかった。理由も分っているのだが、認める事はやはりまだ、怖い。

黙ったままのイリスにシリアは更に不安を募らせたらしい。物思いから帰ってきたイリスは愁眉を寄せるシリアに慌てて笑顔を作ってみせた。

「ちよつと甘えてみたかっただけかも。こちらこそごめんなさい、心配かけて」

本当ではないが、まるつきり嘘でもない。

深々と頭を下げるイリスを直らせると、シリアはぎゅっとイリスを抱きしめてくれた。その瞳は涙で湿っていた。

昨日と同じくらいの客の入りにイリスは舞台の端で安堵していた。

先に舞うユリア、チファ、コリーは落ち込んでいたイリスを少しでも盛り立てようと気合が漲っており、それが観客に伝わって昨日より雰囲気がいい。

（僕もがんばらなきゃ）

シリアを振り返るとやはり心配そうにイリスを見ていた。イリスはにっこり笑ってシリアを安心させると、大きく息を吸って舞い終えた三人の替わりに舞台に出た。

観客の感嘆の声の中、いつもの癖で観客の一番後ろを見てしまい、イリスは心臓が跳ね上がった。

今日はいつもの場所にいつものようにラシルがいる。こちらをじっと見る眼線が痛いくらいで、思わず瞳を伏せてしまいそうだった。

（前の三人のためにもちゃんとやらなきゃ）

思いなおし、始まりのポーズを形作る。舞の始まりと共に手を伸ばし、足を上げる。イリスはその動作に違和感を覚えた。

（今まで何の躊躇いもなくこんなに足をあげていたのだろうか？）

昨夜の開かれた自分の姿が脳裏を過ぎり、結局、恥じらいながら足を上げる羽目になった。一度目覚めた記憶はイリスに追体験をさせていく。すらりと伸びた腕と脚、華奢な首筋、平らな腹、そして彼の知らない部分にまで施された口付けの感覚が蘇り、肌が上気してくる。

(急に見られるのが恥ずかしい気がする)

そう思えば思うほど、観客から今まで見られなかった恍惚とした表情が浮かびだした。そして昨日以上に熱い波動のような視線に晒された。

(昨日はそれを拒んだけれど…)

今日は何故か素直に受け入れてもいい気持ちになった。季節がら本物の百合を頭に頂いている。アクアが百合には催眠作用と催淫作用の両方があるといっていたが、そのむせ返るほどの甘く重い香りがそうさせるのだろうか。

イリスは観客の熱を自分の中に取り込み始めた。

(なんだろう、すごく軽い)

途端に体も気持ちも自由に動けるようになるのが不思議だった。

ただ、観客の望むままに舞いたいわけでもない。自分の舞を押し付けたいわけでもない。理由づけすることさえ無意味と化していく。

(ただ空間と一つになりたい)

その願いだけに意識が集約されていく。

気づいた時には今までにない喝采と歓声がテント内に響いていた。暫くぼうつとしていたイリスは、その割れんばかりの地響きのよ

うな音で我に返り、思わずその場から走り去っていた。

「すごいわ、イリス」

舞台裏に下がった途端、イリスはシリアに捕まり激しく抱きしめられた。ユリアもチファもコリーもそれぞれに誉めてくれる。

「今までで一番いいよ」

「驚いたわ」

だが、一番驚いているのは自分だとイリスは思う。シリアはもう一度ぎゅっと抱きしめてからイリスを開放した。

「実は、今の舞台を街長のカロンが見ていたのよ。ちょうど良かったわ」

イリスを緊張させないようにシリアは黙っていたのだろう。彼女の気遣いにイリスはそっと微笑んだ。そして甘えついでにお願いをする。

「これから何もなければ、一人になってもいい？」

その発言に一同軽く動きが止まる。今朝の騒ぎがまだ記憶に新しいのだ。イリスの微笑みは苦笑に変わる。

「もう、大丈夫だよ。ただ、ちょっと疲れちゃって。それに今の感覚をすっかり自分のものになりたいから」

イリスの言葉に顔を和らげたシリアは頷いた。

「本当はカロンに呼ばれていたのだけれど、それはこちらでなんとかしましょう。でも、明日は場所を借りたお礼を兼ねてカロンに会って貰うわよ」

「解った」

シリアの了解を得たイリスは、皆におやすみを告げるとまだ舞の化粧も衣装もつけたままな事も忘れ、一気に自分の部屋へ駆け込んだ。

鍵を掛け、息を弾ませながらベッドに腰掛ける。幾度か深呼吸すると昂奮は治まってきたが、もう一度あの感覚を思い出すと、今度は体が震えてきた。

（全てが自分と同じであり、自分が全てと同じだった、とでも言え
ばいいのかな）

押しつぶされそうな恐怖感に限りない感動が入り混じった、そんな心持だ。空恐ろしささえ感じる人力の及ばない宙へ、二つも三つも上の階層へ舞い上がった奇跡を先程体験したのだ。

（そして、掴んだ）

一度見た光景は忘れない。イリスは黄金の羽を手に入れた気がした。

（自分と同じ名前の女神も黄金の羽で虹を駆け、人々の願いを天界に届けるんだよな）

男の自分に女神の名前はおかしい、と子供の頃からかわれ嫌な思いもしたが、はじめて自分の名前も悪くないと思った。

(多分、今日の舞ならきつと認めてくれるだろうな)

彼は自分の欠点を早くから指摘してくれていた。だが結果的に理解するのに、こんなに時間がかかってしまった。

(シリアに誉められるのはもちろん嬉しいけれど、やっぱりラシルに言われたい)

イリスはそのまま後ろに倒れ、ベッドに仰向けに横たわる。さすが街長カロンの屋敷だけあり、天井の漆喰に綺麗な曲線で描かれた蔦がバランスよく配置されていたが、イリスの眼には全く映っていなかった。

「会いたいな……」

心の声を口にした。ラシルはイリスの心を読んでいるかのように気持ちを感じてくれる。だから今も絶対会いに来てくれると確信があった。

(ほらね)

軽くドアを叩き、名を呼ぶ声に、イリスは自然と笑みが浮かぶ。心の繋がりというのは確かに存在するのだ。

イリスは逸る心押し留め、ドアへ向かう。夕べは鍵を掛けなかったことを後悔したが、今日は鍵を外す行為さえもどかしい。

部屋に招き入れたものの、さすがに待っていたとは恥ずかしくて言えない。替わりに愛しさを込めて微笑んだ。ラシルも艶やかな金髪を揺らし微笑み返す。

「今日はとても感動した。上手くは言えないが、心の内側から揺さぶられた気がした。すごいな、イリスは」

「初めて誉めてくれたよね」

「そうかな」

「そうだよ、でも……」

「でも？」

短い間を経て、イリスは長い睫を伏せる。

「嬉しい、かもしれない」

言い切れない辺り、自分らしいとイリスは思う。しかし、前に比べたら自分の気持ちを素直に表現できるようになっていた。

「イリスに、これを」

差し出された一厘の花。それは純白で微かに甘い白粉のような香りを放っている。

「カンフの花？」

「良く知っているな。ここの風習で思いを伝えたい人に渡すそうだ。」

それで…俺はイリスに貰って欲しい」

軽く声が枯れたのがイリスには返って魅力的に感じた。自分への告白に緊張していると思うと、大柄のラシルも可愛らしく見えてくる。もちろん今のイリスに断る理由は見つからなかった。とにかくこの気持ちを大切にしたい。

「ありがとう。なんか少し順序が逆の部分もあるみたいだけれど」

悪戯っぽく笑いながら花を受け取るイリスに、ラシルは軽く肩を竦めた。

昨晩は全く余裕がなかったが、今日は気の済むまでラシルの流れるように輝く金の髪を楽しみたいとイリスは思った。それを察したのか、ラシルはイリスを優しく抱きしめ、耳元で囁いた。

「でも、まず着替えないとな。衣装が皺になったら、またシリアに怒られるのだろう」

まだ舞姫姿だったことにイリスは初めて気づいた。だが、イリスはラシルを見上げて腕を絡めると、妖艶とも取れる笑みを浮かべ、ラシルの髪を隠してしまう布を取り去った。

「怒られてもいいから…、ね」

第11話

三日目、夏祭りの最終日。

昨夜の噂が噂を呼び、開演のかなり前から長蛇の列が出来始めた。

「これは一回では捌ききれないわ。カロンに許可を貰って回数を増やしたいと思うのだけれど、イリスは大丈夫？」

シリアの部屋に呼ばれたイリスは軽く頷き同意をみせる。

「いいよ、そんなに何回もは集中力が続かないから無理だけど、二、三回位なら」

昨夜の気だるさが細かい霧のようにしっとり纏わりついているが、もう一度あの感覚に陥るのが楽しみなのも事実だ。

イリスの機嫌のよさを見て取ったナナが跳ねるように駆け寄ってきた。

「イリス、元気になってよかったね」

満面の笑みで見上げるナナは本当に嬉しそうだ。

(今までナナにも心配かけてたんだな)

子供だからといって雰囲気を読めないわけではない。むしろナナは聴く敏感だ。

「ごめんね、心配かけて」

心からイリスは謝った。

「これでナナの神託通り上手くいくでしょう」

東より来たりし金色の獅子に身をゆだねよ、されば願い叶わん

ナナの可愛らしい口から枯れ萎れた声で告げられた神託。さすがは神官長の直系の血筋だけあり、その時は神々しい威厳に満ち溢れていた。

(でも、今思うと、文字通りだな)

神託を思い返し、昨晚の記憶に軽く頬を赤らめたイリスだったが、同時に暗い心持にも襲われる。

(分っているけど、首都に着いたら、もうラシルと別れなくちゃならないんだよね)

繋がりあった想い。それは眼に見えないが、香りと同じく確実に存在し、イリスの世界を煌く光に変えた。

(でも、不思議と後悔はしていない)

あれだけ世の中に未練を残すようなことは嫌がっていたのに、今は返って前の状態に戻りたくない、とさえ思っている。

「…イリス、やっぱりまだ元気ないかな」

心配そうにシリアに眼をやるナナにまた気を使わせてしまったよ
うだ。

「大丈夫だよ。ありがとう」

イリスはナナを安心させるように出来る限りの最高の笑顔で明るく微笑んだ。

そのままイリスは約束通りシリアと共にカロンを訪れた。

カロンは昨晚のイリスを手放しで誉め、上演の回数を増やすことを快諾し、さらにシリアを喜ばせる提案さえした。

「首都にいる知り合いの貴族が上手い舞手を捜しているから、紹介状を書いてあげよう」

「ありがとうございます！」

シリアはすかさず、イリスから見れば大げさなのだが、輝くような笑顔と態度で感謝の言葉を羅列した。だが、シリアの喜びも当然だろう。これでまた神おろしの試演に参加できる道が一步近づいた

のだから。

「イリス、カロン様の好意にしっかりと応えてがんばりましょうね」

「私の為にまた場所を作っておいてくれ、楽しみにしているぞ」

「分かりました。もちろん一番見やすい特等席をご用意いたします。そして今日の舞は私どもの守護神カロン様に捧げますわ」

カロンに見えないようにシリアはイリスに一つウイंकを送った。それは彼女自身でも調子がいいと思っている印だった。

全ての上演を終え、イリスは楽屋裏の椅子に座り込んだ。さすがに三回も公演をこなすと思いい切り走りこんだ後のように体が重い。

(でもこんなに充実した気分で踊れるのはとても幸せかもしれない)

自分でもこんなに舞う事が好きだったとは知らなかった。

イリスは気だるげに頭に被っていた花冠を外す。百合の中に一輪だけ混ぜたカンフの花。もちろん昨晩ラシルから貰ったそれだ。

「誰からもらった？」

「！」

メノウとアクアが後ろに立っていたのに全く気づいていなかった
イリスは、飛び上がらんばかりに驚いて振り向いた。

「別に」

言葉とは裏腹に、イリスは持っていたカンフの花を背の後ろに隠
してしまった。

「なんだ、やっぱりミルテが言っていた通りだって訳ね」

分り顔でメノウはイリスの肩を叩く。

「良かったね」

アクアはにっこり微笑んだ。その二人の様子にくぐつとイリスは身
構える。

「何が？」

「急に舞が上手くなった理由だよ。それにラシルの機嫌がすごくい
いことね」

イリスは体温が上がるのを感じずにはいられなかった。とりあえ
ず何か言わなくてはと口を開いたが言葉にならず、ただ出来たのは
頬を染めるだけだった。メノウはイリスをからかえたことに満足顔
で、イリスは彼の思い通りの反応をしてしまったことを後悔した。

「もう、何でもいいよ」

事実なのだから隠しても仕方がないと、イリスは投げやりに言っ

た。

「友達として喜んでるんだから素直に受け取れよ。でもさあ、前でもすごいと思っていたのに、今のイリスの舞は怖いもの無しになったよね。これなら絶対カラムスにも勝てるぜ」

メノウは確信したように握りこぶしを作った。彼はまだ、神おろしの最有力候補とされているカラムスとの勝負にこだわっているようだ。イリスにとって、今では勝ち負けなどどうでもいい気さえしていた。だが、神殿で舞うための首都までの警護として彼らと知り合った手前、そう思われても仕方はないだろう。純粹に舞を楽しむことを分って貰えるのはやはり一人しかいない。それが一番好きな人であるのは幸せなことだ。

（つて、かなりやられちゃってるね、僕）

イリスは自分ののろけに自分で照れた。

イリスとラシルの付き合いは暗黙の了解で認められた。シリアもスランプから抜け出せたのはラシルのおかげだと思い、何も言わない。チファとコリーは勝手に妄想に走っては楽しみ、ユリアはそんな二人をやんわりと嗜める。メノウは次の標的を弟のアクアに変え、アクアにとっては迷惑な日々が始まったようだ。ジンは相変わらずシリア一筋で、ミルテは得意の『意味ありげ』な微笑をラシルに向け、モスは寡黙ながら優しく皆を見守っている。

ただ一人納得していないのが、ナナだった。

カシスの街を出てからというものの、ナナはぴったりとイリスの側を離れない。食べる時も寝る時も一緒に、双子にからかわれても前であれば逃げ帰ったのに、今ではじつと耐えている。

「小さいながらちゃんと判っていますね」

ミルテはラシルに馬を寄せた。ナナのおかげでカシスの町を出てからというものの、イリスと二人きりになる機会は全くない。だが、ラシルとしてもナナの気持ち判らないではないので、無理に引き裂くことも憚られるのが現状だ。イリスも苦笑をラシルに送るものの、ナナを決して無碍には扱わない。後ろを振り向けばナナとイリス、シリア、ジンが馬車上で楽しげに笑い声をたてている。やはり今もナナはイリスの隣にぴったりと身を寄せていた。

「五十ダラスでナナをイリスから引き離してあげてもいいよ」

ラシルは昨晚、双子にこう持ちかけられた。もちろん断ったが、五十ダラスという高くもなければ安くもない値段をふっかける双子の金銭感覚に感心した。

「シリアはネリの村へ行きたいといった。あそこは首都とは方向的に反対だし、どちらかと言えば鄙びた何もない村だ。直接首都を指すと思っていたのだが、どう思う？」

話題転換もかねてラシルはミルテに尋ねてみた。ミルテは親指を顎下にあてる。彼の考える時の癖だ。

「カロンから紹介状を貰ったので、普通は直ぐに首都に向かうのが

筋ですよ。しかし、いつ会うと言う具体的な約束はないわけですから、もう少し周りの町を渡り、しっかりと脇を固めようと思った、あたりですかね」

「それなら、ネリの村は最悪な選択だな。あそこは人より家畜の数の方が多い」

ラシルの答えにミルテは軽く肩を竦めた。

「それでは、イリスの舞が人だけでなく動物にも通じるかやってみたくなつたのではないですか？ どちらにしても我々は彼らの行きたい所へ安全に連れて行くだけです。それに……」

ミルテは言葉を切り、にやりと笑ってみせる。

「早く首都に着かない方が、あなたにとってもイリスにとってもいいじゃないですか」

ミルテの言葉はラシルの本音でもある。契約上首都までの警護なので、着いてしまえば別々の道を進まざるを得ない。

(イリスはどう思っているのだろうか)

いずれは話し合わなければならぬ重要な事柄だ。彼の性格上、遊びで付き合う事は出来ないだろう。そして自分はイリスを他の誰にも手渡すつもりはない。

ラシルは軽くため息を付くと馬先を後ろへ向けた。建前はシリアに今日の野宿場所を告げるためだが、一緒にいるイリスの顔を見たいというのが真の目的だ。

ラシルが近づいてくるのを見たナナはすっかりイリスの腕を掴み、それでイリスもラシルが来たことに気づいたようだ。イリスはナナの機嫌を損ねない程度にラシルへと微笑みかけた。

手を伸ばして触れたい気持ちを押し殺し、ラシルは用件をシリアに告げる。

「分ったわ。場所はそちらで決めてくださって結構よ」

続いてナナがシリアの口調の真似をした。

「分ったわ。こちらはジンがちゃんんと守ってくれるから、元の位置に戻って結構よ。ジンはラシルより大きいから私とイリスぐらい一人で守れるわよ。そうよね、ジン？」

急に振られたジンは曖昧に笑っただけだった。小さな恋敵は一瞬たりともラシルをイリスに近づけたくないらしい。

「可愛そうに、ねえ」

様子を少し遠巻き加減に見ていたミルテは、彼には珍しく同情をこめて呟いた。

（双子に五十ダラス払うか…）

ナナの頑なな様子に、ラシルは本気で考え始めた。

第12話

ネリ村に入ってもシリアは舞台を作る気配は見せなかった。

「実は友人に会いに来たの」

ラシル達と、イリスをはじめ不思議顔で落ち着かない団員にシリアはそう告げた。

「いつかの町での大捕り物にならないように今回は先に出かけるって言っておくわね。イリスには一緒に来て貰うけれど、他の人はゆっくり休んで貰っていいわ。ジンには悪いけれど、ナナの警護をよろしくね」

ジンはシリアに頼りにされたことが嬉しいらしく、満面の笑みで頷く。

「今回は堅苦しいことは抜きにして友達に会いたいから、イリスの警護はいいわ。ラシルも羽を伸ばして結構よ」

ナナは置いていかれる事に不満顔だったが、ラシルがイリスと行動を共にしないことが分つた分だけ顔から険しさが取れた。

告げるシリアは微笑んではいたが、瞳の奥は笑っていなかった。イリスは軽い緊張を覚える。

「どうせなら、もう少し街がよかったなあ」

双子は文句を言いながらも村の散策に出かけた。

シリアに言われた手前、仕方なく引き下がるしかないラシルの横をユリア、チファ、コリーが先程のイリスと同じ、緊張した面持ちで走り抜ける。

「私達も連れて行ってください」

「駄目よ。あなた達はナナの面倒をみていて」

シリアはナナを呼び寄せると三人に引き渡そうとした。だが、コリーは首を振った。

「せめて一人だけでも連れて行ってください。いままで黙っていたけれど、私達にも知る権利はあると思います」

暫く駄目と言い続けたシリアだったが、食い下がる三人と真剣な瞳に押され、一人だけ連れて行くことを承諾させられた。

イリス、そして三人中一番年上で落ち着いた性格を持つユリアがシリアの後ろについて歩き出す。

「何でしょうね？」

ミルテが少し面白そうにシリア達の様子を眺めた。

「前もそうだったが、ただの友人に会いに行くには深刻そうだな」

ラシルは表情を変えずに言ったつもりだったが、無意識のうちに組んだ右手の人差し指を小刻みに動かしていた。その様子に気づいたミルテは、今度はラシルを面白げに見た。

「本当は付いて行きたいって顔に書いてありますけど、付いてくる
なと先に釘さされちゃいましたものねえ。ラシルの容貌はかなりめ
だちますから尾行するにも不向きですし」

仕事柄、依頼人の意思に反することはしない方がいいと分つてい
るのだが、今回は何故か気になって仕方がない。だが、ミルテの言
うとおり自分が動いては目立ってしまう。考えあぐねているとラシ
ルの隣にそつと立っていたモスがラシルの腕を軽く叩いた。

「…申し訳ないが頼めるだろうか？」

モスは分つたとばかりに頷いて、何気なくひょうひょうと歩き出
した。情報収集にかけて彼の右に出るものはいないので安心して任
せられる。

「さて、何が出てくるやら…」

平穏な旅に少し飽き始めたミルテは楽しげに呟いた。

日差しはまだ強いが、道端で草を食む牛や今が盛りと咲く真っ赤
な花を見るにつけ、風景そのものはのどかである。だが、三人はあ
まり景色を楽しむ余裕は持ち合わせていなかった。

村の外れに近い小屋の前に立ったシリアは軽くドアをノックする。
少しだけドアが開けられ、名を尋ねられた。

「シリアよ。今日はイリスとユリアを連れてきたわ」

シリアがそう告げると、奥で慌しい音が聞こえ、若い男が転がり出るように外へ飛び出して来た。

「ユリア？」

「バジ兄さん！」

思わぬ出会いだったらしく、二人は名前を呼び合った後、なかなか動けずにいた。

「お兄さんなの？」

シリアの問いにやっと我に返ったユリアは、バジと呼ばれた青年に抱きついた。

「そう、兄です。よかった、生きていたのね」

今ではユリアの顔は涙でぐしゃぐしゃになっていた。バジもユリアと兄妹だけあって細く優面の所が似ており、特に似ている真っ黒な瞳から伝う涙を隠そうとはしなかった。

コヨルテラグドの生き残りが集う小さな町での会合は、同じ国の出身といえども初対面の場合が多く、一種の緊張をお互いに抱かざるを得なかったが、この二人の再会のおかげで張り詰めていたその場の十人すべての心はあたたかい雰囲気にも包まれた。神官長の一人娘であるナナが生きている事を告げるとさらに活気づく。だが、暫く続いた和やかな空気もシリアの言葉で脆くも崩れ去った。

「本気か？ 正気とは思えない」

ジュネルと名乗った元議員の背の低く黒髪のままらな男は、必要以上の大きな動作で天を仰いだ。一方のシリアもピンと背筋を伸ばし威厳を保つ。

「ええ、本気よ。あのスカトルの神殿にベチベル神をおろします」

「もう一度聞くが、そんな突拍子もないことを本気でやるつもりだったのか？」

だまって聴いていたイリスだが、ジュネルが、いや、他の人々も彼と同じように思うのは当然だと思った。普通の常識ある人ならば自然の成り行きだ。

シリアはキツとジュネルを見据える。

「私達は各地を周り、コヨルテの生き残りを探しては会ってきたわ。何か事を起すのであれば参加したいと言ってくれた人もいたし、もう面倒ごとに巻き込まれたくないという人もいた。先の暴動をスカトル軍に叩かれて以来、今の時点であなたたちの集めてくれた人を合わせても六十人程。こんな少人数でただ決起したとしても前回同様直ぐ鎮圧されるわ。相手はコヨルテを無慈悲に殲滅させたサンデラ・クロブよ。今度こそ本当に全滅だわ。そして忘れ去られる」

昂奮してきたシリアは、冷静になるために少しの間を置いた。

「私もコヨルテの民として命を差し出すことは恐れていません。ただ恐ろしいのは勇敢で心優しいコヨルテ＝ラグドの人間がこの世に

いたことが忘れられてしまうこと。復讐にしても鮮烈に敵の心に残るようになりたい」

きゅつと鮮やかに赤いシリアの唇が結ばれると、部屋は静寂に包まれた。シリアの気迫に飲み込まれてしまったようだ。

「いや、でも、選ばれる自信はあるのか？」

ユリアの隣に座って黙って聞いていたバジは聞きにくそうに尋ねた。周りの人も同じ疑問を持っていたのであるう、お互いに頷きあう。ユリアはそつとバジの手に自分の手を重ねた。

「それは大丈夫だと思う」

優しくやんわりと答え、イリスを見た。

「彼は天性の踊りの才能を持っている。きっと、いえ、必ず選ばれるわ。それにナナ様の神託にも上手くいくって出たの」

真綿の様にふんわりとした声のユリアは、シリアが持つ気迫こそないが、ナナの神託の話は人々の心を掴んだらしい。一気に部屋の音がざわめき始めた。その中でイリスは自然と立ち上がっていた。人々は口をつぐみ、瞳はイリス一点に注がれる。

「明日、僕の舞を見てください。それから決めても遅くないでしょう。ただ、もし舞を認めてくださったら決して神おろしの日まで何も行動は起さないと約束してください。これ以上大切な人が亡くなったり悲しんだりするのは見たくないんです。生きていたらユリアのように家族に会えるかもしれない。皆さんにもいるでしょう？ 会いたい人や大切な人が。悪戯に命を落とすことは無意味です。僕

は皆さんの期待に答えます。だから……」

説得だけをしたかったのに、イリスの瞳から勝手に一粒の涙がこぼれ出し、自分が感情的になっていていることに初めて気づいた。シリアは立ち上がるとイリスを抱きしめてくれた。皆の前で恥ずかしかったが、嬉しくもあった。

再び室内は静寂に包まれる。途端に夕暮れと共に出始めた風が木々の葉の間を遊ぶように吹き抜ける外の音まで聞こえるようになってた。

「分った。明日君の舞を見せて貰おう。全てはそれからだ。今日は兄妹の再会と我々の出会いを祝い合おうじゃないか」

ジュネルはぶどう酒の入ったグラスを皆に配るように指示する。他の人も緊張を解き、次々にグラスを手にとって宴を始めた。

途中、酒の香りに当てられたイリスは一人外へ出た。近くの適当な石を見つけて座り、今では空いっぱい広がった星空を見上げた。

(ラシルと一緒に見た星空、綺麗だったな)

あの頃は自分の舞も気持ちも素直になれなかった頃だった。それは最近のような気もするし、ずっと前のような気もする。

背後からドアの開く音がし、振り向くとユリアがこちらに向かって歩いてきた。

「イリス、隣いいかしら？」

一つ頷き、イリスは場を空けた。ラシルと出会う前でも、いつも彼女はチファヤやコリーと一緒におり、イリスはナナと共に行動していたので、こうして二人になるのは初めてかもしれない。

「こうしてイリスと二人で話すのは初めてになるのかしらね。一緒に旅をするようになってから大分経つのに、不思議ね」

イリスの心を読んだようにユリアは笑った。

ユリアはシリアの次に年長だ。亜麻色の緩やかなカールが細面だが整った顔にかかり、最近の色っぽささえ感じるまでになっている。

「お兄さん、見つかってよかったね」

今回ここに来て一番良かったことはユリアとお兄さんが出会えたことだ。ユリアは微笑んだが、それは力のないものだった。

「でもね、チファヤやコリーの家族について聞いてみたのだけれど消息がつかめなかったの。一人だけ肉親が見つかって、なんだか申し訳ないわ」

イリスは驚いて目を見開いた。

「そんなことないよ！ 皆喜ぶに決まってるじゃん。僕もすごく嬉しかったよ。だから素直に喜んでいいんだよ」

真剣なイリスを見たユリアは、今度は心から微笑んだ。

「ありがとう。イリスは優しい子ね。だからかな、私、あなたが一番心配なの」

「…僕が？」

戸惑いをみせるイリスの手をユリアはぎゅっと握った。

「あなたがさつき皆に言った言葉、本心から出たものよね。あれが言えたのはあなたにも大切な人がいるからでしょう？」

ユリアの言葉にさらに戸惑ったイリスは何も言えず、顔を伏せる事しかできなかった。

「私、シリアの手前黙っていたけれど、本音を言えばどんな復讐もやめて欲しいの。本当に亡くなった人は私達の復讐を望んでいるのかしら。もし兄が、そうね、スカトルの兵を五千人切り伏せて死んだって聞いてもちつとも嬉しくなんかない。生きて会えたからすごく嬉しかったのよ。そんなに生き延びることって悪いことなのかしら！」

珍しく声を荒げるユリアはおつとりとした普段からは想像出来ないものだ。だが、彼女の言うこともイリスには理解できる。それは彼の心にも浮かんでいた気持ちだったから。

憎しみを自ら求め生きるシリアと憎しみを忘れて生きたいユリア。

考え方がまったく正反対の二人がこの場に来てしまったようだ。イリスは今では綺麗な瞳から涙を流すユリアの手を優しく握り返した。黙っていたことをユリアには話してもいい気がしたのだ。

「大丈夫、僕がちゃんと成功させるから。ユリアも最近の僕の舞を見てくれていれば大丈夫だって思うだろ？ それに、これはユリア

の心の中だけに留めておいて欲しいんだけど、神殿の件はシリアと僕だけでやった事にするって二人で決めているんだ。だから他のコヨルテの人たちには関係ないことになるから安心して。勿論もう少しユリア達の協力は必要だし、上手くいった後もコヨルテの人たちへの風当たりは変わらないかもしれない。ただ、このことで溜飲を下げて、どこか首都の遠くでも、鄙びた所でもいい、幸せに暮らしてくれたらいいんだ」

ユリアは呆気にとられたように口をあけたが、とんでもないと言うように首を振った。

「でも、それではイリスとシリアは幸せじゃないじゃない。嫌よ、私。シリアにもイリスにも幸せになってほしいの」

イリスは心の赴くまま、ユリアの頬に口付けた。少しだけ塩辛い味がしたが、心はさらに温まった。

「ありがとう、ユリア。その気持ちだけで十分だから。今の話は誰にもいわないで」

さて、とイリスは立ち上がると背伸びをした。小屋からはまだ彼らの祖国の思い出話が尽きないのだろう、楽しげな笑い声とざわめきが風に乗って微かに聞こえてくる。

「いつまでもここにいとシリアが心配するから、戻ろ？」

イリスはユリアにそう言い、ゆったりとドアへ向かう。ユリアは納得いかない顔をしながらも黙ってイリスの後をついていった。

第13話

珍しい旅芸人の来村に、小さなネリの村は湧きかえっていた。開演が夕方からということもあり、近くの村からも観客が詰めかけ、春祭りと秋の収穫祭とが一度に来たような賑わいとなっている。

「こんなに人がいたのね」

「本当、ミルテが家畜の方が多くなって話すからどんな所かと思っただけれど、まあ、普通よね。ある意味がっかりだわ」

チファとコリーが笑いあいながら幕の袖から客席を覗いた。あまり舞台を見慣れていない観客の雰囲気から、二人は気が緩みがちなようだ。

「いつも以上にがんばりましょう」

見かねたユリアが二人にそういった。昨日の事は話せる範囲で一応二人にも伝えたが、実際見たのと聞き伝えでは、やはり心の持ち様が違ってしまうのかもしれない。ユリアとしては復讐など成功しない方が良いのだが、イリスの並々ならぬ決意を打ち明けられた以上、自分達にできることはやらなければならぬとも思っていた。普段ならシリアが言うべき台詞をいつもとは違う厳しい顔をしてユリアが言ったことに、チファとコリーは少なからず驚いた様子だ。

イリスはいつも以上に緊張すると思いきや、意外にも風のように穏やかな心持で鏡に向かっていた。

(昨日言葉にしたことで、覚悟が決まったのかもしれない)

イリスがこのように舞の才能を与えられたのは、きっとコヨルテの生き残りを生かすためだ。大勢を救えるのであれば少数の犠牲は仕方のないことだろう。その少数の役割を担うのが他ならぬ自分の定めなのだ。

「イリス、もうすぐ出番よ」

シリアの声にイリスはもう一度鏡を見つめた。

(うん、気負いもないし、緊張もない)

ついでに頭に戴く百合の冠や衣装にズレがないか確認してからシリアの側へ寄った。

「ちゃんと来てる？」

「観客に紛れてジュネルたちが座っているのをさつき確認したわ」

「よかった」

カシスの町を出て以来、シリアは全くイリスの舞に関して心配はしていなかった。だが、にっこりと微笑むイリスを見て、シリアは心中複雑な顔をした。

「ごめんね。愛しているわ、イリス」

シリアは驚いたイリスの肩をそっと押して舞台へと送り出した。

イリスが舞い終わっても暫くは静寂に包まれていた。

ジュネルやバジ達も口をあけて、傍から見れば呆けているように見える。我に返った観客の一人が拍手をはじめると、皆立ち上がった。天地がひっくり返るような拍手と歓声をあげた。近くの森にいた渡り鳥が驚いて、一斉にけたたましい羽音と共に飛び立った。

「カシスで見た時よりもさらに良かった」

「この村の人はかわいそうだよ。イリスの舞を見たばかりに、ただでさえ回ってくる旅芸人が少ないのに、それらが全てつまらなく見えちゃうんだから」

舞が終わった直後に客席から走りこんできた双子は、控えの部屋でイリスを囲み、それぞれ代わる代わる最大級の賛辞をくれた。

「本当よ」

二人が全てを言ってしまったので、イリスの元にやってきたナナはその一言しか言うことができなかった。

「アクア、メノウ。悪いけれど少し席を外してくれるかしら」

シリアの後ろにはジュネルが立っている。

「じゃあ、また後で」

イリスもやんわりと双子が部屋から出るように促した。

反対できる雰囲気でないことを肌で悟った双子は、何も言わず部屋をでていく。

すっかりドアが閉められるのを確認してから、ジュネルはナナに向かって一礼し、イリスの手を取った。

「君なら出来るかもしれない。いや絶対成功するだろう。いまやシリアの提案も突拍子のないものではないと確信できたよ」

「では、約束どおり…」

皆まで言うなとばかり、ジュネルは手でイリスの言葉を制した。

「分っている。神おろしの日までは表立った行動はすまい。しかし何か困ったことが出来たら遠慮なくいつてくれよ」

「はい、その時はお願いします」

多分その時はこないと思いつながらも、イリスは笑顔で返事をした。

舞台の片づけを全て終え、ナナとジンと双子と共に宿に帰ったイリスは、入り口でシリアに呼び止められた。

「ジン、ナナを私の部屋へ連れて行って、私が戻る間相手をして下

「さらないかしら」

「分りました」

ジンは素直にシリアの言うことを聞き、ナナの手を引こうとしたが、ナナはその場を動きたがらなかった。

「ナナもイリスと一緒にいたら駄目？」

「今日はイリスに頼みたいことがあるから。たまには私も一緒に寝ましようよ。最近さみしいわ。ナナは私が嫌いになったの？」

「…そんなことは無いわ」

シリアの絶妙な演技にナナは陥落し、大人しくジンと共にシリアの部屋へ向かった。

「頼みって何？」

真面目に聞くイリスの表情に、シリアは思わず笑ってしまう。

「？」

シリアが笑い続ける意味が分らず、イリスは双子と顔を見合わせる。シリアは目じりに溜まった涙を袖でふき取った。

「違うわ。最近ナナがあなたにべったりだったから、たまには子守から解放してあげようと思ったのよ。今日のご褒美としてね」

途端に、メノウは思いついたように軽く声をあげ、アクアに耳打

ちした。

「先に部屋へ戻っていて。俺たちからも渡したいものがあるんだ」

にっこり笑うアクアに、イリスは曖昧に頷いた。今まで双子には足が三本あるトカゲとか、虫を食べる植物など、珍しくて双子には宝物かもしれないが、『いいもの』を貰った記憶が殆どない。イリスにとっては手に負えないものばかりだった。

脱兎のごとく走り去る双子の背中を、イリスは不安げに見送った。

「いい友達ね」

シリアの言葉にも、心からは頷けなかった。

部屋に戻り、ベッドに腰をかけて、足をぶらぶらさせながら双子を暫く待っていると、ようやくドアをたたく音がした。

（今度は何を持ってきてくれたのかな）

いつもは騒がしく入ってくるくせに、驚かせたい時はいたって静かな二人なのだ。双子は偶に想像外な行動を起すので楽しい半面、油断すると酷い目にあいかねない。イリスは心の準備をしてからドアに手をかけた。

目の前にはアクアでもメノウでもなく、ましてや虫や爬虫類でもない、この世でイリスが一番綺麗に思う髪と瞳を持つ人物が立って

いた。

「ラシル」

「何か用があると聞いたが…？」

そう言いつつも、ラシルは大体の状況を察したようだ。

「やられたな」

「そのようだね」

双子にしては気のきいたプレゼントだと思う。ただ、二人だけで対面するのは久しぶりなので気恥ずかしい。照れ笑いを浮かべるイリスにラシルはそっと近づき、イリスを抱きしめようとした。

「ちょっと待って」

「何故だ？」

お預けを食らわされたラシルは少し不満声で聞いた。それをイリスはかわいく思いつつも、廊下の隅を指差した。

「アクアとメノウ…」

二人は物陰からこちらの様子をつかっていたのだが、イリスとラシルに見つかりと笑いながらも一目散に走り去った。

「礼がわりにじっくり見せ付けてやっても良かったのだが」

不敵に笑うラシルを今度はイリスから抱きしめた。彼こそ神が自分に与えてくれたご褒美だ。イリスが役目を果たし、この世からいなくなつた時は自分のことを忘れてくれても構わない。でも、一緒にいる時だけはラシルに自分だけを見ていて欲しい。

「イリス」

暖かいイリスの体温に、ラシルはもう双子のことは忘れたようだ。待ちわびた自分を呼ぶ声にイリスは瞳を閉じる。ラシルはさらさらしたイリスの濃いブラウンの髪に手を絡めると、躰をかがめ、ゆっくりと顔を近づけていった。

第14話

「あと半月もしたら首都ですわね」

宿屋一階にある酒場の片隅で一人飲んでいたラシルの隣にミルテが腰を下ろした。ミルテは酒が飲めないので注文を取りに来た亭主を結果すぐさま追い返すこととなり、亭主は不満げにぶつぶつと文句を言っただけで去っていった。今日は外で飲もうと思った人がいないらしく、ラシルとミルテ以外に二、三人まばらに客がいるだけなので、亭主が思うほど売り上げが伸びていないのだろう。

「今度は真つ直ぐ首都へ向かうと言っていたから、そうなるな」

ラシルは物思いが先行し、酒場に来たものの、グラスに注がれた酒に余り手を付けられないでいた。グラスの周りには水滴が浮かび、滴り落ちては木のテーブルの色を変えていく。今日は自分もこの店の亭主を喜ばせるような客にはなれないらしい。

硬い木の椅子の背にもたれてミルテを見たが、彼はただ仏頂面で見つめられ、口も開かない。

不満は率先して言う彼にしては珍しい。

「今日ははっきり言わないな？」

ミルテは自分の服に付いている紐を弄んでいた手を止めた。

「ずっと話してくれるのを待っていたんですけどね。モスはラシルが話さないのであれば話せないの一点張りですわ。最近のあなた

は上の空ですしね」

「ああ…」

ネリの村で、モスにシリア達の尾行を頼み、彼は誰にも気づかれず見事にやってのけた。彼の口から出る内容は前々から心にあつた疑惑でもあつたので驚くに足るほどの事ではなかったが、実際事実になるとやはり衝撃は受けるものだ。

(特にイリスの告白は辛かった)

彼は自ら犠牲になることが運命だと信じている。今の彼なら神殿の神おろしの舞手に選ばれるのは確実だ。そして異教の神を降ろす舞をして、その場ですぐに殺されることはないにしても、生きて首都のインセンを出ることは叶わないだろう。

「見過ごせない」

心の声が口から漏れてしまった。だが、言葉にしてみると自分の望みも分ってきた。モスに話を聞いてからずっと、彼らを止められないか考えてきた。本音をいえばコヨルテの反乱を止めたいのではなく、イリスが目の前からいなくなるのを止めたいだけなのだ。私的な願いに仲間を巻き込むことは出来ない。一人で何とかできないかここ最近考えていたので、ミルテに上の空と思われても仕方がないだろう。だが、結論はどうしても協力者が必要で、それは自分の仲間以外に考えられない。それに今、ちょうど相談に足る人物が一人隣にいるのだ。

ミルテは先程のラシルの呟きに真意を測りかねている顔をしている。ラシルは腹をくくると、真面目な顔で切り出した。

「協力してほしいことがある」

「いいですよ」

間も置かずあっさりと答えるミルテに、ラシルは驚くより笑ってしまった。

「まだ何を頼むか言っていないぞ」

「あなたは大抵のことはできますから、人に物を頼む時はどういう時かくらい察しがつきますよ」

ラシルはまじまじとミルテを見た。

「何ですか？」

ミルテは仏頂面をわずかに崩し、ラシルはにっと笑った。

「誉めてくれているわけだな」

軽く目をそらしたミルテは、おもむろにテーブルの上のグラスを掴むと一口だけ飲み込んだ。

「酔っているのです。そう思って聞き流してください。それで何を協力して欲しいのですか？ 先を進めてください」

いつもの事ながら、いい人に見られるのがどうしても嫌らしい。ラシルは椅子に深く腰掛けなおした。

「わかった。酔っていても、これからの話はちゃんと聞いてくれよ」

「変わっているとは思っていましたが、コヨルテ、ですか…」

ラシルがモスからの報告を手短にまとめて話し終わった後、ミルテは軽く上を向いた。今回の戦争で負けた国の中でも一番スカトル国に恨みを持っているだろう扱いの難しい国だけに、ミルテが重いため息と共に呟くのも無理はない。

「確かに南部の訛りが皆少し混ざっていましたね。だからといってすぐコヨルテには結び付けられませんけれど。ああ、イリスはコヨルテ馬のリスに非常に興味をもっていましたよね。でも、それも馬が好きなら貴重なコヨルテ馬に興味を持ってもおかしくはないですね…」

ミルテは今までのイリス達の行動を思い出し、もっと早く彼らがコヨルテの民であったことを見抜けたのではないかと検証を始めた。

「普通、コヨルテの民が敵国の神殿で舞いたいと言うほうが不自然なんです。むしろ気づかなくて当然です」

彼の結論は達したようだ。そして悔しげな色を含んで呟いた。

「初めにイリスが男と知った時より出し抜かれた気分です」

「でも、そうであるという納得がいくこともある」

ラシルに同意するようにミルテは頷いた。

「スカトルの兵に皆おびえていましたね」

ミルテの言うとおり、首都に近づくと、目に見えてスカトルの軍服を着た兵士に出会う回数が増える。その姿を見つめるなり、特にナナが怯え、イリスの腰にしがみつく。しがみつかれたイリスもナナの肩をだいて落ち着かせようとするのだが、彼の顔もまた強張っていた。

「躍りになって練習していたこともそうだったんですね」

「神降ろしの舞手に選ばれなくては意味がないからな」

「今思えば異常なくらいの執着でした」

一呼吸おき、ミルテは彼独特の笑みを閃かせた。

「あとは、ここ最近シリアは積極的にあなたがイリスと会えるよう取り計らっていましたね。彼女なりの罪滅ぼしでしょうか」

「…なるほど」

そこまでは気づかなかった。確かにネリの村以来、シリアが色々な理由をつけてはナナをイリスから引き離してくれていた。

「で、我々は何をすればいいんですか？ 彼らを首都に連れて行かない…訳にはいかないんですね」

「ああ、シリアとイリスの目論みが外れたら、他のコヨルテが蜂起しかねない」

「無駄な血を流させない、ということですね。となると、イリスを舞わせないように先に我々が神殿を跡形もなくらいぶつ壊す、とか？ そうすればスカトルの国を挙げての大事業に水をさす事にもなりますよ」

第一印象は優しい青年に見える彼だが、長年付き合っている者にはとても彼らしい発言と言わざるを得ない。ラシルは苦笑した。

「俺たちがそうしても彼らにとって意味がないだろう。物理的な損害は作り直せば表面上は何もなかった事と同じだし、歴史と人々の記憶に『コヨルテ』を鮮明に残すのが彼らの目的だからな」

「では、あなたは予定通り彼らに舞を舞わせると？」

「ああ。スカトルの国民は特に信心深い。自分達の造った神殿にイソアミル以外の神が降ろされてしまったらたまらないだろうな」

「でしょうね」

憤るスカトル国民の様子は安易に想像できる。

「違う神をおろした張本人にまんまと逃げられでもしたらさらに混乱するでしょうね。異教神でも一度神殿に神をおろしたら壊す事も憚られますし」

「そう。どんなことをしても彼らを逃がす。そのためには儀式の進行方法や神殿の内部の情報を詳しく知る必要がある」

「首都についたら早速はじめましょう。ただ、それはイリスが必ず選ばれるという前提の話ですよ。彼が貴族の目に留まるのは間違いないと思います。そして今回の試演は、それぞれの貴族が各舞手を推薦し、競わせて選ばれると言っ話ではありませんか。しかし…ちゃんと実力で選んでもらえるのでしょうかね」

ミルテは政治の駆け引きで選ばれる危険性を危惧しているのだ。言い分はもつともだが、ラシルは安心させるように笑った。

「その場にはカルート王も立ち会われる。彼は良いものを見抜く目をもっておられるから、その点では俺は心配していない」

「確かに戦争を勝利に導きましたし、前王よりも人気が高いのも事実です。ですが、あなたの話を聞いているとカルート王をまるで知っているかのような口ぶりですね」

ミルテは笑い、ラシルは肩をすくめた。

(子供の頃はよくカルートと一緒に遊んでくれたからな)

さすがにこれはミルテに告げることができない、とラシルは思った。

「不思議ですね」

「何がだ？」

ミルテは両肘をテーブルに置き瞳を閉じた。

「何をどうやるか決まっているわけではないのに失敗する気がしない。むしろ楽しみな気さえします」

「それは頼もしいな」

「それはあなたでしょう」

瞳を閉じたままミルテは続けた。

「心の赴くままにつっぱしっているだけなのに」

「あんな、人を獣みたいに」

「…それが出来る力と、周りにそれを何でもない事だと思わせるふてぶてしいまでの超然とした態度が、不思議と信頼につながっていくんでしょうね」

「本当に今日はどうした？」

ここでやっとミルテは瞳を開けると、怪訝顔のラシルを目端で捉えた。

「イリスに関してだけはその超然とした態度も形無しでしたけれど」

話の落ちはそこか、とラシルは小声で呟いた。

「ラシルは私がイリスを好きだと思っていたでしょう？」

「ん…」

軽くラシルは唸ったが、気づかれていたことにはさして驚かなかった。むしろミルテとは争いたくなかったので、無意識のうちにミルテがイリスに近づかないように予防線を張っていたのかもしれない。

「でも、間違っただけではありませんでしたよ」

「…そうか」

ミルテの言葉はラシルの胸を引っ掻いた。それ以上は何も言えなかった。黙り込むラシルに、ミルテにしては珍しい静かな笑みを浮かべた。

「今の言い方は意地悪かったですね。勘違いしないでください。イリスは好きですが、あなたと同じ意味での好きではありませんよ。ただ、今までは警護の依頼人を単なる金づるとしか見ていなかったのですが、今回はそう簡単に割り切れない、という意味です」

「皆、可愛そうなくらい一生懸命だからな」

「ええ、そして普段の落ち着いた態度を崩し、イリスに可愛そうなくらい一生懸命なあなたの姿にもかなり好感がもてましたよ」

「ミルテ…」

ラシルは呆れたようにミルテを見たが、直ぐに満面の笑みに変えた。

「なんだかんだ言って、今日は大盤振る舞いに誉めてくれるな」

ミルテも少し言い過ぎたと思ったのだろう。気まずい気持ちを隠すようにひとつ咳払いをした。

「先程も言ったように…」

「今は酔っているんだっただな」

「そうです」

「だったら、もっと酔ってもっと誉めてくれ。いつも言われ慣れないミルテに言われると効果も倍だ」

ラシルは酒場のカウンターでつまらなそうに座っていた亭主を呼び寄せ、酒を持ってくるように言った。今まで慥然としていた亭主の顔が商売用の笑みに変わり、いそいそとテーブルに酒瓶を置いていく。

「もう、誉めるところなんてありませんよ」

「仕方がないな。では、これからは俺がミルテのいいところを上げ連ねていこうか。そしてその眉間一杯に皺を刻ませてやる」

そう言っただけですでにミルテの額に一本皺が刻まれるのをラシルは笑って眺めた。

第15話

首都インセンは、もう明日に控えた秋祭りでもより華やかさを増している。石畳に跳ね返る馬車の音さえ人々の喧騒に掻き消されてしまう程だ。

昨晚インセン入りを果たしたイリス達は、今朝カシスの街長カロンに貰った推薦状に書かれた貴族のもとを訪れることにし、ラシル達は彼らを屋敷の門の前まで送った。

「契約では首都インセンまでだったけれど、よければ、いえ、是非ともイリスが神殿の舞手に決まるまで一緒にいてくれないかしら」

シリアの願ってもない提案があったのも昨夜のことだった。彼女が言わなければこちらから頼もうかとも思っていたところだったので一も二もなく快諾した。これで暫くは堂々と彼らの行動も見守れるし、イリスとも一緒にいられると言うものだ。

ジンはシリア達が完全に屋敷の中へ入るのを見届けると、立派な石垣で周囲を囲まれた広い屋敷を眩しそうに見上げた。

「この大きな邸宅に住むマグリア・ナリシとはどういう人ですか？」

シリアの前で知らないとは言えなかったらしい。ラシルはジンの健気さを好ましく思った。

「スカトル国の税務長官だ」

「うらまれる役職なのに、街の中心にこんなに恥ずかしげもなく立派な家を建てて、人の恨みの怖さを知らないとは、…阿呆ですね」

本人の家の前ではつきりとミルテは言い切った。

「天下の税務長官もミルテに言わせると阿呆扱いか」

ラシルは苦笑をうかべ、直ぐ真面目な顔に戻した。

「さてと、俺たちも始めるか」

双子は待っていましたとばかりに意気込む。

「神殿のことなら洩らさず仕入れてくるから任せて！」

駆け出そうとする二人の襟首をラシルは掴み、引き寄せた。

「なんだよ」

「せつかくのそっくりな顔が無駄に使うことはない。別々に行動してくれ」

あまりに似ている彼らの容姿は何かの時に役立つかもしれない。

「それもそうだね」

ラシルの言葉に双子は声を揃えて納得した。

「一人はジンと共に行動して、神殿の周りの地の利を把握してきて

欲しい」

「もう一人は？」

「ミルテだ」

すぐさまメノウはアクアへにつこり笑いかけると、走りざまにジンの腕を取った。

「俺はジンにする。ミルテはすぐケンカをふっかけてくるからな。精神年齢が低いんじゃないの？」

「それは言いがかりですね。そっくりその言葉お返ししますよ」

腰に手をあて、ミルテはにやりと笑ってみせる。メノウもそのケンカを買ったとばかりに一歩前へ進み出る。

「もういい。ジン、メノウ、頼んだぞ」

ラシルは二人の間に入った。日常茶飯事で見られる普通の光景で珍しくもなんとも無いが、続きは今ここでやらなくてもいい。

「わかりました。じゃ、いこうか」

「うん、また後でね」

メノウはひらひらと手を振ってジンと共に立ち去った。

「ミルテとアクアは神殿建築に当たっている出入りの業者から内部の様子等、神殿に関係することを何でも聞き出してきて来て欲しい」

「了解。そういうことならアクアの方が適していますから結果的に良かったですよ」

「双子だからどっちでも同じだよ」

思いかけず誉められたからか、アクアは照れてぶっきらぼうに答えた。

「素直じゃないところは確かにメノウと似ていますね」

アクアの髪をくしゃくしゃにして楽しむミルテの手をアクアが邪険に払う様子を眺め、似たもの同士はミルテとアクアの方かも知れない、とラシルは思った。二人はなんだかんだ言い合いながら出発し、笑顔でその二人を見送っているモスの隣へラシルは歩み寄った。

「モスは俺と一緒に来てくれ。…俺の母の家に」

ごんまりとしているが安らぎを感じさせるその家は街の少し外れに建っている。

思い出とひとつも変わらず、庭先には秋のバラが今を盛りに咲き誇っているが、ラシルが一番好きな甘い香りを漂わせる白い花は時期ではないので咲いていない。だが、花の変わりに葉先を黄色に染

めはじめさせていた。

「ラシル…」

呼び鈴を鳴らす前に庭から声をかけられた。この家を出てからもう十年以上経つが、母のマリーナは昼の太陽の元でも相変わらず優しげでたおやかだった。ラシルが受け継いだ彼女の濃い青の瞳には、じんわりと涙が盛り上がっていた。

「お久しぶりです」

ラシルが頭を下げると、母は側に寄り、軽く腕に触れた。それだけで暖かい気がする。

「モスもずっとラシルの側にいてくれてありがとう。さ、立っていないで家に入ってちょうだい」

長い指先で涙を拭い、微笑んで母はいそいそと二人を中へ勧めた。

出された手料理は美味しいと言う感想よりも懐かしい思いの方が先にたつた。モスは他の使用人から話を聞くために席を外しているが、久しぶりの対面を親子水入らずで過ごせるように気を利かせてくれているのも多分にあるのだろう。

「あの人はここに来ますか？」

食後のお茶を出して席につく母にラシルは本題を切り出した。

「父様の事をあの人が、だなんて」

母は悲しそうな顔をするが、ラシルには今のところ父と呼ぶつもりは全くない。

「今は首都にいらっしやるから二日もおかずに会いに来てくださるわ。一昨日もちょうどあなたの事を話したのよ。会いたいとおっしゃっていたわ」

また母に悲しい顔をさせてしまうと思いつつも、ラシルはきっぱりと答えた。

「会うつもりはありません。ただ今日は先ごろ完成した神殿について何か聞いていれば教えていただきたいのです。今、神おろし候補が上がっている一座を警護しながら首都へ連れてくる仕事をしているのですが、話を聞いているうちに……」

「その一座の人達を応援したくなかったのね？」

本当はもう少し事情は込み入っているのだが、にっこり笑う母に合わせて頷いた。

「今度うちに連れてきて頂戴。あなたが応援したくなるような人たちなら私も何かご馳走したいわ。それにモス以外のお友達もね」

母は女らしく心優しい人だ。だから本妻に子供が出来た途端に街の外れに追いやった父を許してしまったのだろう。確かに本妻は有力者の娘で、母は後ろ盾のない妾にすぎない。

父に捨てられた、と幼心にラシルは感じた。だが成長と共に、妾にしては家も貰え、一般的よりかなり手厚い経済援助が受けられる恵まれた家庭だということは分ってきた。そして諸々の大人の事情

も。町の外れで母を暮らさせるのは彼女の為でもあったのだ。心の優しい母では本妻の嫌がらせには耐え切れないだろう。だが、ラシルは理性では納得できても、子供の頃に芽生えた恨みにも似た感情を未だになかなか消す事が出来ないでいた。

「カルート王と一緒に神殿を見に行ったそうよ。細部まで彫刻をこらして、よく短期間で出来上がったものだとおっしゃっていたわ。今、各貴族が舞手を推薦するため素晴らしい舞手を捜しているのだけれど、お父様はまったくご興味がないみたいで探すつもりはないようよ。もともと派手な行事は苦手な方だから仕方がないわね」

父に宮殿へ連れられ、共に良く遊んだカルート王ともこちらに住まいを移してからは会いに行かなくなった。カルートからの誘いもあつたし、会おうと思えば会えたと思う。カルートと会えなくなるのはつまらなく寂しかったが、父に反抗して子供心に意地でも行かないと心に決めた。ただ、今思えば本妻の息子を差し置いて脇腹の息子が王に会いに行く事は母の立場を悪くするだけなので、結果的にはよかつたのかもしれない。

実家にいると気持ちも昔に戻ってしまうようで、カルート王との楽しかった思い出に浸る前にラシルは気持ちを引き戻した。母だけの話では心もとない。やはり父に会わずして詳しい情報を得るのは無理なようだ。今話題の神殿についてならきつと怪しまれずに聞き出すことができるだろう。ただ、自分の頑なな心を開けるかどうか心配だ。

(いや、イリスのためだ)

そう腹を括ると母に向き直った。

「やはり、…父に会いたいのですが」

久しぶりに父という言葉をラシルから聞き、母は思いがけない贈り物を貰ったかのような笑みをひらめかせた。

「きつとお父様も喜んでくださるわ」

「ただ、仕事の関係上、できるだけ早めにお問い合わせしたいのですが」

「もちろん。直ぐにお知らせするわ。あなたの気が変わらないうちにね」

少女のようにウインクを一つする。ここまで言われると思っていなかったラシルは後ろめたい気持ちに襲われたが、同時に母を喜ばせる事が出来た安心感も心に涌いた。

第16話

磨かれ抜かれた大理石の床を緊張した面持ちでイリスは歩いていった。

通路の壁には風景や人物が鮮やかな色彩で描かれており、どこからか水のせせらぎの音も聞こえてくる。

「こんな立派な家に入るの初めて」

コリーは小声でチファに話した。イリスやナナ、シリアはこの屋敷のように華美ではないが、荘厳なコヨルテの神殿で暮らした経験があるので萎縮はしない。だが、ユリア、チファ、コリーは神殿に出入りできる身分ではなかったので、落ち着かない様子できよるきよる辺りを見回している。

(ここで必ず選ばれないと後がない)

イリスは腹を使い、何回も深い呼吸をする事で集中力を高めていった。

中庭に程近い部屋に通され、暫く待たされた。赤色と金で統一されたこの部屋は重苦しく体にまとわりつく威圧感がある。来たものに威厳を示すためだけに作られた部屋といってもいい。

じつと座っているのさえ疲れ始めた頃、廊下から足音が聞こえ、この屋敷の主人マグリア・ナリシは、一段高く設えた細かい螺鈿が施されている椅子に鷹揚と座った。

シリアを初め、イリス達は頭を下げる。

「お忙しい中、我々のためにお時間を割いてくださり、ありがとうございます」

シリアはまず形式に則って礼を述べた。

「待たせたな、カシスのカロンからの紹介状は見せてもらった。だが実はもうある一座に決めてしまったのだ」

マグリア・ナリシの口ぶりから、シリアをはじめ、女と幼女と華奢な少年しかいない面々にあまり期待していないようだ。大きな港町であっても、インセンからすれば田舎であるカシスの街長カロンからの推薦であることも期待できない理由の一つかもしれない。

「一度だけ、私共に機会をいただけませんか？ なにとぞお願い申し上げます」

顔は青ざめさせたが、もう決まったからと言って簡単に引き下がるシリアではない。床に擦り付けるように頭を下げ続けた。他の仲間も同じようにシリアに習う。

「…一舞だけだぞ」

シリアの必死の願いに負け、マグリア・ナリシはとうとう、面倒くさげだが、許可をだした。

「ありがとうございます」

もう一度深々と頭を下げるシリアの艶やかな唇にはすでに笑みが

浮かんでいた。

「では、早速やってみよ」

「はい」

立ち上がり、イリス以外は脇にどいた。

マグリア・ナリシは頬杖を突き、足を組む。しっかり肉がついた体を覆い隠すようにビロードの青い布をたっぷりあしらった服を着込み、裾と言う裾には金刺繍で花の形を模らせていた。髪はおでこのかなり上まで後退しているのに、サイドの毛は癖毛でふさふさして、大きな卵を乗せた山鳥の巣を思わせる。だが、一番印象的なのは赤くぬめった厚い唇だった。

「では、はじめます」

「うむ」

シリアの合図で、イリスは舞い始めた。

ゆっくりと気を開放し、周りと自分を同一化させていく。それは何回も舞う事により、イリスは空気を吸う自然さで難なく出来るようになっていた。

「…あの、終わりましたけど」

イリスが舞い終わってもしばらく動かないマグリア・ナリシに、シリアは遠慮がちに声をかけた。だが、彼の表情はすでに今までイリスの舞を見終わった人々の顔に浮かんだそれと同じであり、して

やったり、とシリアは笑い出したい気持ちを抑えるのに苦労していた。

「これで儂が王に選ばれるのは間違いないわ」

肘掛を驚づかみにしながらマグリア・ナリシは呟いた。イリスの耳にもその呟きは入り、満面の笑みを浮かべ、優雅にひとつ礼をした。

「素晴らしい、素晴らしいぞ」

部屋の外まで響くほど激しく拍手をし、それを皮切りに周りで呆然と見ていた召使たちも感嘆の声をあげつつ拍手をくれた。拍手だけでは感情を抑えきれないマグリア・ナリシは、椅子から降りるとイリスの手を取り暫く離さずにいた。

「…ありがとうございます」

早く手を離して欲しかったが、そんな事を言って気を損ねさせる訳にもいかず、イリスは笑顔で耐えた。

「そち達を推薦する事にしたいが、一つ条件がある」

「どのような事でしょう？」

条件を出されると思っていなかったシリアは顔を引き締めた。

「試演の日まで舞を舞わないで欲しい。王や他の諸侯を驚かせたいのでな。初めて見せるほうが感動も大きかろうに」

何かとんでもない事を言われるのではないかと思っていたシリアは安堵のため息をついた。イリスの舞は毎日見ても新たな発見があり見飽きないのは身をもって知っているが、逆らってまで言う事でもない。

「仰せのままに」

シリアは微笑み腰を折った。

マグリア・ナリシはまだ握っていたイリスの手を顔の前まであげた。

「そちも体を厭うて万全で試演に望めよ」

目を細め、にんまりとした満面の笑顔でイリスに声をかけた。今にも自分の手を彼の頬に擦り付けられるのではないか、という恐怖にイリスは体を強張らせながらも、なんとか笑顔を作って頷いた。

「やったー」

黙ってマグリア・ナリシの屋敷を出て、家屋敷が見えなくなるまで歩いてから、ようやくコリーは派手に諸手をあげた。周りを歩いていた人は急に何事かと振り向いたが、お構い無しに叫びながら二、三回続けて両手を挙げた。それにあわせてチファも飛び回る。

「もう別の人が決まっているって聞いた時はどきどきしたけれどね」

「お疲れ様」

ユリアだけは複雑な表情でイリスを労った。

「イリスの舞を一度でも見せる事さえ出来れば、他に一つも心配なんてなかったわ」

シリアも満面の笑みで皆を見回した。

「あなたたちもお疲れ様。明日の祭りは踊る必要がなくなったから、今回はお客として楽しんでください」

「やったー、じゃあもうこれから見てきてもいい？」

「もちろんいいわよ。でもあまり羽目を外さないでね」

前夜祭は当日より盛り上がる事が多い。首都のインセンの祭りとなれば今までまわってきたどの都市よりも華やかに違いない。チフアとコリーは宗派の違いも忘れ、沸き立つ思いに浮かれていた。

今にも駆け出しそうな二人をシリアは呼び止めた。

「手をだして」

そういつて差し出された手にシリアはそれぞれ二十ダラスを握らせた。

「祭りを楽しむにはお金もなくちゃね。今までがんばったご褒美にしては少ないかもしれないけれど」

「ありがとう、シリア！ ユリアも早く行こうよ」

「ええ」

あまり乗り気ではないようだが、せつかくのシリアの好意と二人の喜びように水を差してもいけないとばかりにユリアはチファとコリーに追いつくために走り出した。

「イリスにも」

シリアはイリスの手には三人よりも多い五十ダラスを握らせた。

「多いよ」

驚いたイリスはシリアに返そうとしたが、シリアは受け取るうとはしなかった。

「悔しいけれどインセンの物は皆一流だから、あなたも物には罪がないと思って好きなものを買ったらいいわ」

迷ったが、シリアに手をとられたナナを見て、イリスはありがたく受け取る事に決めた。

「ありがとう、じゃあ遠慮なく貰うね。僕もこれから出かけてもいい？」

「いいけれど、一人で大丈夫？ ラシルは今どこにいるか分からないし、そうだと私達と一緒に……」

心配するシリアをイリスは笑って制した。

「一人で大丈夫だよ。危なそうな所には行かないし、なるべく早く帰ってくるから。僕としてはシリアにもインセンの街には罪がないと思っで楽しんでほしいんだけど」

シリアを納得させ、イリスは一人で街の店を覗き始めた。両側に商店が立ち並ぶ活気ある通りは、軍服で歩く兵隊を除けばいち早く戦争の傷跡が消えつつある場所といつてもいい。革製品を扱う店、葉巻、様々な香りの石鹸など、需要があるだけに嗜好品の品揃えも良かった。

「ここにしようかな」

入りなれない店に戸惑いながらイリスはゆっくりと入り口をくぐる。比較的小さな店だが、外から見えた商品には趣味の良さが伺われた。丁寧な刺繍が施された布、美しい寄木の箱、その他イリスには使い方の分らない道具等が綺麗に並べられている。

(女の子って何を喜ぶか分らないんだよな)

いろいろ手にとってみるが自信がない。シリアに付き合ってもらうのが一番なのだが、そうするとナナもついてきてしまう。イリスを兄のように慕い懐いてくれるナナに贈り物をして驚かせたいイリスとしては、それだけは最も避けるべき事だった。

「なにかお探しならお手伝いするわよ」

暫く悩んでいたイリスを見かねたのか、シリアと同じくらいかそれより若い店の女性が声をかけてくれた。

「お願いします」

渡りに舟とばかりにイリスは微笑んだ。やはり女性の事は女性に聞くに限る。彼女と共にナナの贈り物を探す事にした。

「やっぱり実用的なものがいいのかな。でもどうせなら綺麗なものをあげたいし」

隣からくすくすと楽しそうな笑い声が聞こえ、迷っていたイリスは動きを止めた。

「ごめんなさい。あまりに真剣だったから。彼女へのプレゼント？」

イリスは手を大きく振り、慌てて否定した。

「彼女じゃないです。妹みたいな感じ……です」

初々しいイリスの表情が彼女にとっても好印象に映ったようだ。

「ああ、そうだ。ちょっと待ってて」

につこり笑った女性はそういい残し、店の奥に行つて小ぶりの箱を持ってきた。

「これなんてどう？」

蓋を覗き込むと、艶やかな黒に塗られた飾り櫛が真綿の上に乘せられていた。柄にはピンクの石が花形に並べられ、その周囲を緑の石の葉と蔓が囲っている。綺麗で流行がなく、使いやすそうな櫛だ。

「いいかも」

「でしょ？ 普段使いと言うよりは特別な日に髪につけるものだけ
れど、明日から秋祭りもはじまるし、いいんじゃないかしら」

今のナナには少し大人っぽい気はするが、いつかは彼女も大人に
なる。

（そして、その時に少しでも自分の事を思い出してくれたらいいな）

店の女性は物思いにふけり黙ってしまったイリスを櫛の値段で迷
っていると思っただけ。

「確かに少し高いけれど品は悪くないわよ。そうね、六十ダラスだ
けれど五十五ダラスでどう？」

イリスは言い値で買うのも面白くないと思い、会話を楽しむ軽い
気持ちで掛け合って五十二ダラスまで負けさせた。

「綺麗な袋にいれてあげるから待ってて」

店に一人残されたイリスは財布を取り出した。今まで欲しいもの
もなく、使うところもなかったので六十ダラスでも楽に払えるくら
いは貯めていた。

（そういえば、コヨルテ馬を探してメノウとアクアでお金を山分け
した事もあったな）

楽しい思い出の始まりの出来事だ。イリスは自然と口角が上がる

のを感じた。

奥から女性が戻ってくる音がしたので顔を上げると、目の端に花が彫られた円状の金具が目に入った。手に取ると、彫られていた花は百合だった。

鎧だ。

「うちの父が大層馬好きなのね。年代物だけれど細工が見事でしょう」

自慢げに女性が言うとおり、細部にまでこだわって作られている。

是非とも欲しいと思った。コヨルテ馬の中でも優れたリスに付いたらどんなに映えることだろう。リスは百合の花の別名であるし、なんといてもラシルが大事にしている馬だから、彼へ贈り物をするならこれ以上にふさわしいものはない。

「これもください」

予定にはなかった買い物だが、その言葉は無意識に口を衝いて出ていた。

第17話

シリアとの約束どおりイリスは早めに宿に帰ったが、まだ他の誰も戻ってきてはいないようだった。

自分の割り当てられた部屋に入ろうとイリスが階段を登りかけた時、宿の亭主に呼び止められた。

「あんた、『ラシル様』っての仲間だろ？」

イリスは思わず笑ってしまう。確かにラシルは『様』付けされてもおかしくない優雅な容姿を持っているが、そう言われて一番嫌がるのは彼自身に違いない。

「違うのか？」

笑うイリスに宿屋の亭主は困惑した表情を浮かべた。

「いや、仲間だよ」

それはウソではない。その言葉に亭主は安堵のため息をつく。

「それは良かった。先程から『ラシル様』に『マリーナ様』からの伝言を携えた女性が来ているのだが、代わりに聞いてくれないか？」

マリーナと言う名前に聞き覚えは全く無い。勝手に伝言を聞いていいものか迷っているうちに、亭主はイリスの腕を掴むと一階にある食堂の奥へ連れて行った。

逆光でよく見えなかったが、随分と恰幅のいい中年の女性が猫背で座っている。

「本人でないが、お仲間だそうだよ」

亭主の言に中年の女性は大きな体を大層に動かし立ち上がった。宿屋の亭主は自分のお役目が終わったばかりにさっさとその場を立ち去る。

「いつラシル様が戻られるか、わかる？」

思いの他かわいらしい高い声で尋ねられたが、分らなかったの素直に首を横に振った。

「でも、言伝くらいなら伝えるけど」

「そうねえ…」

暫く逡巡していたが、話す事に決めたらしい。彼女はマリーナという女性の侍女で、カリンと名乗った。

「マリーナ様からの伝言よ」

そう前置きして、三日後に父様と会う手はずを整えたので夕刻家に来るように、と伝えて欲しいと言った。イリスは彼女の前で二回復唱させられた。

「分った。ちゃんと伝えるから。でもマリーナって誰？」

イリスとしては一番気になる事柄だ。ラシルに関する知らない女性の名前は放っておけない。彼の人目を惹く姿に、どこへいっても女性が寄ってくる。イリスは特に何も言わないが、口に出さないからといって、イリスの心が穏やかというわけではないのだ。

「ラシル様のお母様よ」

「…あ、インセンに住んでいるんだ」

安心すると同時に、今までラシルの家族について何も知らなかった事に気づいた。聞くと自分も話さなければならぬと思い、あえて聞かなかった部分もある。

(ということは、ラシルはスカトル出身か)

いつかセダの街でラシルが街の人たちの前で踊った時、ラシルの踊り方を『都風』と言っていた人がいたのを思い出した。

イリスはラシルの過去を自分から聞けない分カリンから聞く事にした。近くの椅子を見つけるとイリスはカリンの前に引き寄せ座る。幸いにしてカリンは話をするのが苦にならない人種のようなだった。

「ラシルのお母さんってどんな人？」

「マリーナ様？ それはお優しく美しい方よ。私たちの面倒も良く見てくださるし、とても料理がお得意なの。でも一番印象的なのは澄んだ秋の空のような青い目だわ」

「ラシルの目はお母さん似だね」

「そうね」

「じゃあ、お父さんは？」

イリスは自分の父親をあまり覚えていない。シリアに聞くと、誠実でコヨルテ馬を操るのがとても上手かったそうだ。自ずとラシルの父親がどんな人物かも興味が湧く。

「あなた、本当に知らないの？」

カリンは驚いたように声を上げた。

「だって…聞いた事ないから」

口ごもるイリスに、カリンは軽くため息をつきながらも納得したように頷いた。

「まあ、あまり仲が良いとはお世辞にもいえないから、話したがらなかったのかも知れないわね」

ラシルが誰かを嫌うなんて考えられなかったので、イリスは意外に思った。

「でも、三日後に会う約束をしたから、仲はそんなに悪くないんじゃないかな」

カリンはイリスがちゃんと伝言を覚えている事に満足しつつも首をかしげた。

「そうだといいいけれど。少なくともマリーナ様は今回の父子の再

会に大喜びよ。今からもうその日の献立を考えられているわ」

「それならもっと早く二人を会わせた方がいいんじゃないかな」

「そう言う訳にもいかないわよ。旦那様はお忙しい方だから」

イリスはラシルの父親について聞くのが少し怖くなった。傭兵のラシルに『様』をつけるのは父親の身分が高いからかもしれない。だが、あえて聞く事にした。しつかり聞いておいた方が後々いらぬ空想に悩まなくてすむ。

しかしそれは聞かなかつたほうが良かったかもしれない。

「有名人よ。サンデラ・クロブ將軍。冷徹だつて言われているけれど、少なくとも奥様の家へ見えている時はそんなことはないわ」

イリスは途中からカリンの声を聞いていなかった。

サンデラ・クロブ將軍。他でもない、イリスの祖国、コヨルテⅡラグドを壊滅状態にした張本人だ。

急に何が何だか分からない、雲の上を歩いているような心もとない気持ちに襲われた。イリスは立ち上がったが、まともに歩けなかった。

「ちょっと、大丈夫？」

カリンに支えられ、イリスは少しだけ自分を取り戻した。

「ちゃんと伝えるから、色々……」

ありがとう、とはさすがに言えず、そのままおぼつかない足取りでイリスは部屋に向かった。

自分の部屋には戻らず、イリスはラシルの部屋へ向かったが鍵がかかっていた。まだ戻って来ていないらしい。どうしていいかわからないイリスは戸口に背を持たれかけ、そのまま座り込んでしまった。

西日が窓から石の廊下に赤い光を投げかけるが、イリスのところまでは届かない。暗い影の中にとくとく、心も一緒に暗い奈落に落ちてしまいそうだ。イリスは顔を自らの両腕に沈めた。

「どうしたのですか？」

声をかけたのはミルテだった。顔を上げると、アクアが目の前にしゃがみこみ、その隣にミルテが立っていた。

「具合悪いの？ 大丈夫？」

心配そうに尋ねるアクアの腕をイリスは掴んだ。

「ラシルは？」

「今日は一緒に行動しなかったから……」

アクアは助けを求めるようにミルテを見た。

ラシルと同じ部屋のミルテは鍵で部屋を開け、イリスを立ち上がらせる。

「部屋の中で待っているといいですよ。一人で大丈夫ですか？」

頷くイリスをミルテは椅子に座らせる。

「さあ、いきますよ」

ミルテはイリスを心配し一緒に居たがるアクアの首根っこを掴んで部屋から出て行った。

「もしかして舞手に選ばれなかったのかな」

ドアが閉まりかける時にアクアの声が聞こえた。

（朝はマグリア・ナリシの屋敷にいたんだ。なんか信じられないくらい遠い昔に感じる）

そんなことより早くラシルに会いたい。そしてただ一言『違っ』と言って欲しかった。

「明かりもつけずにどうした」

夕飯の時間を少し越えた頃、やっとラシルは戻ってきた。すでにミルテに聞いていたのか、イリスが彼の部屋に居たことには驚かなかった。ラシルは窓近くのチェストの上に置かれた燭台に火を燈し始める。

「ラシルのお父さんってサンデラ・クロブなんだって？」

本当はもう少しやんわりと話を持っていこうと思っていたのに、気づけば開口一番に聞いていた。

「そうだ」

全ての蠟燭に火をつけ終わり、振り返った彼の顔は普段と変わらない。隠す必要があるわけではない彼には当然かもしれないが、イリスにはその悠然とした態度が癢に障った。

「どうして言うてくれなかったんだよ」

「言う必要がないと思ったからだ」

その通りかもしれないが、イリスには重要な事柄だったのだ。

「初めから知っていれば……」

知らない間に流していた涙を拭うために口を嚙んだ。だが、今度は口を嚙んでいないと嗚咽を上げてしまいそうなのが怖くて話せなくなった。

なかなか続きを言えないイリスの後を継いでラシルが言った。

「…好きにならなかったのに…？」

弾けるように顔を上げたイリスはラシルの顔を見つめた。他にも沢山言わなければいけない事があったのだが、全て消えた。

炎の揺らめきに合わせ、ラシルにかかる陰影も揺らぎ、イリスは彼の表情をはつきり伺う事ができなかった。

「やっぱり、人なんか好きになるんじゃないかった」

イリスは立ち上がると俯いたまま出口に向かい、ラシルの隣で立ち止まった。

「もう、一緒にいることは無理だ」

見上げたラシルは何も言わなかったが、青い瞳は暗く悲しげで、それだけで心が痛んだ。

(こういう時こそ普段どおり悠然としてよ)

一方的な物言いを棚に上げてイリスは腹が立ってきた。もうこれ以上この場にいる事が辛くなり、イリスは堪らず部屋から駆け出した。

中庭の木陰まで走ると、イリスはそこでしゃがみこんでしまった。動く事さえ嫌になったと言った方が正しいかもしれない。まだイリス自身が上手にラシルに対しての気持ちの整理をつかかっているのだ。

(コヨルテを破壊した、そして母の命を奪った敵将の息子…)

彼に直接的な恨みを押し付けるのは酷かもしれないが、知らなかったとはいえ、半分でもサンデラ・クロブの血が流れている彼を信頼し何もかも許してしまつた自分が、亡くなつていつた仲間に対して酷い裏切行為を犯したように思えて仕方がなかつた。しかし、だからと言ってイリスはラシルを簡単に忘れられそうにない。

(僕は、どうすればいいんだよ)

イリスは頭を掻き篦り、手を髪に突っ込んだまま膝に顔を伏せる。不意にがざり、と葉擦れの音がした。

「そこにいるの、イリスでしょう？」

すぐにナナの声だと分つたが、顔を上げる気にならなかつた。ナナは隣に座るとイリスの膝に手をかけた。だが、イリスは俯いたまま動かなかつた。

「もう夜だから、お部屋に入る？」

心配して言ってくれているのは分つたが、今のイリスにはただ煩わしかつた。

「ごめん、ナナ。しばらく一人にして」

思った以上に冷たい言い方になつてしまい、今までイリスからそのような扱いを受けた事がなかつたナナはとても驚き、少しの逡巡の後、何も言わずその場を立ち去つた。

その後、夜更けまでイリスは一人、静寂の中に座り込んでいた。

第18話

マグリア・ナリシとの約束を守り、『シリア一座』は秋祭り中に一度も舞を見せる事はなかった。

（かえって良かった。こんな気持ちじゃ『乙女の舞』なんてやる気になれないから）

イリスはシリアとの練習以外は誰にも会いたくなかったので、一日の殆どを部屋で過ごしていた。相部屋の双子はイリスを心配しながらもどこかへ出かけていく。その間一人でいる時は、窓から聞こえてくる音楽に耳を傾けたり、試演に舞う踊りの練習をしたりして時間を潰した。一人でいる分余計に、自分から望んだ事とはいえ、何かしていないと抜け道のない辛い物思いに耽ってしまふからだ。

「イリス、今すぐ支度できる？」

祭りの二日目、最終日の夕方にシリアが伺うように部屋に入ってきた。

イリスに元気がないのは彼女も気づいており、それは試演への緊張感だと彼女は勘違いしている。イリスもシリアがナナの神託で選んだ警護の相手が一番憎むべきサンデラ・クロブの息子と知ったら何をするか分らないので、何も話さずそのまま誤解させておいた。

「マグリア・ナリシの使いが来て、イリスを晚餐に招待したいらしいわ」

「そう。一応衣装とか持っていった方がいいのかな」

気だるげにベッドから下り、イリスは身支度を始めた。女性と違い、髪を整えるくらいなので短時間ですむ。

「一人で大丈夫？」

宿屋の外までシリアは心配げに付いてきた。イリスは微笑んだが、その力ない様子はさらにシリアの心配を増長させただけだった。

マグリア・ナリシの屋敷は相変わらず広く、各所に施された彫刻が無意味にごつてりしている。

（屋敷も住んでいる人に似るんだな）

再びマグリア・ナリシに会い、イリスは自分の考えに納得した。今日の彼は赤い絹のケープに所狭しと金の糸に周りを包まれた宝石を付け、必要以上に自分を着飾らせている。

「少しやつれたか？」

イリスの肩を親しげに抱き、上機嫌だ。ラシルとのことで気持ちが荒れている分、普段では何気ないこと、目端に入る肩に置かれた短く太い指にさえ、苛立ちを感じる。

「まずは乾杯だ」

バルコニーに連れてこられ、葡萄酒の入ったグラスを渡されたイ

リスは、祭りを最後まで楽しもうとする人々を真下に眺めた。

「儂のおかげで生活が変わったな。普段ならあの浮かれている奴らのために舞を舞っている頃だろうに」

恩着せがましい言い方に、イリスはまたも苛立ちを感じる。こいつの相手をするくらいなら、まだ民衆を相手に舞を舞っていた方が精神衛生が保たれる。

「そちは選ばれし舞手だ。試演が終る頃には押しも押されもせぬ有名人名人となるであろう。やはり生まれた時から人に格の違いはあつて当然だな。下で浮かれている奴らは神が余興で創つたようなものだ。たわいのない事で喜び、せかせかと働いて最後は使い古されたぼろのように死んでいく。もちろん名前などこの世のどこにも残らない。それでいいと思っっている事が唯一の救いといえれば救いだな」

イリスに優越感を味あわせようとしているのかもしれないが、さらに気分が悪くなるだけだった。出来れば耳を塞ぎたいと思つたが、思つただけでなく実際にやるべきだったかもしれない。

「神は選ばれた人間しか結局残さないのだ。今回の戦いでそれが証明された」

「…もう沢山だ」

イリスは心のどこかで何かが外れた音を聞いた気がした。

「何か言つたか？」

マグリア・ナリシはイリスの声がよく聞こえなかつたらしい。耳

を近づけると同時にイリスの肩も抱き寄せた。初めて見たときもそう思ったが、赤くぬらぬらとした唇が気持ち悪い。ただでさえ気持ち悪い唇で虫唾の走るような言葉を聞かされたのだ。言い換えれば、今回の戦争で殺されたコヨルテの人々はこの世に要らない人物だった。だが、イリスの知る限り、コヨルテの民は皆勤勉で善良で、いなくなっただけいい人など一人もいなかった。

イリスは肩に置かれた手を邪険に払った。

「もう沢山だ、といった。もう僕に触れるな」

イリスの怒りを孕んだ低い低音は、マグリア・ナリシを驚かせるのに十分だった。

「そんな事をいっていいのか」

一度は青ざめた顔がみるみる赤らんでいくのが見て取れた。今ではゆでられた海老のように全身真っ赤だ。

「僕にそんな事を言っているのか？ もう試演には出られないぞ」

マグリア・ナリシの言葉は、頭に血が上っていたイリスを急激に冷静にした。そして今度はイリスが顔を青ざめさせた。

（なんでこんな事になってしまったのだろう）

ぱつと、今まで歯を食いしばって共にがんばってきた仲間達の顔が浮かんだ。イリスは慌てて跪くと、首を垂れて許しを請う形をとった。

「ごめんなさい。どんな罰でも受けますから、それだけは」

急にしおらしくなったイリスに、今言った言葉がとても効果的だった事に気づいたマグリア・ナリシは、満足げな顔を浮かべた。だが、溜飲は下げても、一度でも自分に楯突いた者を容易に許さないのがマグリア・ナリシであり、そうやって今日の地位を築き上げてきたのだ。

「いや、許さぬ。お前とは今日限りだ。もう祭りも終わり、他の諸侯に舞を見せる機会を失ったお前たちはすべてを失ったに等しい。他の諸侯にもお前達と取り合わないようにしてやる。旅芸人とは所詮留まる土地も持たぬならず者だ。それにふさわしく野垂れ死ねばよいわ」

彼の口から出る止めどない言葉に、理性では例え彼の靴を舐めてでも許しを得る事が先決と分っていたが、これ以上頭を下げるのはイリスのプライドが許さなかった。

(他の貴族に自分の舞を見せれば、先日のマグリア・ナリシのように気を変えてくれる人がきつと現れるはずだ)

そう心に決めると、イリスは立ち上がり、服の乱れを直した。もうここにいる必要は全くない。

「お前が野垂れ死ね」

イリスはマグリア・ナリシの目を見て吐き捨てるようにそう言うのと、踵をかえし、わき目も振らず出口を目指した。

一方、マグリア・ナリシは、イリスが何としても自分の機嫌を取

りにかかると思っていたので、意外な行動に出たイリスの背中をただただ啞然と見つめていた。

「気の短い野良猫が無い爪で刃向かいやがって！」

再び怒りが襲い、マグリア・ナリシは叫び散らしたが、周りの召使がおろおろするばかりで、一番聞かせたい当の本人の姿はすでにどこにもなかった。

第19話

イリスは昨夜遅く宿屋に戻って来た。そのまま彼はシリアの部屋に直行し、相部屋である双子の所には戻ってこなかった。

「イリス、大変な事になっちゃったよね」

今朝早く硬い表情で出かける一座にアクアは、さすがにイリスに聞く事は出来なかったが、話の聞きやすいコリーを捕まえて昨夜の事情を引き出し、皆に説明していた。

「でもさー、イリスくらいの実力があれば、どっかで選んでもらえるんじゃないの？」

楽観的に答えるメノウに、ミルテは首をかしげた。

「さあ、どうですかね。アクアの話によれば、かなりマグリア・ナリシを怒らせたらしいですから。一番性質の悪い相手を怒らしたのかもしれない」

ちょうどモスとラシルが部屋に入って来たので、三人の会話は自然と中断する。ラシルはミルテの続きを口にした。

「殆どイリスを推薦してくれる諸侯はいないだろうな。どこでも門前払いするように圧力をかけたらしい」

「うそー」

メノウはモスを見たが、いつもの表情とは打って変わって厳しい

表情で頷いた。

「じゃあ、計画は練り直しですね…」

昨日の時点までに調べた神殿周辺の様子が書き込まれた紙をジンは残念そうに見た。

「それは選択肢の一つに入れておいた方がいいかもしれない。だが、まだ他の可能性もあるから、それまで引き続き調べておいてくれ」

ラシルの言葉にミルテは目を緩めた。

「出来ますか？」

「やるしかないだろう」

双子はミルテとラシルのやり取りが分らず、怪訝な表情を浮かべる。双子を見て、ミルテはにっと笑った。

「あまり仲がいいとは言えなくても、ラシルには強力な後ろ盾があるでしょう」

二人とも納得したようにラシルを見た。イリスからマリーナの言伝をラシルに伝えてくれと頼まれた時に、初めて二人も彼の父がサndera・クロブだと知ったのだ。

「ミルテは知ってた？」

アクアに聞かれ、ミルテは当然とばかりに頷いた。

「これでイリスが不機嫌な理由が分りますね。自分達がコヨルテの民だと隠しているのなら何事でもないように振舞うべきですが、それができなかつたくらい彼には衝撃的な事だったのでしょう」

「イリスは本当にラシルが好きだったんだから、そんなに器用に出来ないよ」

アクアはイリスの気持ちを思い心痛めた。傷心顔のアクアにミルテは肩を竦める。

「過去形にすると傷つく人がここにも一人いますから」

暗に名指しされたラシルにアクアはすまなそうな顔をして見せた。ラシルは苦笑を滲ませながらもかまわないという風に首を振った。

「では、行ってくる」

イリスが聞いた伝言通り、今日の午後、母の屋敷で父に会う約束になっている。意を決したようにラシルは立ち上がると、再びモスを連れてドアへ向かった。

「絶対成功させてくださいね」

ジンはたまらず声を出した。ラシルは振り返り、分ったとばかりに頷くとそのまま出て行った。握り拳を作りラシルを見送るジンにミルテは呟いた。

「そういえば、傷心者がもう一人、ここにもいましたね……」

祭りの後片付けもすみ、普段どおりになった通りは昨日の華やかさの記憶も手伝って普段以上に寂しくみえる。

ラシルは町外れの母の家へ歩いていたが、後ろを歩くモスに呼び止められた。そして彼の指を指す方向を見る。

「あれが、ジユネルか」

モスが伝えた特徴通り、背の低く黒髪のままらな男が何人かと通りを歩いていて。コヨルテの民も首都インセンに集まって来たのだ。

「悪いが後を付けてもらえるか？」

モスは快く頷くと、何気ない足取りで周りの町並みに溶けていった。

重い足取りで母マリーナの家を訪ねたラシルは、入り口で満面の幸せを湛えた母の笑顔に迎えられた。

「あら、モスは？」

用事ができた事を告げると残念そうな顔をしたが、直ぐに再び笑顔に戻った。

「そうそう、カリンが言っていたのだけれど、言伝を伝えてくれた可愛い男の子は大丈夫だったの？ 途中から気分が悪くなったって言っていたけれど」

イリスの話題が思わぬ所から出て、ラシルは奥歯をかみ締めた。カリンも自分が居らず、偶々イリスがいた時に来なくてもいいではないか。ラシルは彼女も悪気があった訳ではないと言い聞かせ、カリンに当たりそうになる自分を抑えた。

「大丈夫でしたよ」

そう答えたが、全く大丈夫ではない。寧ろ事態は悪い方に行く一方だ。だが、悪戯に母を心配させるのも嫌なので嘘をついた。

「そう、よかったわ」

母はふんわりと微笑み、次に市場で仕入れた魚の話 시작했다。

(母は内容ではなく、ただ、久しぶりに俺と話せるのが楽しいようだな)

ラシルはそうさせてしまった自分を不甲斐なく思った。同時にこれからはなるべく顔を見せるようにしようとも心に誓う。

「さ、入って」

マリーナはラシルの背後に回り、軽く背中を押した。部屋の中には整えられた食器とテーブルクロス、その縁取りと同じ赤い花が上品に飾られている。その奥には十年以上会っていないサンデラ・ク

ロブ、父が座っていた。

「この度の勝利、おめでとうございます」

ラシルは硬い声を隠し切れなかったが、無難にいう事が出来た。

「うむ、すっかり大人になったな」

父の声にもぎこちなさがあった。沈黙が生まれ、慌てて母は場を盛り立てるように明るい声を出した。

「さあさあ、ラシルはこちらに座って頂戴」

サンデラ・クロブと向かい合って座らされたラシルは、気まずさを気づかれない様にあえて堂々と相手を見た。

最後の記憶よりはやはり歳をとったが、まだ体に張りがあり、武人特有の威厳は当時のまま健在している。彼の綺麗な金髪は短く刈り込まれているが、よく見るとちらほら白いものも混じっていた。

サンデラは場数を踏んでいるだけあって揺るぎがない。ラシルは自分の態度が付け焼刃のように思え、居心地が悪く感じた。そして同時に、ラシルを見返す淡い緑の瞳は冷たさも感じるが、聡明さも感じさせるので、母の人目を引く青い瞳ではなく父の瞳の色が似ればよかったのにと子供心に思った事を思い出した。

暫くは母を介しての会話が続いた。だが、話を聞くうちにラシルの中で父の認識が変わり始めた。子供の頃はただ母を捨て、金と権力のある女を選んだ男としてしか見ていなかったが、隣にいる母の満ち足りた表情を見ると、男としてやるべき事をしっかりやってき

たのだと見直し始めたのだ。

(一方、自分は好きな人の一人も幸せにできていない)

どうしてもここは上手く乗り切らなくてはならない。イリスのために。そう思ったのも束の間、思わぬ形で父に先手を取られた。

「財務長官を怒らせた旅の一座はお前が連れてきたそうだな」

ラシルは目を見開き、そして苦笑した。質はどうであれ、今回はじめて父の前で見せた笑顔だった。

「耳が早いですね」

「マグリア・ナリシが方々の諸侯に酷い目にあつたから関わらない方がいいと吹聴し、雇わないようにと言っていた」

ラシルは軽く顔をしかめた。

「マグリア・ナリシ殿から…父上のところにもそう言ってきたのですか？」

「いや、私は彼とあまり接点がないのでな」

サンデラの言葉にラシルはひとまず安堵のため息をついた。そしてここに来る途中で心に浮かんだ事を試してみる事にした。

「私の連れて来た『シリア一座』とは半年以上寝食を共にしましたが、いたって皆善良な人々です。ただ、彼らは財務長官のあまりにも人を差別する言葉に怒ったようです」

「彼にはそういうところが有るらしいな」

首都インセンの内情は地方に出ている時も集めてはいたが、細かい政治上の派閥まではしつかり把握できない。ラシルはサンデラとマグリア・ナリシがあまり懇意でない事を声色から確信した。

「ええ、マグリア・ナリシ殿は特権階級を神に選ばれた者といい、その他は物の数に入らないと考えているようですね」

ラシルはサンデラの顔を見て一呼吸置いた。

「さらに、今回の戦争で亡くなった人はこの世に不要な人だったとまで言ったのを聞いて許せなくなつたと言っていました。彼らは旅の一座ですから色々な地方を周り、戦いの爪あとを見て、実際に傷ついた人々に触れてきています。父上には言いにくい事ですが、特にコヨルテの惨状はとても酷かつた、と」

少し話を誇張してラシルは話した。そしてあえてコヨルテの名を出してみた。

「ああしなければ戦いは長引いただろう」

そう言い、普段の彼ならそこで話を終わらせるのだろうが、彼は今まで崩さなかつた顔をはじめて曇らせた。

「だが、コヨルテに個人的な恨みはまつたくなかつた。もう一度あの頃に帰るのであればもっと穏便な他の方法を考えるだろう。実際問題、彼らの生き残りが起こす反乱を鎮めるのに未だに手を焼いているからな」

酔いが回ったからか、息子の前だからか、ラシルは父の心の内を聞いた気がした。コヨルテへの容赦ない攻めに『凍れる將軍』とも呼ばれるほどだったが、後悔していると聞いてラシルは自分の心が不思議なくらい軽くなったのを感じた。そして聞くべきことは全て聞けた。

「ひとつお願いがあるのですが」

ラシルは居住まいを正す。いよいよ本題を話す時が来た。

「『シリア一座』を神殿の舞手に推薦していただけないでしょうか？ マグリア・ナリシ殿のせいで今ではどこからも相手にされません。聞けば父上は誰も推薦する気はないそうですが、少しでも戦場を指揮した將軍として戦いに敗れたものに哀れみを感じるのであれば、各地を周り、戦争で疲れた人々の心を知り、喜ばしてきた善良な彼らにどうか機会をおあたえください。彼らを救えるのは父上しかいません」

ラシルの願いにサンデラは笑みを浮かべた。

「必死だな。初めは言いにくそうにしていた『父上』も滑らかに出るようになった事だし、流暢な物言いも考え物だ」

声をたてて笑うサンデラをラシルは内心落ち着かなく見た。確かに彼が指摘するように話しすぎたかもしれない。笑いをおさめたサンデラは手元のグラスに手を伸ばし一口酒を含んだ。

「一つ条件がある。それをお前が飲めば願いを聞いてやろう」

「条件、ですか」

ラシルは体を強張らせる。一方のサンデラはグラスを回していた手を止めると母の方を見た。

「インセンにいたる間は必ず母の元で過ごす事だ」

「まあ」

母は両手を胸にあて、嬉しそうにサンデラを見返した。サンデラの計らいにラシルは緊張をとき、素直に微笑んだ。

(今日父に会ってから一度も勝てた気がしない)

対等に張り合えると思っていた事さえ思い上がりだったようだ。

「近いうちに『シリア一座』を屋敷に連れて来てくれ。お前が必死に弁護するくらいだから大丈夫だとは思うが」

ラシルはサンデラから試演の推薦の約束を取り付けた事に安心したが、次にシリアに話さなければならぬ事を思い出し、彼女の反応を考えると気が重くなるのを感じずにはいらなかった。

第20話

ラシルが母の家を出て宿屋へ戻ると、入り口でナナが一人ぼつんと座っているのが見えた。もうシリアたちは宿屋に戻っているらしい。

「部屋に戻らないとシリアが心配するぞ」

ナナとは犬猿の仲だが、放っておくわけにもいかず声をかけた。いつものように睨まれると思ったが、意外にも彼女はラシルの傍らに寄ってきた。

「お話があるの」

ナナは俯いたままラシルの手を引き、エントランスの隅に置かれた椅子にラシルを座らせる。顔を上げたナナの瞳には、今にもこぼれんばかりの涙が浮かんでいた。

「どうした？」

驚いてラシルはナナの涙を拭った。

「イリスを元気にしたいの」

「ナナならできるよ」

だが、ナナは真っ直ぐに伸びた綺麗な髪を横に揺らした。

「私じゃ駄目なの。イリスはラシルが誰よりも好きなんだもの。ラ

シルならイリスを元気にできるよね？」

ラシルはナナの真摯な瞳を受け止めた。イリスの元気のなさは自分のせいであるが、それを治すのも自分の義務だと心新たに誓った。なにせ会えば苦虫を潰したような顔を見せていたこの小さな恋敵が頼ってくれたのだ。

「すぐには無理かもしれないが、必ず元の明るいイリスにするよ」

「約束よ」

ナナは小さな小指を差し出し、ラシルは自分のそれを絡めた。

「少し話がしたいのだが、いいか？」

ラシルはシリアの部屋を叩き、中から承諾の声を得る。すんなり入れてもらえたので、ラシルは軽く拍子抜けした。部屋の中にはシリア一人しかおらず、安心した反面、がっかりしている自分もいる。

少し乱れた髪を撫で付けながら椅子を勧めるシリアは、見たところ落ち着いている。

「一度でも舞いを見せる事が出来ればいいだけなのに、こつも連続して門前払いでは困ってしまうわ」

ラシルが聞く前にシリアは辛そうに現状を話したが、すぐさま笑

顔に変えた。

「けれど、明日もう一度試してみるつもりよ。ここまで来て諦めるわけにはいかないから」

シリアの疲れた笑顔を見返し、ラシルは静かに切り出した。

「あなたやイリスさえ嫌でなければ、俺に一つ貴族の伝手がある」

シリアは一瞬きよんとし、再び期待に満ちた表情で立ち上がった。

「本当に？」

シリアはラシルの想像を裏切る表情をし続ける。実は部屋にも入ってもらえないのではないかと思っていたくらいだ。彼女はぎゅつと胸の小袋を握ると何かしら呟いた。

「嫌なわけじゃない。やはりあなたは神託通り、私達を導いてくれるのね」

滲んだ涙を袖で拭き、安心した表情を見せるシリアに、ラシルは一つの結論に達した。

「いつお会いすればいいのかしら。できれば早いほうがいいのだけれど。あら、まだお名前も伺っていなかったわね」

彼女の笑顔を消し去る言葉をこれから言わなくてはならないと思うとラシルの気は重くなる。だが、言わねばならない。受け入れるのも拒否するのも最後の決定権は彼女が持っており、ラシルは一つ

の選択肢を与えるにすぎない。だが、願わくは受け入れて欲しい。

「サンデラ・クロブだ」

予想通り、シリアの顔から血の気が引いていくのが見て取れた。そしてラシルが思ったとおり、イリスはシリアに自分とサンデラの関係話を話していないことも証明された。

しかしイリスと違い、ぎこちなさは否めないが、シリアは気丈にも微笑んだ。

「どうして、その方とお知り合いなの？」

嘘をつこうかとも思ったが、すぐ明るみに出る事なので素直に答える以外なかった。

「將軍は俺の父親だ」

今度こそ隠す事なくシリアは顔色を無くした。

「ナナの神託の『獅子』はサンデラの紋章だったのね」

誰に言うでもなく、シリアは呟く。

「イリスは知らないわよね？」

搾り出すようなシリアの声にラシルは眉を寄せた。

「もう知っている」

シリアは雷に打たれたかのような驚きの表情を見せたかと思うと、すぐさま椅子に力なく座った。テーブルになだれ込む様に倒れたが、ふと思いついたように顔を上げた。

「あなたはどこまで知っているの？ それともいつから、と聞いた方がいいのかしら？」

「貴方達がどこの誰だかはつきり知ったのは最近だ。その目的も」

「だから私達を將軍に売ろうというわけ」

ラシルの言葉尻に被せるようにシリアは言い捨て、握り拳をおもいきりテーブルに叩きつけた。その拍子にグラスが倒れ、テーブルから床へ赤い葡萄酒が一筋流れ出る。

「そのつもりなら、こんなに正直に話はしないさ」

ラシルは腰の剣をテーブルの上に置き、一歩下がった。

「信じられないのであればそれで俺を好きなようにすればいい。信じようと信じまいとは自由だが、俺はこの半年以上一緒に過ごしてきた、貴女たちが一生懸命生きてきた事を見てきた。それだけに願いを叶えたいと心から思っている」

そついい、ラシルは瞳を閉じた。

暫く沈黙が続く。遠くで食器の触れる甲高い音が鈍く聞こえてきたが、シリアが剣を握る音はまだ聞かれない。

「一つ聞きたいのだけれど」

シリアの静かな声にラシルは瞳を閉じたまま頷いた。

「このことを知っているのは誰？」

「俺の仲間には皆知っている。一座の中でここまで話したのはシリアだけだ。イリスは俺の父がサンデラだと言う事は知ったが、俺がイリス達をコヨルテだと気づいている事は知らないだろう。後はイリスさえ話していなければ誰も知らないはずだ」

「全てを知っているのはあなたの仲間と私と言うことね」

「そうだ」

そこで初めてシリアが剣を手取る金属音が聞かれた。床に響く靴音が徐々に近づき、腕にひんやりとした感覚がした。

「ここであなた一人を殺ったってどうしようもないわ」

ラシルは瞳を開け、傍らに立つシリアを見下ろす。剣は鞘に入っ
たまま、ラシルの腕に押し付けられていた。

「あなたを信じてこれはお返します」

「では、この話は進めていいんだな」

「それはこちらが聞きたいわ。あなたのお父様の立場は悪くなるわよ。推薦されればイリスは絶対誰にも負けないもの」

「俺はただ目的への第一歩を提供しただけだ。そこから先は俺の意

思ではどうにもならないし、手出しできる次元ではないからな」

「神のみぞ知る、というわけね」

「でも、イリスならきつと引き寄せられるだろう。舞の天賦を持っているからな」

イリスを想い、ラシルは心が痛くなる。だが、イリスのためを思えば自分の気持ちを押し付けるわけにもいかない。薄く笑うラシルの手をシリアは優しく取った。シリアの微笑みはやはり血の繋がりがあられるだけにイリスに似ている。

「あなた達と旅ができて心強かったわ。そしてイリスを愛してくれてありがとう。あんなに楽しそうに笑うイリスは久しぶりだったから叔母として嬉しかった。あなたとイリス、いいえ私達との関係はお互いに予期せぬ事だったわ。此処の所イリスが落ち込んでいた理由も納得できた。でもきつとこれでよかったのよ、下手に未練があると可愛そうなもの」

シリアはさらにきつくラシルの手を握った。

「勝手な事を言うようだけれど、あなたもイリスの事は忘れてね。そして私たちが舞手に決まったらどこか遠くへ行って頂戴。あなたたちだけは巻き込みたくないのよ。だから…」

「契約終了か」

「ええ。…ごめんなさいね」

ラシルとシリアは契約が成立した時に交わした契約書を出すと相

手に返した。これで彼女達との関わりは正式に無くなった事となる。

ラシルは父の屋敷に入れるようにしたためた紹介状を渡し、その日のうちに全ての仲間を連れてこの宿屋を引き払った。

第21話

初めて足を踏み入れる王宮はさすがにイリスを圧倒させた。

マグリア・ナリシの屋敷のように金に物を言わせた建て方ではなく、天井から床、調度品までスカトル国のカラーである青を上手に取り込みながら上品にまとめられている。その上、歴史が培った厳かな空気が加わり、ここに来る全ての者は自然と畏敬の念を抱かざるをえない。

イリスの前にはサンデラ・クロブが武人特有の颯爽とした歩調で歩いている。

初めてシリアからサンデラ将軍に推薦を頼むと聞いた時、イリスは彼女の正気を疑った。

「本気？」

「ええ、今のままでは他の貴族は当てにならないから」

イリスは憎しみの表情を露にするとシリアに詰め寄った。

「でも、あいつは皆を死に追いやった張本人じゃないか。奴に頭を下げるくらいなら、もう一度マグリア・ナリシに頭を下げた方がまだマシだ」

「その気持ちは私も同じよ。でも現実的にはもう八方ふさがりなのよ」

宥めるように言うシリアに、イリスは唇をかんだ。

「だってサンデラは…」

ラシルの父親だ。イリスは弾けるようにシリアを見た。

「もしかして、ラシルが言ったの？」

「そうよ、彼はサンデラ将軍が私達を舞手として推薦するよう働きかけてくれたの」

ラシルが全てを知っているとは露ほどにも知らないイリスは、先日のマグリヤ・ナリシに対する失態を悔やんだ。

（サンデラは許せないけれど、彼を巻き込むとラシルが悲しむだろうな。どうせ巻き込むならひとでなしのマグリヤ・ナリシのほうが良かった）

そう思いつつも、一方ではコヨルテの生き残りの人々の前で誓った自分の言葉も思い出していた。

（僕は絶対選ばれないといけない）

そのためには、やはりサンデラ・クロブに頼る他はないようだ。シリアの言うとおり、今のままでは舞手に選ばれるどころか、試演にも出られそうにない。

（じゅめんね、ラシル）

そう心で呟き、シリアに頷いた。

「よく決心してくれたわ」

シリアはイリスを抱きしめると早速部屋から出て行った。今ではもう双子は出て行ってしまい、イリス一人の部屋になっている。急に広く感じられた部屋の隅にあるチェストの引き出しからイリスは紙とインクを取り出し文をしたためた。散々迷い何度も書き直したが、漸く出来上がった手紙を蠟できっちり封をすると、迷わずユリアの所へ向かった。

「お願いがあるんだけど」

二人きりになったことを確かめてからイリスは切り出した。先程書いた手紙をユリアに渡す。彼女とはネリの村でお互いの胸のうちを明かした相手であり、頼むなら彼女以外考えられない。

「これを僕が試演で選ばれたらラシルに渡して欲しい。選ばれれば僕は自由に動けるかどうか分らないから」

「ええ、分ったわ」

ユリアも快く承諾してくれた。そしてイリスは双子が言い置いていった彼らの移転先をユリアに伝えた。

(ここまで来たら選ばれるしかない)

再びサンデラの広い背中を見つめつつ、イリスはゆっくり息をは

いた。

「緊張しているのか？」

サンデラは歩みこそ止めなかったが、イリスを振り向き尋ねた。

「大丈夫です」

彼の優しい声色にはいつも戸惑いを感じる。イリスは頭の中でサンデラを鬼か化け物ように恐ろしい人物として思い描いていた。だが実際会ってみると、親しみやすいとまではいかないまでも誠実で暖かい心の持ち主だった。そして一番厄介な事に雰囲気ガラシルに似ているのだ。彼を見るたびにラシルを思い出してしまう。

連れられて広間に入った途端、聞き覚えのある声があった。

「何故お前がここに」

マグリア・ナリシは敵意を隠さずに言い放ち、大またで猛然と近づいてきた。

（殴られる）

そう直感して、イリスは瞳を閉じた。が、彼の手がイリスに降りてくる事はなかった。

「私の推薦した舞手です。彼に何か？」

マグリア・ナリシとイリスの間にサンデラは立ちはだかり、毅然とした口調で尋ねた。サンデラの態度とは対照的にマグリア・ナリ

シは怯えた顔をみせたが、声色だけはなんとか普通どおりに答えることを成功させた。

「ほう、珍しい。神殿建設に興味どころか反対さえなさっていた將軍とこの場でお会いできるとは」

ようやく自分を取り戻したマグリア・ナリシは薄ら笑いを口元に浮かべた。目礼してサンデラの横を通り過ぎ、イリスの耳元でこっそり言い捨てた。

「たぶらかす技術は舞以上だな」

イリスは顔を上げたが、すでに自分の舞手の肩を抱き連れ歩くマグリア・ナリシの背中しか睨むことが出来なかった。

「気にするな。いくぞ」

サンデラは軽く片眉をあげ、再び歩き出す。

（僕を庇ってくれたんだ）

イリスは後に従いつつも、俯いてしまう。

（もっと酷い人だったらよかったのに）

イリスはサンデラに対して気持ちの整理が出来なくなり、人知れず途方にくれていた。

各諸侯が推薦した舞手は男女合わせて十人。今日この中から一人、神殿の神おろしの舞手として選り出されるはずだ。

（今日で全てが決まるんだ）

他の舞手も同じ事を考えているのだろう。彼らもそれぞれに各一座の期待を担ってこの場に立っているのだ。十人の周りには重苦しい緊張感が張り詰めている。この試演を娯楽の一つとしか見ていない諸侯や、同じくただ楽しもうと集まった諸侯の着飾った妻たちの緊張感のない笑い声とは全く対照的な風景だ。

温度差の違う空気が一変し、静寂が生まれた。スカトル王カルルト・キヤラが二人の部下を引き連れて入って来たからだ。

皆、一斉に頭をさげ、イリスも同じく頭をさげた。

「ご苦労、直れ」

初めて聞くカルルト王の声は命令口調でも低く響く心地よいものだった。顔を上げることを許され、見た彼は三十代半ばのまだ澁刺とした青年で、日焼けした小麦色の肌が整った顔立ちをいつそう引き立てていた。だが、イリスは奥歯を密かにかみ締めた。

（元はと言えば、この人が將軍に命じてコヨルテを襲わせたんだ）

サンデラを憎みきれなくなっていたイリスは矛先を王に転嫁しはじめていた。

カルルトが連れてきた部下の一人の手には黒塗りの箱があり、各諸侯は一人一人手をつたひいて紙を一枚とりだした。中に数字が書

いてあり、それが今回の舞う順番となる。

(三番目か)

一番以外は部屋の隅へ移動する。イリスは肩を叩かれ、驚いて後ろを振り返った。

「よ、また俺に負けにきたね」

見覚えのある顔はカラムスだった。華やかで自信家なところは変わらない。

「お前は三番目？　俺は四番目だ。前座としてがんばってくれよな」

だが、今のイリスには落ち着いて聞き流せる余裕があった。あの頃の自分とはもう違う。それに、ここに立っていられるのはラシルをはじめ色々な人のおかげであり、今は誰かと比べるのではなく自分自身の舞をやるだけだ。

「お互いがんばろうね」

穏やかな笑顔まで浮かべるイリスの態度に、カラムスは怪訝そうな顔を見せた。

この場にいる者は流石に才能のあるものばかりが集められているだけあり、一番目の舞手から諸侯やその妻たちの感嘆の声を引き出していた。二番目の舞手は緊張感からか、ステップをほんの少し間違えてしまった。普段なら許される範囲でも、ここでは命取りに

なる。彼女もそれを分かっている、終わった途端悔し涙を流した。

「では、三番目。サンデラ・クロブ將軍推挙者」

イリスは前に進み出る。見物の諸侯達はサンデラ將軍の名を聞き、ざわめきあう。マグリア・ナリシも言っていたが、よほど彼がこの場にいるのが不釣合いな事だと身にしみて分った。

(きつとラシルが説得してくれたんだ)

そう思い、イリスはサンデラの顔を見た。イリスの考えは彼に届いていないと思うが、彼は軽く頷いた。それはイリスに、傍にラシルがいるような感覚に陥らせた。いつも舞いを舞う前に客席の一番後ろでイリスを見守ってくれていたあの眼差しを心に浮かべる。そうすると不思議と自分の背中に金の羽が生えてくるのだ。

(そう、この感覚…！)

曲が始まると同時にイリスは全てを込めると同時に自分を解き放つ。周りのざわめきは消えうせ、一体となるべく溶け合った。

イリスは静かに終わりを迎える。舞い終わっても誰も声をあげるものはいない。

「これは…素晴らしい」

肘掛を掴みつつ食い入るように見ていたカルート王の呟きに隣に控えていた部下が我に返り、拍手をし始めた。それを皮切りに盛大な拍手と歓声が広いホールを埋めた。鳴り止まない拍手に困り果てた進行役は、暫くあきらめて諸侯の昂奮が収まるまで待つしかなか

った。

イリスはまだ意識が自分に戻ってこられず、礼をするとふらふらと元いた場所に戻っていった。イリスが近づくと、他の舞手が啞然としつつも後ずさる。その様子をイリスはまだぼうつとした心持で眺めた。

「では、続いて四番目。シプレ・シガー大臣の推薦者、前へ」

やっと自分の職務がまっとう出来ると進行役が安心したのも束の間、誰も前に進み出てこない。

「早く前へ」

呼び出しに応じてカラムスは前に出たが、途中で歩くのを止めてしまった。

「あんな舞を見せられて、それでも舞う気になる人がいるなら見てみたいね」

カラムスは投げやりな笑みを浮かべて言った。その意見に逆らう舞手は一人もいない。観客の諸侯達からも反論は起きなかったが、マグリア・ナリシだけは納得できなかったらしい。

「こら、やる前から諦めるヤツがあるか！」

このままイリスに決まってしまう事を恐れた彼は、自分の連れてきた舞手に無理やり舞う事を強制した。権力者に言われ、断りきれない舞手は仕方なく舞い始めた。

「可哀想に」

誰からともなく声が漏れる。まだイリスの舞の余波が残っている心に彼の入る隙間はない。むしろ色あせて見えた。

「満場一致でサンデラ將軍の推薦する舞手で決まりとしよう」

カルートの鶴の一声で、予定した時間を大幅に短縮して試演は幕を閉じることとなった。

（僕で決まったんだ）

自信がなかったわけではないが、安心感と一つ荷物を下ろした脱力感がイリスを襲った。

「もう一度見せていただきたいわ」

肩を出し、豊満な胸を強調した女性が声を上げた。続けて同じような声が幾つも聞かれたが、カルート王は立ち上がると一瞥でそれらの声を一蹴した。

「大儀。後の事はシプレの指示に従うように」

皆頭を下げる中、カルート王は青いマントを翻し、連れてきた部下を引き連れて部屋から去っていった。

イリスは王がいなくなった途端、立っていられなくなり倒れそうになる。だが、その前に力強い腕に捕まれふらつくだけで済んだ。

「大丈夫か？」

見上げると、ラシル、ではなくサンデラ將軍だった。

(コヨルテの仲間の為にも、もう後には引けないんだ…)

イリスは自分に言い聞かせるように、心の中で何度も同じ事を呟いた。

「すみません。大丈夫です」

そう答えたものの、サンデラの心配そうな瞳を直視することはどうしても出来なかった。

第22話

「決まったよ」

息咳き込んでメノウは部屋に転がり込むように入ってきた。ジンは落ち付かなげにおろおろと椅子から立ち上がる。

「イリスだよね？」

「当然だろ」

メノウはジンがとてつもなく場違いな質問をしたかのように呆れた声で答えた。

「あと、珍しいお客さんが来ているんだけど。ユリア。それも一人で」

ミルテはラシルの顔を見ると、口端を上げて言った。

「一つ手間が省けましたね」

メノウがドアの方を顎でしゃくると、アクアに連れられたユリアが心もとなげに入ってきた。ラシルたちを見ると清楚に微笑む。

「綺麗なお屋敷ね」

「まあね」

自分の屋敷でもないのにメノウは誇らしげに答えた。シリアとの

契約が切れてから、父サンデラとの約束もあり、ラシルは母の家へ仲間を連れて来た。世話好きな母は大喜びで彼らを迎え入れ、特に稀に見るほどそっくりなアクアとメノウの双子を気に入り、おそろいの洋服を縫っては彼らに着せて楽しんでる。二人もすっかり母に懐いてしまい、我が物顔で屋敷の中を動き回っていた。

「よくここが分ったな」

ラシルの問いにユリアは表情を引き締め、ポケットから手紙を取り出した。

「イリスからよ」

ユリアの言葉にラシルの動きが止まる。まさかイリスから手紙が来るとは思ってもみなかったのだ。

「早く受け取ったらどうですか？」

ミルテはラシルを急かせた。ラシルは無言で頷くとユリアから手紙を受け取り、封を開けた。

明らかにイリスの筆跡で、紙の中程に短い文章が書かれていた。

今からインセンを出て、できるだけ遠くへ行ってください。そして暫く戻ってこないで

「なんて書いてあるのさ？」

紙面を見たまま何も言わないラシルにメノウは焦れた声を上げた。

「出来れば私にも教えてください」

ユリアも一歩前に進み出てラシルを見つめた。ラシルはミルテに手紙を渡し、ミルテが文面を読み上げた。

「なんだ、全然普通に人前で読める内容でしたね。てっきり恋文だと思ったのに、期待して損しました」

からかうミルテをユリアは怒った。

「冗談にしないで、イリスは本気よ。お願いだからイリスの言う通りにして」

ラシルは宥めるようにユリアに言った。

「すまない。彼も悪気はないんだ」

ミルテは肩をすくめ、軽く頭を下げた。

「だが、俺たちはインセンを出る気はない」

「どうして？」

ユリアは驚いて周りを見回したが、皆ラシルの言葉に頷くだけだった。

「ユリアこそ、なぜ俺たちがインセンを出るようにイリスが書いてよこしたのか理由が説明できるか？」

「えっ……」

ラシルの指摘にユリアは狼狽を隠しきれない様子で目を泳がせた。

「俺たちはね、ユリアと同じ気持ちなんだよ」

アクアはそつとユリアの腕を取ると近くの椅子に座らせた。アクアの言葉にユリアはますます混乱した様だ。彼女は片手を緩やかにうねる髪の中に突っ込んだ。

「意味が分らないわ」

「だから、イリスを助けたいって事だよ。俺もイリスに幸せになって欲しいもん」

メノウはにっこり笑って見せた。

「あなた達……」

ようやく事情を飲み込めたユリアは、知らない間に囲まれていた面々を見上げた。

「察しの通り。後はユリアの気持ち次第だ」

ラシルは真摯な瞳をユリアに投げかけた。

ユリアは暫く不安げにラシルの顔を眺めていたが、ぎゅっと一度

瞳を閉じた。そして次に開いた時はもう迷いはなかった。

「やるわ。私は何をすればいいの？」

いつもふんわりとして、ともすれば周りの意見に流されがちだった彼女の瞳に意思が宿るのをラシルは頼もしく眺めた。双子もジーンも歓喜の声を上げる。

「大前提として、シリアとイリスには内緒だからね」

双子は先陣切って説明を始めたが、細部になると説明を放棄し、ラシルにその役目を譲った。話を進めるにつれ、ユリアの顔色が失われる。

「出来るかしら、そんな事」

話を聞き終わったユリアはポツリとそう呟いた。再び不安が頭を擡げ始めたらしい。ラシルはユリアの前に跪いて視線を合わせた。

「是非やってもらいたい」

「あなた、袋叩きにあうわよ」

ユリアは辛そうに眉を寄せた。

「もしそうなくても、イリスを救う為なら構わない」

「サンデラの息子であるあなたが来るだけでも危ないのに、…無謀
よ」

ユリアは最後まで抵抗を試みたが、最後はラシルに押し切られる形となった。

「ありがとう」

ラシルの笑顔にユリアは力なく首を振った。

「こんな事、口止めされなくてもシリアやイリスに絶対言えないわ」

ユリアを口説き落としてから数日後、瀟洒なレンガ造りの酒場の前でラシルはミルテと立っていた。

「こないと話しになりませんね。これではここ数日のラシルの努力が無駄になります」

ミルテは腕を組みなおした。

ユリアに今日、コヨルテのリーダー格にあたる人物をここへ連れて来て貰う事になっている。

お互いが初めて会う約束の場所に選ばれたのはインセンで、二を争う人気のある酒場だった。客が各自楽しんでいるので誰も話の内容に気を止めないし、人目がある分お互いの身を守るためにも丁度いい。

「連れてきたわよ」

ユリアの後ろに付いて時間より少し遅れて現れたのはコヨルテの生き残りを束ねるジユネルと、多分用心棒として連れてきたのだから、短く茶色の髪を刈り込み鍛えられた体躯をもつ若い男、そしてユリアの兄バジの三人だった。

「よく来てくださいました」

ラシルの挨拶にも無言の三人をつれて店内へ入る。人気があるだけに全ての席は埋まっていたが、奥の個室から人が出ていき、その部屋に落ち着く事となった。そこは三方を壁に囲まれているが、ホールから入り口を通し少し中が伺えるので、全くの密室ではない。

「いいところが空いたわね」

ユリアは嬉しそうに言ったが、その部屋から出てきた客が場所を確保するために仕込まれたラシルの母の屋敷の使用人であることを知っているのはラシルとミルテだけだった。

程なく店員が注文も取らずに人数分のジョッキとつまみを抱えて持ってくる。麦芽酒が有名な店なので、有無を言わさぬこの形式でも文句をいう客はいないのだろう。

「ちゃんと楽しそうに乾杯しないと怪しまれるわよ」

ユリアの忠告に従い、ぎこちないながらもお互いのジョッキをぶつけ合う。ユリアはにっこり微笑み、ミルテは周りとその場の不釣り合いな様子が可笑しいらしく、笑いを堪えるのに苦慮していた。

まだお互い腹の探りあいということもあり、当然だが全く話が弾

まないのでユリアが率先してラシル達との旅の話をはじめた。初めは静かに聴いていたバジだったが、旅の様子を楽しそうに話すユリアに苛立ち、途中で遮った。

「いくら共に旅をしてきたからと言って、おいそれ信用などできない。ユリアはいったいどつちの味方なんだ」

「どちらも大切な仲間よ！」

兄に、いや、ジュネルにもこの集まりの真意が伝わっていないことにユリアは悲しいやら悔しいやらで涙をじわりと滲ませた。

「泣く事ないだろ」

バジは思わぬ妹の涙に戸惑い、ジュネルは居心地悪く身をよじりながら初めて口を開いた。

「その、本気でイリスを救えると思うのか？」

「あの神殿でイリスが行う事を思えば、彼がどうなるか察しが付くでしょう。あなたはそのまま見捨てるつもりだったのですか？」

ラシルは少し挑発するように言った。途端にジュネルは気色ばみ顔を上気させる。

「そんなわけないだろう！ 仲間を見捨てるなど考えにない。ただ、シリア侍従長がどうしてもやりたいたいとごり押ししたのだ。当のイリスも何もするなというし、それに」

言葉を切り、ジュネルはユリアを見た。

「ナナ様の神託にも成功すると出たのであろう?」

「そうよ、この耳でしっかり聞いたわ。『東より来たりし金色の獅子に身をゆだねよ、されば願い叶わん』。金色の獅子は絶対ラシルのことよ。彼らのおかげでインセンまで何事もなくこられたし、現にイリスも舞手に選ばれたのだから」

涙を拭いながら言うユリアにジュネルは満足げに頷いた。

「子供でもナナ様は高貴な血を受け継ぐ歴とした巫女だ。間違いはない」

「だから、放っておいてもイリスは助かると思っているわけですか」

ラシルは言葉に少し笑いを含めた。

「何もしないとはいっていない!」

ユリアは心配げにさらに顔を赤くするジュネルと彼から視線を外さないラシルを交互に見た。

「偉そうに言うがお前は何かができる?」

バジは負けずにラシルを睨み返す。ピン、と張り詰めた空気の中、ラシルは少し間を置き、静かに答えた。

「私達は神殿の内部、行事の進行内容、地理、当日の街の警備の配備などを把握できます。ただ、当日実行に移すための人数が足りない。そこで思いついたのは利害が一致しているあなた方だった、と

「いうわけです」

「…なるほど」

ジュネルは顎鬚を指で弄りながら思案を始めた。インセンの事情に明るくないコヨルテ出身者だけでは内情を知るのに限界がある。下手に動いては抜け目のないサンデラ將軍に目をつけられてしまうだろう。

「お前の父親に悟られず調べる事などできるのか？」

ふと、思いついたように顔を上げ、ジュネルは尋ねた。

（食いついてきた）

ラシルは内心ほくそ笑む。ミルテは反対に表情を引き締めその場を立った。

「無理でしょうね」

「なんと？」

さらりと言ったラシルの言葉を聞き違いと思い、ジュネルは聞きなおした。

「人前で自分の親を誉めるのもなんですが、武人としては優秀です。それはあなた達の方がご存知かもしれませんが、息子とてコヨルテと内通していると知れば容赦しないでしょう。しかし、同時に彼はコヨルテの鎮圧に手を焼き、それに飽き果てているのです」

話が見えなくなったジユネルはバジの顔をちらりと見た。バジも答えが見つけれられないように首をかしげるだけだった。ラシルは二人の顔を見て気持ちを和ませるように微笑んだ。

「生き延びたいコヨルテと鎮圧に疲れた將軍。視点を変えれば共通点も見えてくるのではないかと思いましたがね」

ラシルの話が終ると、タイミングよくミルテが一人の男を連れてきた。頭からつま先まですっぽりと布を被っているので顔は見えないが、がっちりした体型は見取れる。

「それはどういふつもりだ？」

ジユネルが連れてきた茶髪の鍛えられた男は立ち上がり、剣に手をかける。男の剣呑な雰囲気はミルテは得意な笑顔で打ち壊した。

「そちらが三人でいらしたので、公平にこちらも同じ数にしようと思いましたがね」

同時にミルテが連れてきた男は頭の布を後ろへやる。バジと体格のいい若い男はきよとんとしたが、ジユネルだけは激しく血相を変え、立ち上がった。

「サンデラ・クロブ…」

ジユネルの掠れた声に残りの二人の男も目を剥き、ただただサンデラの顔を凝視し続けた。

「人を介すより本人同士が会う方がなにより正確でしょう」

ラシルはここ連日の説得に応じて来てくれた父に感謝し、さらに気持ちを引き締めた。

「さあ、座ってください。前座はおわり、これからが本番なので
から」

第23話

イリスはベッドの中で朝の爽やかな光に包まれつつ思いきり伸びをして、幸せな気分浸っていた。

「いい夢だったな……」

部屋にはイリス一人しかいないので、その呟きに答えるものはない。

偶さか見る夢は、神おろしに失敗する場面をみせてイリスを苦しめる日もあるが、母やシリア、アクアやメノウなど今では自由に会えない仲間たちとの再会も与えてくれる。昨晩は夢を司る神がご機嫌だったようで、イリスが会いたくてやまない人をイリスに会わせてくれた。現実ではもう叶わないが、夢の中では好きなだけ触れられ甘えられる。

(ラシル)

もう一度夢を思い返し、ケットをぎゅっと抱きしめたが、もう直ぐ朝食の時間を告げるイリスの世話係を兼ねた監視がやってくるので仕方なく起きる事にした。

裸足で降りた石の床はもう前ほど冷たくはない。試演の日以来、イリスは王宮の一角にあるここの部屋に通され、一冬を過ごしたのだ。

ノックの音が響き、イリスは顔を上げた。

「おはようございます、ミオシスさん」

「おはよう、イリス。あら、まだ起きたばかりかしら？」

ミオシスは笑いながらまだ寝癖の付いたイリスの髪を手串でいった。彼女はイリスの監視役兼世話係のうちの一人で、本来は王宮内にある神殿で雑用をこなしていると言う。身長が高く肩幅がしっかりしており力強そうな反面、繊細な心遣いを多分に見せる器用な部分も持ち合わせていた。

イリスにとってミオシスが世話役の中で一番気の合う話し相手であり、彼女と仲がよくなるにつれて色々な事を教えて貰った。神おろしの儀式ではスカトル国の最高神であるイソアミルの舞を舞わなくてはならず、イリスに教えるため王宮の神官がやって来た。だが、イリスはその日一日で覚えてしまい、何回やっても完璧に舞って見せるので、毎日続くはずだった練習は週一回に変更された。それもただ覚えているかの確認だけなので短時間で済んでしまう。

「神官はあなたのことを神童って言うていたわ。恐るべき才能だつて」

ミオシスは感嘆の面持ちでいい、さらにイリスの知らなかった事を教えてくれた。

「試演だって、本当は初めの日に半分の五人に絞って、また半月後に三人、また半月後に最終的に一人にしようとしていたのを初日で決めちゃつくらいだから当然よね」

春の祭りに合わせた神殿の神おろしにしては試演の時期が早いと思っていた謎が解けた。おかげでイリスはほぼ三月という長い間、

神殿に半ば閉じ込められるように過ごさねばならなかった。だが、初めは制限されていたイリスの行動も大人しく言うことを聞いていた事もあり、徐々に緩められ、今では庭や図書室などある程度の範囲を動けるようになっていた。

(まるで羽を切られた鳥のようだ)

本当の意味での自由はない。仕方なく練習のない日などは庭で日向ぼっこをしたり本を読んだりと暇な時間を過ごしていた。

(でも今日は暇つぶしする必要がないんだ)

イリスは自然と笑みを浮かべた。月に二度だけ面会を許されており、今まではシリア一人しか許されなかったが、本番を十日後に控えた今日はイリスの願いが聞き届けられ、仲間全員と会うことが許されたのだ。

長く感じられた再会の時間までを何とかやり過ごし、ようやく待ちに待った時間を迎えた。

「イリス！」

一番に走り寄ってきたのはナナだった。だが、いつものように飛びつかず、手前で止まると照れたように微笑んで見せた。

「ちょっと背が伸びたみたいだね」

毎日見ていると気づかないが、三月も会わないと変化が著しく見て取れる。飛びつかなかったのはナナが見ない内に少し大人になったのだろうとイリスは一抹の寂しさを感じた。

「元気そうじゃなかったわ」

シリアはイリスをぎゅっと抱きしめた。

「うん。そうそう、今日の夜から潔斎が始まるよ。それから…」

イリスはシリアに近況報告を始めた。行動が限られているイリスは大して話す事もなく、前回会った時と代わり映えのない内容だったが、シリアはイリスの発せられる言葉をすべて大事な事柄のように一言一句かみ締めて聞いてくれた。

「ユリアもチファもコリーもお久しぶり。元気だった？」

三人は揃って頷いた。確かに三人とも活き活きとして、自信に溢れているように見える。

「三人とナナは私と別れてジュネルさんに預けたの」

シリアはまだイリスを離さないまま言った。イリスにはこの中で誰よりも気丈なはずのシリアが一番弱々しく見えた。イリスが手放すとシリアは倒れてしまいそうだ。

「そうだ、ナナに渡すものがあるんだ」

イリスはシリアからそつと離れ、引き出しにしまっておいた小ぶりの箱をナナの目の前に差し出した。

「あけていい？」

思いがけない贈り物に目を輝かせながらナナは蓋を開けた。中にはピンクの石で模られた美しい花柄の櫛が入っている。イリスがナナのためにインセンの店で探したものだ。

「すごく綺麗。ありがとう！」

ナナは昔のようにイリスに飛びつき、感謝の意を述べた。

(こんなに喜んでくれてよかったな)

イリスもナナの体をしっかりと抱き返した。こうするのもきつと最後なのだろう。

「今度の神殿での舞が終わったお祝いにつけるから見てね」

無邪気に答えるナナにイリスの心は痛み、シリアを見上げた。シリアも眉を寄せながら首を横に振る。ナナは神おろしの舞が終わった後、またイリスと会えると思っているのだ。

「うん。楽しみにしているよ。大切にしてね。でも今のナナには少し大人っぽいかな」

冗談めかしてイリスは笑った。監視の女官の手前、ということもあるが、一番は喜んでいるナナに事実を告げて悲しませたくなかった。

「そんなことないよ」

「そうだね、ごめん」

膨れるナナの頬をつついてイリスは再び笑った。

「イリスは何も心配しないでしっかり役目をはたして頂戴！」

「そう、大丈夫だから！」

コリーとチファは今までになく力強い応援をくれた。あまりの意気込みにイリスは違和感を覚えつつも微笑んだ。

「う、うん。ありがとう。がんばるよ……」

本当はユリアに聞きたいことがあったのだが、シリア達の手前なかなかその機会は訪れなかった。

「時間です」

シリア達をこの部屋まで連れてきた女官の無常な声が響く。全ての仲間と抱き合い、シリアを先頭に皆名残惜しそうに出て行く。その時最後尾に行くユリアをやっと捕まえる事ができた。

「ねえ、手紙渡してくれた？」

小声で聞くイリスにユリアは微笑んで頷いた。

「よかった」

これでラシルを巻き込まなくてすむ。安堵のため息を付いたのも束の間、ユリアは思いがけない事を言った。

「でもラシルはまだインセンにいるわ。彼があなたを置いていける

わけないじゃない」

「うそ…」

イリスは驚きのあまり思考が停止してしまったように思った。

(どろして)

急に不安にさいなまれたイリスは再び口を開こうとしたが、ユリアは女官にせかされ、小走りで部屋を出て行ってしまふ。

(そんな…ラシル！)

異教の舞を舞うイリスをインセンに連れてきて、そのうえサンデラ將軍に推挙までした彼は、いくらサンデラ將軍の息子とはいえ許されないだろう。

その後のイリスは上の空で、潔斎のためにこれから神おろしの日まで毎日入ることとなる沐浴場の水の冷たささえ全く感じなかった。

第24話

ユリアの話によると、今日王宮で会ったイリスは少し痩せたものの元氣そうだったらしい。

ラシルはベッドに横たわり、天蓋からベッドを覆うように垂らされた薄い幕越しに銀色に輝く鈍い月を見た。屋敷のすべての部屋は母の趣味がふんだんに反映されている。天井から吊るされたこの天蓋と天幕もその一つだった。

偶さか揺れる幕に月の光も揺れる。今晚は春にしては暖かい夜で、風を入れるため窓を少しあけておいたのだ。風は優しい愛撫のごとく、ゆっくり幕を撫でていく。

(イリスも昔、風になりたいといていたな)

今ごろ彼は何をしているだろうか。もう潔斎を終え、眠りについていられるだろうか。

「イリス…」

ラシルは今まで我慢してきた言葉を呟いた。

イリスを救うための計画はいろいろあったものの順調に進み、大詰めをむかえている。途中から仲間に加わったチファとコリーは張り切り、しかも空回り気味に頑張るので、こちらがハラハラする程だった。

「イリスを逃がすには困がいた方が敵の目を欺けていいと思うの」

チファアの提案に一同賛成し、アクアとメノウに白羽の矢が立った。だが、二人は露骨に嫌な顔をした。

「俺達がすんの？ やだよ。ひたすら逃げるのじゃくて、もっとカツコイイ役がしたい」

「背格好が同じなのはあんた達くらいじゃない。しかも二人も。それに、みんなあんた達をイリスだと思って追いかけてくるのよ。これ以上目立つ役割はないわ」

チファアも負けずに言った。その言葉に乗り気になった二人は承諾したが、コリーの言葉を聞くや、すぐさま後悔した。

「イリスと同じ衣装を作つてあげるし、ちゃんとイリスに見えるよう可愛く化粧してあげるからね。試しに今やってみようか？」

「やっぱ、やめた」

話の流れにあわてて逃げ出す二人は、別の話し合いをしていたラシルのうしろへ逃げ込んできた。

「捕まえて！」

チファアの叫びにラシルはとりあえず二人の首根っこを掴んだ。

「離せよ！」

「何をした？」

もがく二人にラシルは尋ねた。

「したんじゃない。俺達がされるんだ」

「ありがとう」

にっこり笑うチファの後ろには、両手にしっかりと化粧道具を抱えたコリーが立っていた。

ラシルはやつと夢が叶うとばかりに口端を上げたコリーの笑みが印象的だったのを思い出した。彼女は前々から双子に化粧を施すのが夢だったのだから無理もない。結局双子は彼女達に部屋の奥へ連れて行かれ、散々顔に塗りたくられ同時に説得され、渋々その囚役を引き受けた。その二人も今は『光玉』と名付けた、彼ら曰く新兵器の仕上げに余念がない。

(それぞれに協力してくれているんだな)

ラシルも出来立ての神殿の内部を見てきた。これは父の力を借りざるを得なかったが、これでぐつと計画も具体性を帯びてきたと言っても良かった。

一人ではさすがに神おろし前の神殿には入れてもらえないので、父と共に神殿を訪れた。父と二人での久しぶりの外出にくすぐったさを覚えたが、今ではもう前程のわだかまりは感じなかった。

神殿内の見学を装って辺りの様子、通路の配置などを頭に入れていた時、頭上から懐かしい声が響いた。

「ラシルではないか？」

見上げると二階のバルコニーから小人数の部下を引き連れたカル
ートが立っていた。

「カルート…王」

まさかここで王に会うと思っていたいなかったラシルは慌てて跪き、
頭を下げた。隣でも同様にサンデラが腰を折る。

（先日コヨルテの代表と逢わせた意趣返しといったところか）

ちらりと横目で見たサンデラのその口端には少しだが、隠し切れ
ない笑みが浮かんでいた。

二階から降りてきたカルートはラシルの前に立つと親しげに肩を
叩く。

「十年以上の歳月はラシルをすっかり少年から大人に変えてしまっ
たな。そしてますます將軍に似てきたよ」

皇太子時代の気安さで声をかけてくれたカルートがラシルには嬉
しかった。

「カルート様も立派な王になられました。地方でも噂はよく耳にし
ました」

カルートは軽やかに笑う。

「地方を廻ったのであれば、いい噂ばかりではなからうな。將軍の
元を飛び出してからは傭兵として身を立っていたとか」

王はどこまで知っているのだろうか？ ラシルは警戒しながらも顔に出さず頷いた。

「はい。しかし新しい神殿の噂を耳にして、是非とも一目みたいと思ひ、帰ってきました」

「いい父親を演じたいばかりにシプレが張り切りおって」

カルトは神話の一説が彫刻された石の壁を二、三度叩いた。

神殿は街の中心から少し外れた場所に建てられている。大きさも小ぶりだが、その分細部にまで至る所に装飾が施されており、神殿に相応しい重厚さがあつた。

「でもこの神殿に見合う良い舞手が見つかったよ。将軍のおかげでね」

ラシルは鼓動が速くなるのを感じた。イリスのことだ。

「聞けば一日で決まっちゃったとか」

「ああ、他の者に舞わせるのが可哀想になるくらい圧巻だったからな、やめさせた。あれは奇跡の舞手だ。今までインセンで知られていなかったのが不思議なくらいだ」

カルトのもっともな指摘はラシルをどきつとさせたが、イリスが誉められるのを聞くのは悪くない。ラシルは笑顔にならないよう努めなくてはならなかった。

「ラシルはこれからずっとインセンにいるのか？」

話題は変わり、ラシルの今後の身の上に移る。

「今は母の所に身を寄せています。その後の事はまだ、分りません」

神おろしの後は十中八九いないとは思うが、答えを曖昧にした。はつきりとは答えられないが、ラシルはカルートに嘘をつきたくなかったのだ。

「それでは、神おろしの儀式で今はいそがしいが、終わり落ち着き次第私の元で仕えないか？ 周りは年寄りばかりでな、病気の話にはついていけぬ」

笑うカルートの思わぬ申し出にラシルは驚き、再び膝を折った。

「大変ありがたい申し出ではありますが、私は今や一介の傭兵で、大切な仲間も出来ました。それに、傭兵家業の方が宮廷仕えよりも性にあっているのです。若者をお望みでしたら私ではなく、私の弟をお役立てください」

ラシルにはサンデラが本妻に生ませた腹違いの弟がいる。兄弟でも母方の権力の強い方が家を継ぐ事が世の習いであり、それに則るならば弟がカルート王の元で働くのが良い。昔は反発したが、現在では気楽な今の立場が気にいっている。

「メントルか。悪くないが、彼は若すぎるしあまり外に出たがらないのだ。私としては一緒に遠駆けをしてくれる相手が欲しいのだが」

ラシルは答えようがなく、ただ頭を下げた。

「考えておいてくれ。神おろしの儀式が済んだらまた会おう。今日はゆっくり神殿内を楽しんでいけ」

そう言っつてカルートは部下を引き連れ、颯爽とその場を立ち去っていったのである。

(神おろしの儀式が終つたら…)

思い出から戻ってきたラシルは頭の後ろに両腕をまわした。思い描くように上手く事が運ぶであろうか？ 人前では不安な顔を見せられない分、寝る前、一人になると嫌な想像ばかりしてしまう。

悪い考えを振り切ろうと目をぎゅっと瞑った時、天幕が大きくゆれ、ラシルの肌を撫でた。続いて窓枠のきしむ音がする。

(誰だ?)

枕元においてある剣に手を伸ばしたが、風と共に漂う香りにラシルの動きは止まった。

庭に咲く白い花の香りと似ているが、春先とはいえまだ咲いていない。ラシルの記憶の中でその香りを漂わせるものはあと一つしかなかった。

「イリス…か？」

月の光を浴びてそっと立つイリスの姿はおぼろげで儂く、そして夢のようだった。

(夢かもしれない)

確認したくてラシルは幕の外に出ようとした。

「駄目、出ないで」

イリスは歩みを止めたが、ラシルがイリスの言葉に従うと分ると再び近づいてきた。

「今日から潔斎が始まったんだ。本当は宮殿から出る事も許されていないんだけどね」

「では、どうしてここに？」

「聞きたいのはこっちだよ。ユリアに渡した手紙を読んだのなら、どうしてまだインセンにいるんだよ！」

気持ちに任せ、イリスは幕を掴んで叫んだ。

ラシルの答えは考えるまでもなく決まっている。

「俺はずっとイリスと共にいたいんだ」

言葉を切り、ふわり、とラシルは笑った。

「会いに来てくれて、そんなに嫌われていない事も分って安心した」

思い切ってラシルはイリスの手を幕越しに握った。体を硬くする振動は伝わったが、それ以上拒否されることはなかった。

「お願いだから、何も聞かずにインセンを出るって言ってよ」

震えた口調で哀願するイリスだが、承諾するまで引かない意思も伝わった。

「わかった、出るよ」

ラシルが答えると、やっと安心したようにイリスは微笑んだ。羽のように柔らかく、軽やかに。

「よかった。本当はあんな別れ方して後悔してたんだ。ラシルは何も悪くないのにな。ごめんね。今回舞手に選ばれたのもラシルのおかげだし、いろいろ迷惑かけちゃった」

ラシルはイリスが最後の別れの挨拶をしていることに心が痛くなる。

「迷惑とは一度も思ってた事がない。これきり会えなくなるわけじゃないし、どうした？」

ラシルは再び力が漲るのを感じた。絶対成功させてイリスを救う。一方のイリスは暫く沈黙をした。

「…そうだね、変だよ、僕。でも、本当にラシルと旅して楽しかったし、それに」

イリスは涙をやり過ぎ、俯いてぼつりと呟く。

「逢えてよかった」

夢げで頼りないイリスの風情に思わずラシルは掴んでいるイリスの手の甲に、幕越しだが、口付けた。

「ラシル！」

驚いたようにイリスは顔を上げたが、直ぐに仕方がないように微笑んだ。

「僕、今、潔斎中なんだけど」

「これくらいなら神も許してくれるさ」

「そうだといけど」

本当にしたい事に比べれば全く可愛らしいものだ。

「じゃあ、もう僕戻るね」

名残惜しそうにイリスは立ち上がる。

「イリス」

「…さよなら、ラシル」

顔に笑みを浮かべ、ラシルを暫く見つめた後、イリスは振り返ることなく元来た窓から軽やかに出て行った。

再び一人になったラシルは、急に今までの出来事が夢だったのではないかと思いはじめた。自分がイリスを想いすぎての幻覚だったのではないかと。

天幕の隙間をすり抜け、ラシルはイリスがいた場所に触れてみた。少し温かかったが、それは直ぐに消えていく。だが、イリスの残り香は消えずにラシルを包む。

「イリス…」

ラシルは呟くと彼が出て行った窓へ向かった。その窓枠には百合の花が精巧に模られた轡が置かれており、月明かりを浴びて鈍い光を放っていた。

第25話

今日で最後の潔斎が終了した。

イリスは水気を取るために用意された布で体を拭うと、真新しい服に袖を通した。今日の舞台衣装である。絹でできた真っ白な生地、襟首には本物の金糸で絡まる蔦が刺繍されている。体に吸い付くような感触が心地よい。

今のイリスは不思議なほど心穏やかだった。

(最後にラシルに謝れてよかった)

彼はまた会えると思っているようだが、今生では無理だろう。彼もインセンを出ると約束してくれたし、今では憂いは何もない。

「済んだのなら此方へ」

「はい」

神官に連れられて、イリスはひんやりした石の廊下を無言で渡った。窓を通し、空からはうらかな春の日差しが柔らかく降り注いでいる。

すでに式典ははじめられており、一目見ようと駆けつけ、入る事を許された幸運な市民が眼下にくり広げられる洗練された儀式を見守っている。外からは入りきれなかった市民が新たな名所でせめて思い思いの春の祭りを楽しもうとする活気に満ちた声や音が聞かれ

た。

儀式は劇場形式に円状に作られた神殿の広場で行われている。石の階段に観客は座り、その上には日よけの為に大きな布が天井代わりに張られている。客席の二階中央部にはカルート王とその妻メリツサ。脇侍を神官長と宮内大臣シプレが陣取り、各諸侯とその妻もその後ろで式の進行を見守っている。

一方、舞台上は上を覆う布はなく、明るい日差しが白い石に反射して輝き、荘厳でそこだけ異空間であるかのような効果をもたらしていた。

戦勝記念と神おろしを兼ねた儀式は威厳を見せ付けるためか長丁場だった。

「では、いきなさい」

神官の合図でイリスはゆっくり歩み出る。

すでに陽は傾き、辺りには松明もともされた。それでも観衆が帰らなかったのは偏に『奇跡の舞手』と称された前評判の高いイリスの舞を見るためだ。

イリスはキツと前を見た。

最後まで舞いきれるとは思っていない。ただ、気づかれて捕まる前にせめてベチベル神の祝福の祝詞を叫ぶつもりだ。そうしなければなぜ自分が捕まるのか、ここの神殿にどの神が下ろされたのか観客にはわからないだろう。

イリスが舞台の中央に現れると、ざわめきが一転、静寂に包まれた。誰もがイリスの一挙手一投足に注目する。松明の明かりは揺らめき、時折はぜる。幻想的な雰囲気だ。

どこかにいるだろうシリアの姿を探したが、客席は暗く分らなかつた。舞をする時いつも正面で見えてくれたラシルがいない事は分っていたが、代わりに先日唇付けられた右手の甲が熱く感じられた。

イリスは正面のカルート王に決められた通り礼をして、始まりの型を取る。

（さあ、最後の舞だ）

イリスはゆっくり動き出した。楽器も拍子もない、ただイリスの動きのみの舞。

人々の意識を絡めとり奪うように優雅に指先を動かす。次第にため息さえも聞かれなくなり、イリスは静寂の支配者になった。

自分の意識が舞に入り込んでしまう前に、イリスは気づかれないようにゆっくりと舞を変えていく。

（スカトル国の崇めるイソアミルの舞から、コヨルテの民が信仰するベチベル神の舞へ）

イリスは舞を変え終わると心に従い、自分の意識を開放した。そうすると舞い終わるまで意識は自分の元には帰ってこない事は経験上知っているが、逃げるつもりは全くない。後はなるようになれ、だ。全てを受け入れる覚悟はもう出来ている。

あまりの滑らかな舞の移行に観客は言うまでもなく、インセンの神官でさえ、舞の途中まで気づかなかった。

「舞が違う!」

カルト王の隣にいた神官長が顔色を無くしつつ立ち上がり叫んだ。その声でイリスの舞に見とれていた神官たちは驚き、それを聞きつけた近くの観客が騒ぎ出した。

「何をしているの? 早く止めて頂戴!」

もともとこの神殿の建設を思い立った王妃のメリッサは倒れんばかりだ。

「今すぐやめさせるのだ」

神官長の怒りに震えた指示に、慌てて舞台に飛び出した神官達は再び驚き、天を仰いだ。

「…雨だ」

夕闇せまる緋色の空から雨がさらさらと降り注ぐ。松明の暖かい光に照らされた雨は、金糸が舞い降りてきたようだった。

「神が望んでいるのか…?」

雨は神が喜ぶ御験。屋根の下にいる観客にも雨が降っていることは一目瞭然で分かり、騒いでいた人々は一気に静まり返った。そして優しい雨に濡れながらイリスが続ける異教の舞を、ただ息を呑ん

で見つめていた。

雨が降っていることは意識の遠くで分ったが、イリスは気にすることなく舞い続けた。ただ、続けられる事が嬉しかった。そして終るのが悲しかった。

最後の舞を終え、イリスは息を弾ませながらも今までにない充実した気持ちに浸っていた。

(いつまでもここにいたい。そして舞続けたい)

そう心は強く望んだが、イリスには最大の役目がまだ残っている。コヨルテの民の首謀者としてここで捕まるのだ。

イリスは自分呼び戻すと、カルート王を見上げた。周りが舞を終えたイリスの扱いにあたふたしている中、王一人が悠然と、しかも笑っているようにさえ感じた。どんな時でも冷静を保つのが王たる者かもしれないが、イリスは王の態度に違和感を覚えた。

誰もイリスに近づこうとしないので、さらにベチベルの祝福の祝詞も叫んだ。人々には完全にこの神殿に彼らにとっての異端の神、ベチベルが下ろされたと見えただろう。

「とりあえず、拘束しろ」

そこまでしてやっと結論が出たようだ。

(そうこなくっちゃ)

イリスは微笑み、捕縛者を待つ。彼らが舞台端から現れたのを見

た時、神殿内が閃光に包まれた。

イリスはあまりの眩しさに目を瞑ったが、次にあけた時は何故か真っ暗だった。どうやら全ての松明が消されたようだ。

ばさつと大きなものが落ちる音がして、客席の方から悲鳴が上がった。同時に風圧も感じた。あちら側では混乱が起きているらしい。

(何?)

全く事態が分からないイリスは立ち尽くした。

「あっ」

不意に後ろから胴をつかまれ、鳩尾に痛みが走る。

「すまない、後で幾らでも怒られてやるから」

遠のく意識の彼方でイリスはそんな声を聞いた。

第26話

イリスはゆっくりと瞳を開けたが、自分が今どこにいるのか全く分らなかった。そのままぼんやりとした頭で、天井に映る揺れる影を見つめた。

ちゃんと捕まったのだろうか。

だが、牢の中とは思えない。イリスの体の下には柔らかな布が敷かれており、丁寧にケットまで掛けられていたからだ。

「気づいたか？」

声のする方に瞳を向けると、ラシルが安堵の色を滲ませながら微笑んでいた。

(ここは天国かもしれない)

イリスもつられる様に微笑み返した。会いたい人に会わせてくれるとは神もなかなか粹な事をしてくれる。

ラシルは腕を伸ばすと、イリスの髪を何度も何度も梳く。その心地よさに初めはうつとりしていたものの、そのあまりの生々しい感触にイリスは顔色を変えた。

「本物!？」

イリスは起き上がるとラシルの腕を掴み尋ねた。ラシルはイリスが掴む腕の力に驚いた表情を浮かべたが、直ぐ笑顔に変えた。

「俺の偽者がいるとは知らなかった」

イリスは啞然とラシルを見つめた。それが済むと次には怒りが湧いてきた。

「嘘つき。インセンから出るって約束したのに！」

「一人で出るとは言ってないぞ。『出る時はイリスと共に』と言わなかっただけだ」

怒るイリスにもラシルは表情を変えない。イリスの側にいられるのが嬉しいらしい。その表情を見ているとイリスも怒れなくなってくる。

「…詭弁だよ」

そう言うのが精一杯だった。

イリスは落ち着くと、今度は神殿のその後が気になりだした。気を失ってからどうなったのだろうか。

「忙しいな。気持ちは判るが、もう少し休んだらどうだ？」

ラシルは笑みを苦笑に変える。

「もう元気だよ。シリアがどうなったか知らない？」

初めはイリスとシリアの二人が首謀者として捕まる事になっていた。だが、イリスは自分一人で罪が被れる様であるならばそうした

いと密かに思っていた。ナナの為にもシリアには生き残って欲しい。それなのに、自分だけ助かり、シリアが捕まっていたのでは全くイリスの意志に反する。

「客席で姿を見た。ジンが連れ出す手筈になっていたが、きっと上手くやってくれているだろう、としか今はいえないな」

それぞれの役割をこなした後、皆決められた場所に避難するのだが、安全を考えて一箇所にしなかったと言う事だ。

「皆が無事だっけいつ分る？」

「明日には」

「そう。一つお願いがあるんだけど」

イリスは表情を引き締め、ラシルを見た。

「無事が確認できたら、僕をサンデラ將軍の所に連れて行ってくれない？」

ラシルは驚きの声を上げた。

「父に会うのか？」

「うん。舞手に推薦してもらったのに、こんな事に巻き込んで申し訳ない。せめて僕を引き渡す事が出来れば罪も軽くなるんじゃないかな」

ラシルは首を横に振った。

「父が聞いたら断るよ。そういう人だ」

「でも嫌だよ、迷惑かけるの」

食い下がるイリスにラシルはため息を一つ吐いた。

「怒らないと約束してくれたら、話したい事がある」

ラシルの前置きに怪訝の顔をしながらもイリスは頷いた。

「イリスとシリアには秘密にしていたが、父サンデラとコヨルテは手を組んだんだ」

思いがけない言葉に、イリスは怒るところではなかった。理解できなかつたと言う方が正しいかもしれない。

「ありえないよ」

あまりのことに思わず軽く笑ってしまった程だ。サンデラとコヨルテはいわば『犬猿の仲』。…すくなくともコヨルテの民は国を滅ぼしたサンデラ將軍を憎んでいるはずだ。

「コヨルテが今後反乱を起さないという代わりに今日の計画に父が手を貸すってね。今回の計画は正直父の協力無くしては成功しなかつたと言ってもいい。それにイリスを最終的に舞手に選んだのは王自身であることが重要だ。父一人を誰も責めはしないさ」

「なんだ…、そうだったんだ」

イリスは急に肩の力が抜けた気がした。

「だが、一つ計算外だったことがある。イリスの舞だ」

「僕の舞？」

どうしてなのかわからない。何かまずいことでもしただろうか。不安の表情をみせるイリスにラシルは起用に片眉を上げた。

「やはり『奇跡の舞手』と言われただけはあるな。雨が降った事を覚えてるか？」

「なんとなく」

はつきりとは覚えていないが、そんなような気もする。

「あれで神官長は大慌てだ。イソアミルの神がベチベル神の舞を喜んでるってね。民衆もそう信じるとやりやすいのだが」

王より上は神しくない。その神が認めたのなら誰も文句は言えないだろう。

イリスは自然に目から一筋涙が零れ落ちた。

「僕、死ななくていいかもしれない」

覚悟をしたと思っていたが、今思うと全く出来ていなかったようだ。実は心のどこかでとても恐れていた。怖かったのだ。

震えるイリスをラシルは優しく抱きしめてくれた。

「死ぬのは俺が許さない。それに、まだ計画は終わっていないんだ。最後にやらなければならぬことがあるのだが、それが上手くいかどうか一番気がかりなんだ」

ラシルは眉を寄せた。腕の中から見上げたイリスも同じように眉を寄せる。

「それは、何？」

「最後にイリスを連れて約束どおりインセンを出たいのだが、イリスは俺について来てくれるだろうか？」

真面目腐った表情に、イリスは思わず噴出してしまった。

「ラシルらしくないね。だめもとで説得してみたら？ 本人も目の前にいる事だし」

イリスの言葉に、ラシルは不敵な笑みを浮かべた。

「それはそうだな。イリスがどの方法で堕ちるか分からないから色々試すでしょうか」

第27話

神殿の神おろしの日から一夜が明けた。

まだ朝靄の残る中、手筈どおりの合図を確認したラシルは注意深くドアを開けた。

「イリスは大丈夫だった？」

その隙間を抜けて風の様に入り込んできたのは手筈どおりのアクア、ではなくメノウだった。

「アクアはどうした？」

「同じ顔なんだからいいじゃん」

そう言って取り合わず、メノウはイリスのいる部屋に入った。

「メノウ！ よかった、無事だったんだね」

イリスはメノウの姿を見るや、ぱつと立ち上がる。

「うん、モスが付いててくれたし。まあ、一人でも余裕だったけどね」

お互いの無事を確かめ合い、喜び合った。ラシルは二人の喜びに割り込むのを悪いと思いつつも一歩前に進みでる。

「他の皆はどうだ？」

「外は昨日の事件で持ちきりだよ。やっぱ『雨』が効いてるね。鬼神かもしれないってイリスのことを街の人は恐れているカンジ」

ラシルの問いには答えず、被せるようにメノウはいつも以上に明るく言う。ラシルは不自然さを感じた。

「メノウ、アクアは何故来なかった？」

ラシルはこの計画の責任者として、手筈通りに物事が進んでいないのではないかと危惧しはじめた。

「なんだよ、アクア、アクアって。俺じゃ不満なわけ？ イリスに会いたかったから代わってもらったんだよ」

強気な発言のわりにメノウはラシルと目を合わそうとしない。こういう場面で普段のメノウなら率先して目を合わせてくるはずだ。

「隠し事はなしだ」

何か予期せぬ事が起こっているのであれば、早急に立て直さなくてはならない。

ラシルに腕を捕まれ、メノウは舌打ちをした。

「ミルテから守ってくれるのなら話す」

「ミルテ？ 彼がどうした」

出てくると思っていたいなかった名前だけにラシルは不安になる。メ

ノウは掴まれたままの腕を振った。

「守るの？ 守らないの？」

「分った」

約束を取り付けて、ようやくメノウは話し始めた。

「だから、ミルテが昨日逃げる途中でちょっとやられちゃって怪我したんだよ。でもそれはアクアを庇ってのことだったから、アクアは責任感じちゃって側を離れたがらないわけよ。で、俺が代わりに来る事になったんだけど、その時にミルテから『ラシルに話したら殺す』って口止めされたんだよね」

弱みを見せたがらないミルテらしいものの言い様だ。

「…ごめん」

イリスは元を糺せば自分のせいだと思ったのか、落ち込んだ声で謝った。メノウは非難するようにラシルを見る。

「ほらー、だから言いたくなかったんだよね。でも他の人は皆元氣だから心配しないで。もちろんシリアもね」

話さない理由はイリスのためだけじゃないだろう、とラシルは言いたかったが、イリスを励ますメノウの姿に免じてやめた。

「でも、それは心配だな」

ミルテは嫌がるだろうが、出来る事なら今すぐにも様子を見るに

行きたかった。だが、今はまだ自由に動けない。

「じゃ、イリスの無事を皆に知らせなくちゃいけないから俺帰るわ。ミルテの件はちゃんと守ってよ」

ラシルに釘をさすメノウにミルテの病状報告を頼み、ラシルはメノウを出口まで見送る。ドアを開けると出会い頭にジンがいた。

「今度はジンか」

また計画外の人物が現れた。彼の顔は真っ青で、大きな体さえ小さく見える。

(今日は、厄日か?)

ラシルは天を見上げた。

「急に伝えなくてはならないことが出来て、他の人に任せられなかったから」

ジンの言葉にラシルは彼を招き入れた。帰るはずのメノウも一緒についてきた。

「なにがあつた?」

今日は聞いてばかりだ、と思いつつもジンが話しやすいように冷静に努めた。

「サンデラ将軍が、その……」

ジンは言いづらそうに口を開く。

「將軍が？」

ラシルが辛抱強く聞きなすと、ジンは一気に続けた。

「ラシルがイリスを連れて、すぐ王宮まで来て欲しいって」

思いがけない言葉にラシルは眩暈がした。当初の手筈ではこのままイリスをインセンから遠ざける筈だった。今日は本当に厄日かもしれない。

メノウは気色ばんでジんに食ってかかる。

「なんでイリスが王宮に行かなきゃならないんだ？ 捕まりに行くようなもんじゃないか！」

「そうだけどさ」

ジンも苦しそうな顔を見せた。

「ねえ、ラシル。もう今からインセンを出た方がいいんじゃないの」

メノウはラシルの腕を掴んだ。

（メノウの案も一理あるが、父が裏切るとは考えられない。だが、冷徹といわれた將軍でも有るし…どっちだ）

ラシルが思案に暮れていると、隣の部屋にいたイリスがこちらにやってきた。

「話は聞こえた。僕、いくよ」

「駄目に決まっているじゃん」

メノウは驚いてイリスを振り返った。イリスは淡く微笑む。

「このまま逃げたらまた皆に迷惑かけちゃうし、かといって一人で逃げ切れる自信もない。初めは捕まるつもりでいたわけだし、どうせなら堂々と王宮に行きたい。コヨルテ人として卑怯者になりたくないんだ。連れてってくれるよね、ラシル」

「ラシル、駄目だよ」

イリスとメノウに同時に見つめられる。ラシルは目を閉じて暫く思案し、答えを出した。

「行こう、王宮へ。だが、捕まりには行かない。何が何でも二人でまた戻ってこよう」

ラシルは瞳を開け、イリスを見た。彼もラシルを見返す。

「出来る限りがんばるよ」

「出来る限りじゃなくて、絶対戻ってくると約束しろよ」

メノウはイリスの手を掴み、暫く離そうとしなかった。

第28話

王宮に行くためにジンから聞いた場所へ行くと、馬車が用意されていた。貴族が乗る豪華な設えの馬車で、中にはビロードの真っ赤な布が敷き詰められている。御者はラシルとイリスの姿を確認すると、無言で扉を開けた。

「いい待遇だな」

油断は出来ないが、イリスをあまり人目に曝さないで王宮までいけるのはいい。

隣に座るイリスは緊張して身を硬くしている。少しでもほぐせれば、と思いいラシルが手を軽く叩くと、そのまま手を強く握り返され、王宮へ付くまで離さなかった。

（一度助かると思ってしまったから余計に辛いだろっな。やはりメノウの言う通り、無理やりにも逃げた方がよかったか）

ラシルは何が最善なのか測りかねていたが、イリスに心配を悟られないように顔を引き締めた。

「こちらへ」

馬車を降りると、案内役の女性が緊張した面持ちで二人を迎え出した。

王宮に入り、広い庭園を抜ける。明るい日差しの中、庭は春の花で溢れ蝶も沢山飛び交っていたが、今日ばかりは愛でる余裕もなか

った。

途中、多くの人に出会った。みな遠巻きでこわごわと眺め、後からひそひそと話し声が聞こえてくる。『奇跡の舞手』はすでに人々の心に畏怖の念を植えつけているようだ。

(それが吉と出るか凶と出るか)

ラシルは拳を握り締めた。

長い廊下を抜け、奥にある広間へ通される。ラシルは知らなかったが、此処はイリスが試演を行った場所だった。

「ここで待つように」

案内の女性はそう言うと、そそくさと下がっていった。広間に残された二人は自然と顔を見合わせた。

「大丈夫だから」

根拠は何もなかったが、ラシルは自信ありげに微笑んだ。だが、それは同時に自分にも言い聞かせるための言葉かもしれない、とラシルは思った。

「うん、分ってる。ラシルはいつも僕を助けてくれるからね」

イリスも、緊張は隠せないが、微笑み返した。そう、彼の笑顔をずっと見るためにも今を絶対乗り切らねばならない。ラシルは気を引き締め、全ての神経を研ぎ澄ませた。

足音がして、ラシルとイリスは跪く。足音からして五、六人は来たようだ。

「待たせたな。顔を上げよ」

共に来たシプレ・シガーの声にラシルとイリスは従う。

(王とシプレと父に部下二人か)

ラシルは耳を濟ませたが、他に潜んでいる人はいないようで少し安心した。だが、シプレの上機嫌が引つかかった。

「そちがサンデラ將軍のご子息か」

「はい、ラシルと申します」

どのような流れになるのか身構えながらもラシルは頷いた。

「さすが、將軍の血を引いていると言つべきか。こんなに短期間で異教の舞手を捕まえるとは」

シプレは何をいつているのだろう。訳が分らないラシルは、思わずサンデラを見た。

サンデラはラシルと軽く目を合わせるとシプレに向いた。

「礼儀がなくなって申し訳ない。宮内大臣にお褒めの言葉を戴いて驚いているようだ」

「まだまだ若いな」

シプレの笑い声が広間に響く。

(この展開をイリスはどう思っているだろうか)

イリスがシプレの話を信じていなければいい。不安に苛まれながらラシルは周りに気づかれないようにイリスを見たが、意外にも彼は表情一つ変えず前を見ていた。

(信じてくれているんだな)

自分だけ慌てていた事をラシルは恥ずかしく思った。それにしてもイリスの落ち着きはどうかだろう。

(俺も見習わなくては)

ゆっくり息を吸い込むと、冷静になっていく自分が分った。

「さて王、この者の処分ですが」

シプレは神殿建築を中心となって携わってきただけに昨日の顛末はかなり怒り心頭だったようで、理性でおさえているものの、にがにがしくイリスを見る目は隠しようがなかった。

「そうだな。たしか將軍の推薦だったな」

「はい。こうと知っておれば、と悔やまれますが全く気づきませんでした」

サンデラは王に頭を下げた。

「私も、こんな悪党見た事がありません。練習では何食わぬ顔でイソアミルの舞いを舞っていたくせに！」

馬尻にのってシプレが悪態を付く。カルートはシプレが落ち着くまで暫く間を置いた。

「異教者の舞手よ、残念だが…」

ラシルはシプレがやりとイリスを見て笑うのを見た。隣ではさすがのイリスも息をのむ気配が感じられる。

「神も認める素晴らしい舞手だった、と言わざるをえない。ラシルも同意であろうな」

カルート王の言葉にシプレ、イリス、ラシルは三者三様に驚いた。

シプレは、王がイリスを許した事に。

イリスは、自分が王に許された事に。

ラシルは、王が今回の一連の背景を知っている事に。

いつから王は計画を知っていたのだらう。ラシルが儀式前に神殿でカルートに会った時は知っているようには見えなかった。

(計画を聞いたとすれば父からだらう。しかし神殿をコヨルテに与え、反乱停止と引き換えにする案を父から王へ伝えるのはイリスをインセンから逃がした後のはずだ)

知っていたのであれば、何故イリスが新しい神殿で舞うのを王は止めなかったのだろうか。何故イリスを許す気になったのだろうか。疑問は増えるばかりだ。

(父の事だから、王がイリスを許すという意向を分った上で俺達を王宮に呼んだのだろう。とにかく、この場でイリスに危害を加えようと思っているのはシプレだけだ)

ラシルはもう少し状況を見守る事にした。

「何を仰るのですか!」

シプレは慌てて王に叫んだ。当然の反応だろう。だが、一方のルートはしれっとしていた。

「たしか、神殿を建てる宣言をした時に雨が降ったな。その時は神の意思だと喜んでいただけではないか」

「そうですね…」

事実なのでシプレは口ごもるしかなかった。

「今回も彼が舞って雨が降った。これはどう説明すればいいか? 市民はすでにあの神殿にベチベル神が下ろされたと信じてしまっている。このままではせっかく建てた神殿に誰も詣でないであろうよ。だがそのまま廃れさせるのもつたいないと思わないか?」

「ほう、ではどういたしましょう」

カルートの言葉を受けて、サンデラは興味をそそったような口ぶりで聞いた。

「コヨルテに慣れてやれ。將軍はよく分っていると思うが、もうコヨルテの反乱に付き合うのには飽きた。今がいい潮時ではないか」

カルートは親しげに不満げなシプレの肩を叩いた。

「そうがっかりするな。これからは軍事費が軽減されるぞ。一応暫くは神殿とその周りを含めたあの地域の治安維持を將軍に頼む。悪いがもう少しコヨルテに付き合ってくれ」

「畏まりました」

「義父上もよろしいな」

「…はい」

義父シプレに了承を得るだけのカルートとサンデラによる申し合わせの『儀式』は滞りなく終わったようだ。これで後日、今回の事が正式に発表されても他の諸侯が驚く中、彼は驚いて恥をかくことはない。事前に知らされていたという優越感さえ感じるだろう。それは義理の息子としてのシプレへの優しさだが、ラシルは素直に教えない辺り、カルートの『悪戯心』も感じた。

カルートは話の流れに満足し、イリスを見た。

「名は何と言ったかな」

「イリスです」

「イリスか。我々の宗教ではイリスは恋の女神だが、そなたの宗教では天界と人界をつなぐ虹の神だとか」

「はい」

カルトはイリスに目を細める。

「そなたの舞は初めて此処で見た時もすばらしかったが、神殿での舞はさらにすばらしかった」

「…ありがとうございます」

責められこそすれ、誉められるなどとは思ってもいなかったのに、ここまでの賛辞を受け、イリスはかえって戸惑った様子を見せた。

カルトは今までの笑顔を一転、すつと表情を変える。

「そなたの舞は凄まじすぎた。この調子でインセンにある大小全ての神殿を異教に変えられても困るのでな、命まではとらぬが、私の許しがでるまでインセンへの立ち入りを禁じる」

イリスはまるでカルト王の言葉を、見知らぬ異国の言葉で話されたかの様にきよとんとした顔を見せた。

「イリス」

ぼつつと佇むイリスにラシルは小声で呼びかける。イリスは慌てて恭順を表すため膝を折り、頭を下げた。

ただで許されると思っではいなかったが、初めに思っていたより全く軽い沙汰だ。イリスにとっては一番気にしていた極刑の憂いがなくなつたに違いない。ラシルはこっそり安堵のため息を漏らした。

「王！ 甘すぎます、甘すぎますよ」

額に血管を浮かばせながら叫ぶシプレを王は片手で制した。

「次にラシル」

カルート王に呼ばれ、イリスを見ていたラシルは顔を上げた。

「はい」

「そちは今回の異教の舞手を捕まえた手柄の恩賞として、私の家臣に正式に取り立てる事とする」

おや、という表情をサンデラが見せた。と言うことはここからは彼らが申し合わせた筋書きではないらしい。

王直属の家臣になるのは名誉なことかもしれないが、今のラシルには迷惑な話に他ならない。王付きの家臣となればインセンに留まらなくてはならない。仲間はおるか、イリスには全く会えなくなる。

ラシルには断る以外なかった。

「折角のお話なれど」

「遠慮はいらぬ」

カルートの顔は微笑んでいるものの、有無を言わせぬ雰囲気をもし出している。こういう時のカルートは何を言っても聞かない事を子供の頃の経験で知っていた。

(どうせ断れないのなら…)

ラシルは姿勢を正すと優雅に手を胸に当てた。

「ありがとうございます」

サンデラはラシルが再び断ると思っていたのか、彼には珍しく素直に驚いた表情を見せた。イリスは自分との関係をどう演じればいにか分っているようで、内心はどう思っているか分らないが、身じろき一つしない。

「しかし、王。私の性格をご存知ならば分ると思いますが、誰に似たのか一箇所にとどまる事は苦手なのです。もしよければ家臣に任命した上で父サンデラの元に預けていただけませんか？ 地方の情報収集要員が足りないと聞いております。それに任命していただければ、私の今までの傭兵での経験を生かせますし、王のお役にも立てる事もお約束できるでしょう」

「そうなのか？ 將軍」

「はい、それは事実です」

カルートの問いに、サンデラは苦笑を堪えた真顔で頷いた。

ラシルは一呼吸置き、静かに切り出す。ここからがラシルにとっ

て一番重要なのだ。

「それに、すぐさまこの異教の舞手を一人で釈放するのは危険です。いつまた誰に利用されるかわかりません。ついでに私に彼を監視させる役目をお与え下さい。インセンに入らないように、そして悪い虫がつかないように」

途端に今まで沈黙していたシプレが口を挟んだ。

「そうです。彼は危険なので、監視は必要だと思います。電光石火のごとく異端者を捕まえた將軍のご子息であれば適任かと。王、ラシルにお命じなされよ」

思わぬ人に応援されたものと、ラシルは苦笑した。ラシルがイリスをインセンへ連れてきた張本人という事実をシプレが知らなくて本当によかった。

(これで公然とイリスと共にいられる)

カルートは残念そうな顔を見せたが、シプレが何度も進言するの
で仕方がないとばかりに頷いた。サンデラは軽く片方の眉を上げる
にとどめた。

「わかった。ではイリス、五日の内にインセンから出るように。そ
してラシルはしっかり監視をするようにな。二人とも雨を降らせた
神に感謝せよ。感謝する神は…どちらでも構わん」

そう沙汰をだし、カルートは部屋から出て行った。

「王！ そんな事を仰ってはなりません！ そもそもこの王家はイ

ソアミルが…」

シプレは今日何度も叫んだせいで声を嚙らしつつもなんとか声を張り上げ、二人の部下と共にカルートの後に慌てて続き、広間を出て行った。

カルートは治世者である王であると共に十年の戦争を経験した武人でもある。彼の願いは民の安寧であり信仰の強制ではない。スカトル国の王としてイソアミルを最高神とするものの、あれが彼の本音なのだろうとラシルは思った。

「サンデラ將軍、すみませんでした」

イリスは残ったサンデラに頭を下げた。サンデラは辺りを見回し、誰もいないことを確認してからイリスに近づいた。

「謝る必要はない。今回の結果はお前の手柄だ。実は神下ろしの前日、私は王にだけ計画をお話申し上げた。すまない、スカトル国の將軍としてやはり黙っている事は出来なかったのだ」

「どうして、…いや、それで、王は何と…?」

父はカルートの性格を知っているから話したのだろう。だが、下手をすれば計画自体遂行できなかったかもしれない。言いたい事は沢山浮かんだが、ラシルは我慢強くサンデラの言葉を待った。

「將軍の息子は相変わらずだな、と笑われた。そしてお手並み拝見といこうと仰られた。が同時にラシルの段取りに不備があり、舞手が失敗すれば王は私にコヨルテの殲滅を指示するとも仰った。確かにあの時、コヨルテ反乱の中心人物がインセンにいたのだから一網

打尽の絶好の機会でもあったのだ。まあ、今回は二人の働きでそうはならなかったのだが…」

サンデラは、首を振り辛そうに眉を寄せた。

「例えラシルの計画が成功していても、王がお命じになればお前を追いかけて捕まえたかもしれない。私は王の命令には逆らえないし、逆らうつもりもない。そのようにしか私は生きられないのだ。だが、雨が降った。それで王はラシルの計画に乗り、イリスを助ける事をお決めになった。あの雨がお前の命を救ったのだ。雨で諸侯や民衆は何も言えなくなったのだから。そしてコヨルテの民も我が兵も命を落とさなくてすむ。この度の結果で多くの命が救われた」

サンデラは、イリスに真摯な表情を向けた。

「王も仰っていたが、舞も素晴らしかったし本当に雨が降って良かったと私も思う。…私はお前に謝られる資格はないのだ。むしろ謝るのはこちらだ。コヨルテの民には辛い思いをさせてすまなかった」

「將軍…」

頭を下げるサンデラに、イリスはそれ以上何もいえなくなってしまうたようだ。そのかわり、首から提げていた袋をきゅつと握った。きっと天国にいるイリスの母や仲間達にサンデラの言葉を伝えているのだろうとラシルは思った。『イリス』という名はカルートも言っていた通り、天界と人界を結ぶ美しい虹の神の名だから。そして、ラシルは過ちを素直に謝る事の出来る父を誇りに思った。

サンデラも去り、急に静寂を取り戻した広間で残された二人は、どちらからともなく緊張から解き放たれた安堵のため息を漏らした。

「無事に帰れそうだな。メノウとの約束が果たせてよかった」

ラシルはようやく心からの笑顔をイリスに見せると、イリスも微笑み、そっとラシルの腕に触れた。

第29話・終章

イリスとラシルが王宮に呼ばれてから三日後、王からインセン市民に向けて、コヨルテⅡラグドとの和睦と新しい神殿の今後についての沙汰が出された。

賛否両論はあるものの、仕方がない、と言う雰囲気が大勢を占めている。今や神殿の神おろしの儀式を目の当たりにした幸運な市民によりイリスの舞は半ば伝説化する勢いさえあった。敵ながら美しい復讐は人々の興味をそそったようだ。そして、もうコヨルテの反乱に怯えなくていいという安堵感がインセン市民にさらなる笑顔と活気を与えた。

王の命令でインセンを去る日を明日に控え、イリスはラシルと共にナナの元を訪れた。ナナは少し離れた町でコヨルテの仲間にかくまわれていたが、スカトル国とコヨルテⅡラグドとの和睦への動きが生まれ、その第一歩である新しい神殿のコヨルテ所有の決定に应じ、ナナが神官長になるのが相応しいという事で今日インセンの神殿に入ったのだ。ユリア、チファ、コリーもナナについて来たが、安全が確実に確認されるまでは、という事で今回は見送られた。

「結構すごい事になってるね」

イリスは呆然と辺りを見た。コヨルテの人々が神殿内を一生懸命清掃しているが、あの日の混乱の様子がまだ生々しく残っていた。倒された松明、一部破壊された彫刻、持ち主の分らない片足のみのサンダル。今は大勢で天井代わりに張っていた布を折りたたんでいった。イリスが暗闇で風圧を感じたのはこれが上から客席に落ちてき

たからだろう。

「イリスではないか！」

振り向けばジュネルが両手を広げて歓迎の意を示していた。イリスも軽く頭を下げ、それに答える。

「今回は大変世話になった。だが、イリスはインセンから…」

「はい、明日出ます。生きて出られるのも神のご加護のおかげです」

イリスは地面に手をつけ神への感謝を示した。もう今ではベチベル信仰を隠さなくてもいいのだ。ジュネルも同じように地面に片手をつけ短い祈りを捧げた。

「まだまだ直ぐには無理かもしれないが、此処で力を蓄えたら、もう一度コヨルテの町を再興しようと思う。その時また会おう。インセン以外ならどこへでもいけるのだろう？」

「ええ」

差し出すジュネルの手をイリスもしっかり握った。

「イリス！」

懐かしい声にイリスは弾けるように振り向いた。コヨルテの巫女の正装をしたナナがシリアと共にやってくる。ナナは長い裾が邪魔をして転びそうになりながらも、いち早くイリスの元に駆け寄ってきた。

「シリアから聞いたの。しばらく会えなくなるって本当？」

しがみつくななにイリスは頷く。インセンに入れないイリスは神官長になり神殿から出る事が難しくなるナナにはなかなか会えないだろう。

イリスはナナを抱きしめると、イリスが贈った櫛がナナの髪に挿されているのが目の端に入った。

「今日つけるってきかなかったのよ」

シリアが困った様に笑った。

「シリアも元気そうで、よかった」

今度はシリアと抱き合う。元々細かったが、さらに痩せた事が分かった。彼女はこれからナナ付の女官となる事が決まっており、ナナ同様インセンを出るのは難しくなるだろう。

「髪飾り、よく似合うよ、ナナ様。これからもお元気で」

イリスは楽しかった兄妹ごっこが終るのを寂しく思った。ナナはにわかに顔を顰めるとイリスにしがみついた。ナナも時が来た事を理解したらしい。

「シリア、ジュネルさん。ナナ様のことをよろしくお願いします」

イリスに二人は力強く頷いた。ナナは急に顔を上げると涙をぐくと拭った。

「ラシル」

邪魔しないようにと遠巻きにイリスの別れを見ていたラシルはナナに呼ばれ、軽く驚いた表情を見せながらもこちらにやってきた。

「約束を守ってくれてありがとう」

ナナは小指を立ててみせ、ラシルも笑いながら同じ仕草をした。

二人はどうしようもないくらい仲が悪かったのに、いつの間に和解したのだろう。

（しかも約束って何？）

イリスは二人の顔をかわるがわる見たが、二人とも笑っただけでも答えなかった。

「イリスの事をお願いします」

シリアはラシルの手を掴み、深々と頭を下げた。

「承知いたしました」

ラシルもシリアの腕をしっかりと取り、力強く約束をする。

「大丈夫、また会えるわ」

しみりとした別れを振り切るようにナナが明るく言った。

そうであればどんなにいいことか。

(これも神託の一つだったらしいのに)

今の状況では難しいとは思いますが、全てを輝かせて見せる陽の光の中、イリスはナナの言葉が確信となった気がした。

出発当日。日の出と共にインセンを去るためには暗いうちから準備を始めなければならぬ。

「これからまたよろしくな」

荷物運びに奔走し、明るくイリスの肩を叩いて走り抜けるメノウに、自分のために朝から申し訳ないと思っていたイリスの心は少し軽くなる。

(僕もがんばらなきゃ)

残りの荷を取りに行こうと振り返ると、ミルテが片手に荷をもつて此方にやってくるのが目に入った。

「駄目だよ」

イリスは慌ててミルテから荷を取り上げた。まだ怪我をして五日しか経っておらず、左手など全くと行っていいほど自由に動かせる状態ではない。左の口端にも痛々しい紫色の痣が出来ていた。

「動かないと体がなまりますからね」

人当たりのいい笑顔を見せつつミルテはもう一度イリスから荷を取り返そうとしたが、イリスは首を振って渡さなかった。

ミルテは軽く息をはく。

「あなたが責任を感じる事は無いと言ったでしょう？ 私が油断したんですから」

そういつてくれるのは有り難いが、体に巻かれた包帯を見るとやはり心が痛む。ミルテは軽くぼんとイリスの頭を叩いた。

「たまには怪我をするのも悪くないですよ。近くにありすぎると目に入らないものがあるってことも知りましたしね」

優しい声色に、イリスはミルテの顔を見あげた。

「あーっ、勝手に動くなっついていてるだろ」

アクアはミルテの姿を見つけると駆け寄ってきた。

「おはよう、イリス」

アクアはイリスにはにこやかに挨拶し、ミルテには怒った表情で彼の右手を引っ張った。

「安静なんだから早く馬車に乗れよ」

「此処のところずっとアクアは世話焼き女房みたいなんですよ」

ミルテは眉間に皺を寄せてイリスに言った。アクアは憮然とした顔をしたが、イリスには照れているようにも見えた。

「あのねー、ミルテが乗らないと他の荷物が詰め込めないだろ。仕事が進まないんだよ」

「ハイハイ、どうせ私は荷物ですからね」

「そこまでは言っていないだろ」

言い合いながらアクアはミルテを馬車まで連れて行った。

(アクアにとっていい傾向じゃないかな)

あのミルテが顔を顰めたと言う事は、かなりアクアに心を許している証拠だ。イリスはほぼ

皆の性格を把握できるようになってきた。

(だって、一年間ずっと一緒に生活してきたんだもんね)

去年の春の祭りに彼らに出会った。その頃はまさか此処までの付き合いになるとは全く思っていなかった。

「あれだけ言い合える元気があれば、怪我の治りも早まるだろうな」

ラシルがイリスの傍らに立ち、ミルテとアクアの後姿を見つめる。

「そうだね、看病してくれる人もいるし」

ラシルはミルテに怪我が治るまでインセンにいらしたと言ったが、ミ

ルテは大丈夫だと言って聞かなかった。本人は最後まで反対したが、代替案としてラシルは近くの町で傷が癒えるまでとどまる事を彼に承諾させたのだ。

ラシルは何も答えずそのまま黙り、沈黙が生まれた。

「どうかした？」

見上げると、じっと見下ろすラシルの瞳にぶつかった。

「王宮に呼ばれた時はどうなるかと思ったが、イリスが今こうして隣にいるんだなあ、と実感してた」

イリスはラシルに肩を竦めてみせた。

「なんだ、僕は全然心配してなかったのに。意外に臆病だったんだね」

笑うイリスにラシルは情けない顔をしてみせる。

「まったくもってそうだ。これからはイリスに守ってもらおうとしよう」

「まかせて」

イリスは胸をはって請合う。

(でも、実際は僕の方が頼っていた)

馬車の中で手を握られ、その力強さと暖かさにどれだけ励まされ

ただらう。王の前でさえ、ラシルがいたから気丈に振舞えた。そう、彼がいたからしっかり前を見据える事ができたのだ。そうでなければ本当は足が震えて立つ事が出来ないくらい怖かった。

荷物の詰め込みも終わり、後は出発のみとなった時、ラシルはイリスに言った。

「久しぶりにリスに乗るか？」

ラシルの提案にイリスは喜んで頷く。リスに乗るのは本当に久しぶりだ。

「あ、これ」

「まだ礼をいってなかったな」

「ううん、付けてくれて嬉しいよ」

リスの口にはイリスが贈った轡がはめられていた。リスはイリスのことを覚えていたようで、甘える仕草でイリスに擦り寄ってきた。

「これからもよろしくね」

イリスはそつとリスの耳元で呟く。

「なるほど、分った」

ラシルの納得した声にイリスは興味を覚える。

「何が分ったの？」

ラシルはリスの首を撫でながら、イリスにこれ以上ないくらいの最高の笑みを見せた。

「俺はいつもコヨルテ産が好きらしい。それも一流のね」

第29話・終章（後書き）

ここまで読んでくださって、ありがとうございます。
感想等いただけると嬉しいです。

また、次回作で会えることを楽しみにしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4936a/>

宙に舞う華

2010年10月17日03時15分発行